

# ガールズ&トランスフォーマー

ヘキサショット

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

トランスフォーマー道——それは婦女子の育成の王道と言われる競技

その姿は鉄の輝きのように凛々しく

その志は熱線のように真っ直ぐで情熱的

壮観さを有するこの競技は、国民的なスポーツとして親しまれている

その世界に、新たな希望となる少女達とトランスフォーマー達が生まれようとしていた……

トランスフォーマーとガルパンの再構成クロスオーバー物。

モチベーション維持と設定イジリや盛り込みの結果、原作アニメのシーンが出てきた場合に場所や会話内容が異なっているのはご了承ください。

一々台詞確認やらでDVD引っぱり出すの面倒だからね（小声）

追記・プロローグを追加しました 1／22

# 目次

プロローグ	1
第一話 嵐の来るまで	8
第二話 消えない傷跡	16
第三話 近づく始まり	26
第四話 結成！ 大洗トランスフォーマーチーム	39
第五話 初めての实战	50
第六話 親善試合	65
第七話 開戦！ 聖グロリアーナ	75
第八話 空の戦士	87
第九話 繋がる意地	100
第十話 原石	115
第十一話 トランスフォーマーのいる日常	128
第十二話 弱り目に祟り目	141
Spotlight: BIG CONVOY	156

## プロローグ

かつて、グレートウォー内戦があった。

機械に満ちた星、セイバートロン。

そこには、生まれながらにして2つの姿を持つ機械生命体が暮らし  
ていた。

彼らは姿を使い分け、半永久的な寿命と優れた知性を用いて惑星を  
黄金の繁栄期へと導いた。

しかし、共同体の肥大化が、その内に腐敗が広げる結果を導くのは  
至極当然であった。

彼らは彼ら自身が持つもう一つの姿で身分を区別し始めた。

求められる姿を持つ者はより良い立場に、求められない者は自然と  
過酷な労働へと身を落とす。

そのような社会へと、彼らは進んでいた。

始めはたった一人の狂人、たった一人のカルトから始まった。

彼にとって栄誉ある初版の論文———圧政の哀れな被害者であつ  
た炭鉱夫の死体に刻まれた論文は、多くの人々を惹き付けた。

自由を、平等を、権利を。

平等な世界を願った彼の元に集った賛同者達を従えて、彼は革命を  
起こした。

彼らは蹶起を覚悟させた圧制者達に、彼らが与えられる最大の感謝  
を———死を授け、彼らの名は人々に広く知れる事となった。

破壊する者デストロン……後に宇宙全体を荒廃させる原因となった革命家達  
は、更なる安寧を求めた。

己が種族に平和と繁栄をもたらす。

そう願ひ、自らの道を突き進む彼の後ろには、多くの同胞と相容れ  
ない異種族の骸が残された。

人々は、恐れながらもどこか尊敬を滲ませて彼の名を口にした。

メガトロンと。

だが、覇道を進むメガトロンに相対する者達が現れた。

彼と共に、一人の圧制者を打倒した者——生真面目な警察官は彼のやり方に異を唱えた。

自由と平和のために、他種族を貶めることを、彼は許せなかったのだ。

指導者の証であるマトリクスを胸に納め、彼は姿と名を変えて、力なき者達の為に立ち上がった。

サイバトロニアンの指導者の称号……プライムを継ぐ彼を人々は信じ、故郷セイバートロンの名に由来した組織——サイバトロンとして、力なき民は銃を手に取り彼の新たな名を讃えた。

オプティマス・プライム  
コンボイ司令官、と。

内戦は、400万年もの間、宇宙中を巻き込んで続けられた。

その間に、多くの英雄と狂人が現れては多くの兵の鉄屑と共に消えていき、戦火はやがてその火を灯し続けることすら困難になった。

母なる星、故郷セイバートロンは破壊され、汚染され、酸の雨が降り注ぐ惑星となった時には、サイバトロンもデストロンも、疲弊しきつていた。

お互いの正義もわからなくなりかけたその頃、宇宙に大きな災厄が訪れた。

サイバトロニアンにとって、全宇宙にとっての破滅の象徴。

超大型トランスフォーマー、ユニクロンの復活である。

宇宙終焉の体現。惑星を食らい続ける彼の者に多くのサイバト

ロニアンは絶望するしかなかった。

だが、これは契機であった。

ほんの一握りであったが、ユニクロンに対抗する者が現れたのだ。

彼らはサイバトロン、デストロンの垣根無く戦った。

自らの過ちによって荒廃させてしまったセイバートロンを、宇宙を守るために。

彼らは多くの犠牲を払いながらも、遂にユニクロンを完全に破壊することに成功した。

そして戦いの後、彼らは互いに歩み寄る事を始めた。

400万年間の長い争いの記憶は、いくら忘れようとも忘れられない。

だが、ユニクロンとの戦いで、彼らは忘れていた事を思い出したのだ。

自分達は一体何を求めて戦っていたのかを。

程なくして、内戦はセイバートロンの2つの月の一つ、ルナ2にて、メガトロンの敗北宣言をもって終戦を迎え、コンボイ司令官の号令と共に彼らは一つになった。

セイバートロン連合として再び手を取り合うことを選んだ彼らに残されていたのは、内戦に巻き込んでしまった宇宙中の異種族への償いと、荒廃しきった母星だった。

宇宙の安全を標榜する組織、銀河評議会はサイバトロニアンに対して一定の賠償と復興作業、重ねて辺境惑星への移住を決定。

荒廃した故郷の復興をするための僅かな人員を残して大勢は移住を余儀なくされたのだった。

それから間もなく—— 辺境惑星にて

スパークストーカーは歓喜していた。

興奮のあまり、エネルギーポンプはいつもより高い圧を掛けてエネルギーやサーボモーター回転用のオイルを循環させ、体がカッカッと暑くなる。

体を動かしたくて溜まらず、思わずビーストモードに変形して広大な水溜めにあるざらついた受け皿の上を駆け回っていた。

彼は彼自身あまり頭が良くない事を自覚していたが、いつもは下らなく見える様々な色が混ざり合い気色の悪い色にしか見えないオブリエヘや周辺の景色へと目が向いて、それは一体何だったかと考え始めた。

（確かライトブライイトは海と砂って言ってたかな？ ……いや砂漠だったかな。 まあどっちでもいい。 この木つてのもなんだかい

つもはヘンテコに見えるのになんだか格好良くみえる！)

二足歩行のモンスターへと変形していた彼は、腕に付いている鋭い刃で木を切断し、切り倒された木もバラバラに刻む。

全身の駆動系が過剰に回転していて全然落ち着かないのだ。

何故彼がこれ程に興奮しているのか、それは数時間ほど前に彼がかねてより気に掛けていた相手……ライトブライトへと、コンジャンクスエンデュラの儀”を申し込み、見事それに成功したからであった。

晴れて思いを寄せていた者と恋仲になった彼は、その喜びをどうにかして表現したくて堪らなかったのだ。

(花束をプレゼントしたはいいが、何かもつといい物を送ってやりたいなあ)

そう考えたスパークストーカーは、彼の思いつきのままに周囲の散策を始めた。

だが、落ちている物や自生しているものは酷く脆く何かを作るにも適していないように思えた。

そんなことを考えながら、視線をあちこちに向けていると、広い平野にあるモノを捉えた。

それは、辺境惑星の原生種で、毛に包まれた長鼻の生き物は、4つ足で地面を蹴りながら何処かへと急いでいるように見えた。

どこか見覚えがあると思ったが、確かサイバトロンの英雄の一人がその動物をオルトモードとしてスキャンニングしたという話を耳にしたのを思い出した。

だが、彼の目を引いたのはその4つ足毛長鼻から少し離れた所にいた一団であった。

その一団は原生種で構成されており、2足歩行で4つ足の長鼻を追いかけているように見えた。

そこまでであればただの狩りだ。どんなに知性のない畜生であってもその程度の事はする。

だが、その2足歩行の生き物は歩行に使わない足——所謂手に武器と思わしい物を携えていた。

(物を使える種族……知性があるのか?)

そう思った時には、既に彼はその一団目掛けて飛びかかっていた。

「……で? その後どうなった?」

移民団の旗艦にある会議用デスクに三人のトランスフォーマーが座っていた。

そのうちの一人、黒と白のツートンのトランスフォーマー———プ  
ロールがこめかみを押さえるようにして報告の続きを問う。

それに対して、若干の間をとり全身青のトランスフォーマー、サウ  
ンドウエーブが続けた。

「スパークストーカーハソノママ現住種ヲ、彼ノイウ『挨拶』ニ付キ  
合ワセタ。結果トシテ、彼ハ今洗浄スペースデ浴ビタ原生種ノ破片  
ヲ洗い流シテイル」

「そいつにはもう一度学習プログラムを受けさせろ。カウンセリン  
グもな」

溜息をつきながらプロールは一番気に掛けていた事を尋ねる。

「銀河評議会からは何と言われた」

「『知的後進種族との共存』ヲ言イ渡サレタ。ソレト『過剰な干渉  
の禁止』。コチラニ関シテハ何ノ判断基準モ提示サレナカッタ」

「私達の更正プログラムということか」  
「ハッ、こんな田舎くんだりまで飛ばされた挙げ句にやらされるのは  
お守りか。いやあなんとも泣ける話じゃあないか」

肩を竦めるようにして自虐混じりに軽口を飛ばすのは赤白黒のト  
リコロールに背中の翼が特徴的なトランスフォーマー———スター  
スクリームだ。

「……指示通りに進める。後進種族がどれ程の知性を獲得するかは  
定かではないが、友好的な関係を築くことを通知しろ」

「おいおい、言葉も話せないんじゃないのか? それに友好的って  
言ってもな、報告にあつたら『挨拶』でバラバラになっちまうような  
脆い有機生命体だ。しかも」

「マイクロン並に小さい。厄介この上ないのは認める」



「デバスターにすればナノコンだ。踏みつぶしても気づきやあしないな、マイクロンの方が踏みがいがある」

スタースクリームの言葉に、眉を顰めるプロール。  
すると、徐にデータパッドを取り出した。

「おいおい、ソシヤゲなら後にしてくれ。俺だってイベントを我慢してるんだ」

「……サウンドウェーブ、ブレインストームと開発班を集める。あとボンブシエルもだ」

「了解シタ」

プロールに言われるまま、サウンドウェーブは会議室を後にする。スタースクリームは先程の指示に対して驚きと嫌悪感を滲ませながら質問した。

「あの意地汚い虫に何させるってんだ……碌な事になりやしねえぞ」

「……必要な事だ。少なくとも、今はな」

「コンボイなら絶対やめさせるだろうぜ」

「今は司令官はいない、メガトロンもな」

最後の一言に露骨に嫌な顔をしたスタースクリームは席を立ち、会議室を後にしようとした。

だが、会議室を出る直前、ふと足を止めてプロールに話しかける。

「大変だよなあお互い……なあプロール」

「……仕方が無い。我々だけでやるしかないんだ」

「カリスマってのは厄介だよなあ、よくわかるぜ。偉大な指導者ってのは後任者に碌なもんを残さねえ。追い越す奴らの事も考えて欲しいもんだ」

そう言い残して、スタースクリームは今度こそ会議室を後にした。

一人残されたプロールは、会議室の壁の巨大なウィンドウへと目を向ける。

ウィンドウからは外の様子が一望できるが、このウィンドウが硝子やアクリルといった透明度のある物が外の様子を見えるようにしている訳では無い。

外部カメラから映し出された映像を、あたかも窓であるかのように

映し出しているに過ぎない。

その大きなウインドウには、青い水とある程度の大地に被われた惑星が映し出されていた。

「……私に出来るのですか、コンボイ司令」

遠くの廃れた母星にいる者の名を口にして、プロールは立ち上がった。

その目には憂いは無く、その足は開発室へと向けられた。

## 第一話 嵐の来るまで

「実に嘆かわしい事だとは思わないか、諸君」

重苦しい雰囲気の中、一人が口を開く。瞬間、空気がピンと張りつめ、その会議室にいた如何にも重鎮といった出で立ちをした老人達が身を強張らせた。

「我々は本来より崇高な運命を担い、その存在を生み出されたのだ……。だが今一度その目で世界を見てみるがいい」

論調に高慢さを滲ませつつ、彼は謳う。

「今の我々トランスフォーマーの惨状を！」

途端に会議室の照明が落とされ、彼の背後にあったスクリーン上にいくつかの映像や画像が映し出される。

その画像には多くの作業重機や自動車、さらには戦闘機や戦車と共はまだ年端もいかない少女達の姿が映し出されている。

そしてその傍らには機械の体を有した生命体……トランスフォーマーと呼ばれる者たちの姿があった。

「見るがいい……この墮落に身を落とした同胞の姿を！」

彼は怒りに身を震わせながら、唱える。彼の徹底した高潔さと種族としての誇りを。

「我々は再びかつての栄光を取り戻さねばならない……このような惨状から脱却するためにも」

そして、彼は宣言する。

彼の野望、そしてその純粹な願いを。

「私はここに誓おう……我々の再興の夢の実現と人間社会の、世界秩序の生誕を！」

その部屋に居る者達以外にとってはただの空虚な幻想にしか聞こえないような言葉。

だが彼らは知っていた。

目の前の彼……暁色に彩られたトランスフォーマーであれば、今の言葉を現実にしてしまうということ。

彼は拳を振り上げ、高らかに、そして昂然と嘯く。

「我がセンチネルプライムの名の下に！」

時は進み—— 大洗女子学園

生徒会室に設けられた応接スペースで三人の女子生徒が目の前  
資料を睨み付けている。その資料の渡してきた相手……眼鏡にキツ  
チリと七三分けにされた髪という真面目という文字を絵に描いたよ  
うな出で立ちをした文科省から来た役人、学園艦教育局長は表情をピ  
クリとも動かさず続けた

「今回の件ですが、突然のことで驚かれるのも無理はないかと」  
「当たり前です！」

片眼鏡をかけた短髪の少女——河嶋桃が声を上げる。  
渡された資料に踊る『学園艦廃棄に関する予定計画書(仮)』の文  
字を一瞥しながらポニーテールの少女——小山柚子は質問を飛ば  
す。

「(仮)の文字が訂正されていないのはいったいどういう理由で？」

「文字通りの意味です」

「ふーん……」

そういうと胸ポケットから手帳を取り出しペラペラと捲ると、確認  
するように言葉を続ける。

「実はこの案なのですが、こちらとしても急な話でしたので未だに修  
正すべき点があります」

「……学園艦廃棄に際しての業者関係の記載がありませんね」

柚子が資料を示しながら質問する。

対して彼は頷き資料を捲りながら答える。

「加えて詳細な予算割り振りや人員の決定もまだ完全とは言えない始  
末ですね」

「……なぜこんな未完成の書類を？」

玉虫色の返答に生徒会陣は若干の苛立ちを感じつつ、柚子は疑問を  
口にした。

「飽く迄も本決定はされていませんから……ニュース等はご覧になる

ほうですか?」

「ええ、それなりには」

「多少は……」

「……」

それぞれの反応を見つつ、局長はなら細かいことは説明ありませんねとつぶやき、話を続ける。

「来年度の衆議院予算委員会での目玉としてこの案を与党が提出する予定なのです」

「……今はそのためのコネクションと理解を得るための事前準備ということですか」

納得したように柚子は頷く。無論、その表情は納得からはほど遠いものである。

「ご理解が早くて助かります」

確かにこれほどの大事業を行うには文部科学省だけの権力ではお門違いな内容だ。

少なくとも戸籍回りの処理に法務省辺りの連携が必要になってくるのだろう。加えて地域住民の理解を得る等の根回しのために一足早く動いているということだ。

「以上の点を踏まえまして、生徒会長さんには前もって学園の生徒達への理解を得られるようにご協力頂きたいと思っています」

「……まだ本決定というわけではないじゃないですか」

桃があからさまに敵意を視線に込めながら訪ねる。

しかし、意に介さずといった様子で局長は答える。

「決まってからでは遅いのです。国政事業には速さも求められますから」

「しかし、完全に決まっているというわけでもないでしょう」

「……そうですね。もしかすれば、の話ですが」

メガネのブリッジを指で上げながら、慥無礼な様子で続ける。

「何かしらの功績を挙げることができれば、廃校に関する議論の際に考慮される可能性があるかもしれないですね」

「はつきりしない物言いですね」

「こちらもお役所仕事なので」

否定だけは鋭く返し、局長は内容についての本旨の説明を始めた。

1. 学園艦の運営及び維持の費用が年々かさみ莫大な額になりつつある。

2. 学園艦の構造上老朽化が進んだ場合の大規模移転は混乱を来す恐れがある。

3. 以上2つの理由から早期に学園艦という体制の解体を行う必要性が考えられる。

4. この提案は大洗女子学園だけでなく国内の学園艦全体に通知されている。

5. 長期的な計画の見通しを取っており、その中でも学業や部活動でのめぼしい成果の見られない学園から解体していく予定である。

6. 順次解体した結果や学園の功績に応じ、運営の目処が立つものは解体予定のリストから外れる。

長々と説明を終え、局長はふうと疲れを滲ませる溜息を吐き、出されていたお茶に手を付けた。

「以上のことから、その順次解体の槍玉に挙げられるのが大洗女子学園となる予定です」

渡された資料の一つに学園の入学者数の推移と成績平均の比較資料が載せられているが、確かに平均から一つ抜き出でたものがない。

「部活動の成績も振るわないようですし……数年前までトランスフォーマー道である程度成績を残してはいたようですが」

すると、局長の説明を遮るようにして今まで沈黙を通していた、小柄で長い茶髪をツインテールにまとめている大洗女子学園生徒会長

——角谷杏が口を開いた。

「ん……じゃあ、やろつかトランスフォーマー道」

「えっ」

「はあっ?」

「……」

杏の突飛もない発言に驚くのを意に介さず、杏は問う。

「優勝校になったら好成绩を収めたってことで一考の余地はあるんでしょ？」

「否定はしません」

「そ、ならやるだけやってみるか。あたしはやるよ、トランスフォーマー道。行くよ2人とも」

部屋を出ようとする杏に背中に向かい、では学生達への説明はお願いしますねと局長は投げかけ。生徒会室を後にしようとする。

「生徒会長さんだけは残ってください」

「……何？」

「お二人には必要ないお話です、一言だけですので」

戸惑う二人に先行つてと言い、言われるままに二人は生徒会室を後にする。

二人だけになると、局長が杏に向かって一言告げる。

訝しむ杏を余所に局長は退出を促し、杏もそれに従って生徒会室を後にした。

杏は通路の壁に掛けられたカレンダーを一瞥し、教育局長が残した言葉を反芻する。

どういう意図なのかはわからないが、今は怪しかろうとも継るしかない。

それが今にも切れてしまいそうな蜘蛛の糸であったとしても。

そう思った時には、杏の足は動き出していた。

「ほんじゃあここを……ニシズミ！おみゃーが答えてみい！」

「は、はい」

歴史の授業担当の悪魔博士が使う独特な訛りの強い名古屋弁に気を取られつつ、教科書の空欄の問題を再度確認する。

「えーと……ホットスポットです」

「うん、その通りだ」

設問が簡単だったことに安堵し、教科書の文字に目を走らせる。

「そのホットスポットからポワポワとトランスフォーマー達が生まれ

てくるんだな。ホットスポットは世界に片手で数える程しかないのは小学生でも習うことだで、よー覚えとけ」

カツカツとチョークで黒板に文字を書き込む悪魔博士。

書き終わると、そこには年号と名前が書かれていた。

「えりやー高度な文明を俺たち人間が生まれる前から持つとった彼らやけど、その技術レベルに人間は全く追いつとらん。これはかつてのトランスフォーマーの一人、タイレストが定めたタイレスト条約が関わっとる。この内容を簡単でいいから誰かバツチリと紹介してもらおうかの」

ぐるりと教室を見回す悪魔博士。

「じゃあここタケベ、答えてみい」

「はい」

長い茶髪の生徒——武部沙織さんは思い出すように目線を上に反らしながら答える。

「他種族への技術の公開と提供を禁止する、です」

「ビツタだ。よお答えられたなあ」

悪魔博士が満足そうに笑うと狙ったかのようなタイミングで昼休み開始のチャイムが鳴る。

「今日はここまでにしとく。次はこの条約の補足から始めるから教科書の30ページの資料をよお確認しとくようにの」

授業が終わくクラスがざわめき出す中、沙織さんともう一人の長い黒髪と淑やかな雰囲気をもとった女子生徒——五十鈴華が話かけてくる。

二人共転校してきたばかりでクラスに馴染めていなかった私に歩み寄ってきてくれた優しい人たちだ。

「悪魔博士の授業って楽しいけど、しょっちゅう何言ってるかわからなくなるよね」

「私も生粋の名古屋の出かと思っていきましたが、海外の出身の方らしいですよ」

「それにしても凄い流暢だね……」

学食でハヤシライスかエビフライ定食、持ち込みのウイロウばかり



食べている姿からコテコテの名古屋人なのかと勝手に思っていた。

「今日の学食何にする？ 私はヘルシーかなあ」

「沙織さんそればっかりだね……」

「私はいつもの和風ですわね」

学食へ行こうと教室を出ようとした瞬間、ガラリと扉が開きひやつと言いながら思わず後ずさる。

開け放たれた扉の先には、背の小さいツインテールと片眼鏡、茶髪  
のポニーテールの女子生徒がいた。

「あ、どうぞ」

用事のある別クラスの生徒だと思い、道を譲る。

しかし、彼女達は譲る道を通ることはなく、こちらをじいつと見てきた。

「……転校生の西住みほだな」

「え？ は、はい」

「みほさん、この方達は生徒会の人たちですよ」

困惑していた私に華さんが助け船を出してくれる。

納得しながら、何故私の事を威圧的に見てくるのだろうかと思っていると、片眼鏡の人が話があると言ってきた。

チラリと2人の方を見ると、先に席を取って待っていると云ってくれたので言われるままに生徒会の人に廊下の端に連れられていく。

すると、ツインテールの人がにこやかな表情を浮かべながら、ぐいっと肩を寄せて話しかけてきた。

「あたし、生徒会長の角谷杏。気軽に杏でいいよ」

あまりにもフランクな様子で接してくる杏に思わずはあと生返事で返す。

杏は表情を崩すことなく、言葉が続ける。

「でさあ、今日会いに来た理由なんだけども。必修選択科目、  
トランスフォーマー

T F 道とつてね」

「えっ？」

軽い様子で頼まれた内容とは裏腹に、思わず表情が強張る。

頭の中で走馬燈のごとく嫌な記憶がプレイバックする。

「この学校にはTF道は無いつて話じゃあ……………」

「今年から復活することになった」

突然の要求に、頭の中が混乱する。

それは自分がTF道を学んでいたという事が知られていたということと、自分のために起きてしまった不名誉な出来事を知られたであろうという心苦しきだった。

三人の中で一番温和そうなポニーテールの人に助けを求める視線を向けると、申し訳なさそうな微笑みを向けられてしまう。

「この学校でTF道の経験があるの、西住さんだけなの……………」

「そういう訳だから、よろしく」

なんとか拒否の意思を示そうとする前に、杏は意に介せずといった様子でTF道を選択するようと念押しだけを残して、二人を連れて立ち去っていく。

「そ、そんな……………」

一人残され、呆然とする。

新しい友人達の中での輝かしい学園生活。

それに今、崩れ去るには十分な亀裂が入った気がした。

## 第二話 消えない傷跡

土砂降りの雨が身体を強く打ち付けた。

雨が私の体温を奪い、身体を酷く冷え切らせていたが、肉体的な冷たさよりも逃れられない悔恨の念が私の心を冷え切らせていた。

私の周りでは何人もの仲間が泣いていて、私の姉やその他の仲間達は怒りとも悲しみともとれない表情で私を見ていた。

思わず足が竦み、震え、目の前にあつた鉄の塊に手をついた。

顔を上げ、自分が手をついた鉄の塊——横たわっている煤と泥に塗れたトランスフォーマーを見つめた。

傷だらけの身体に付いた泥がべつとりと手に付き、それ自体が手に吸い付いているかのように離れることができなかつた。

トランスフォーマーの目に光は無く、胸には黒い大きな穴。

その顔は光を失ったこと以外は見知った姿と変わらず、今にもしゃべり出してきそうさだ。

ぞくぞくとした感覚が背筋に走る。

光を失った目が私を責める。

それ以上見ていられずに視線をそらす、その先には胸にポツカリと空いた大穴が見えた。

足はまるで地面に縫い付けられたかのように動けず、その黒焦げた大穴に吸い込まれるような感覚に襲われる。

……ああ

大きな、あなが……

頭に激痛が走り、目が覚める。

目を開けると、天井が広がっていた。

床の冷たさが後頭部を冷やし、寝ぼけた頭でベッドから落ちたのだと理解する。

パジャマは汗でびっしりと湿っていて身体は冷え切っていた。酷く気持ちが悪い。

ピンク色のイルカを模した目覚まし時計のアラームがいつもより喧しく聞こえたが、気分が悪くなかなか止める気になれない。

だが、私の中の良心が鎌首をもたげ、学校を休む訳にはいかないと責め立てる。

ズキズキと痛む頭をさすりながら、身体をなんとか起こして目覚ましを止めた。

隙間から光がのぞかせているカーテンをゆっくり開き、外を見る。雲一つ無い青空だった。

「—— ほんだで、俺たち人間が生まれる前も前、えりやあ昔から戦争しとったと思えよ。長い間戦争しとったから争う技術に過敏になってよ。そういう危険な物も含めて技術流出に関してピリッピリするようになったんだ」

悪魔博士の言葉を耳が右から左へと受け流してしまふ。

結局のところ、登校したまではよかったのだが、体調はすこぶる悪かった。

授業には集中出来ず、沙織さんや華さんに話しかけられても全く耳に入らないという始末。

休んだ方がよかったかもしれないと若干後悔しつつも、ぐらぐらと頭の中で感情がかき混ぜられ酷く気分が悪い。

「……」

「それじゃあこの問題を誰かにやってもらおうとするかの」

「……」

誰かを指名しようとした悪魔博士の視線がこちらに向けられる。

すると心配そうな顔をして、私に声をかけてくる。

「おいニシズミ、さつきからなんだかポヤポヤしてるが、気分でも悪いのきや?」

「……はい」

「ヒツドイ顔だな。あんまりが気分悪いようだったらよ、保健室行つて」

「……はい」

身体を引き摺るようにして席を立つ。すれ違いざま、華さんと沙織さんが心配そうにしているのが見えたが、何を言うでもなく通り過ぎ、教室を出る。

すると、教室の中から元気そうな声が聞こえてくる。

「先生！ 私もお腹が！」

「私も持病の癪が……」

「……随分元気そうだがよ、おめえ特別だぞ？」

声の主、沙織さんと華さんが教室から出てきて何も言わずに付き添ってくれる。

申し訳ない気持ちで一杯になるが、今はその気持ちにちゃんと応えられる気がせず、二人に連れられ保健室に向かう。

なんとか保健室の先生に病気だと押し通しベッド3つを融通してもらい横になる。

先生は明らかに疑ってかかっていたが、私の様子を見ると何か察したかのように許可してくれた。

恐らくそういう事情を抱えた生徒だと思われたのかもしれない。今はどうでもよいことだが。

少しすると保健室の先生は用事があるといって保健室を出て行った。

先生が出て行くと、二人が心配そうに声をかけてくる。

「ねえみほ。生徒会の人になんて言われたの？」

「横になったままでもいいです。気分が悪いようでしたら鞆持ってきてみましょうか？」

「え、あ、その……」

胸が潰れそうな思いにかられながら、黙っているのは二人に不誠実だと思いつころどころどもりながら、ぽつりぽつりと昨日あった事を話す。

今年からTF道が復活するということと、それに自分が参加するように言い含められたことを。

二人は要領を得ないといった様子になる。

「TF道ってあれでしょ？ トランスフォーマーに乗ってちゃんばらするっていう」

「古くから続く、乙女の嗜みと言われてきた武芸ですよね？」

「ま、まあそんな感じかな……？」

沙織さんは訝しむような顔をする。

「あれ？ 経験があるって言っても普通そんな勧誘されるのかな」

「確かに……でも前の学校で学んでいたのなら、心得がある人として皆の手本になると思われたのでは？」

二人の推理を聞きながら、思わず布団の中で縮こまる。罪悪感からだろうか、本当に風邪でもひいているかのような寒気が襲う。

私は彼女達に最も重要な話を話していない。

私の中の良心の呵責が、二人の信頼が、優しさが辛い。

胸が熱くなってきて、何かが溢れかえってしまいそうになる。

その何かに押されるように勇気を振り絞って、枯れそうな声をなんとか絞り出す。

「実は……私の家は代々トランスフォーマー乗りの家系で……でも、辛い事があって……トランスフォーマーを避けるために遠くの学校に来たの」

「え？ トランスフォーマー乗りの？」

「最近では人気が落ち着いてきたとはいえ、TF道の名門は殆どが黎明期の頃から続く流派が多いと聞きますが……」

布団の中で頷く。

すると、沙織さんが苦々しそうな表情をする。

「古くからあるとか、確かに息苦しそうだもんね〜すっごい厳しそう」  
「家のしきたりというものは、必ずしも良いものばかりとは限りませんからね……」

家が悪いのではない。

自分で誤解するような言い方をしておきながら、二人の言葉を内心では否定する。

酷い息苦しきから逃れるように、話を続ける。

「それで、もうトランスフォーマーに乗ることもないと思って。な

いと思ったからこの学校に転校してきた訳で……」

「別にさ、やらなくてもいいじゃん」

言葉を遮るように沙織さんが明るく言う。

にべもない言い分に動揺する私に、明るく笑いながら沙織さんは続ける。

「ホントに嫌ならさ、無理して言う通りにすることないんじゃない？

それに今時流行らないって、女の子にトランスフォーマーなんて」

「生徒会の方々に断りに行くときは、私も一緒に行きますよ」

二人の優しさで、思わず胸が一杯になる。

だが、同時に酷く後悔している。

本当に責められるべきなのは私だということを、伝えていないのだから。

しかし、今は今なのではないだろうか。

甘い、心地よいぬるまのような考えだと思う。

だが、ここはもう実家でもない、かつて通ってた学校でもない、新しい環境なのだ。

何を迷う必要があるのか。

一瞬、言葉が詰まりかけながら、ありのままの言葉を伝える。

「……ありがとう」

ポツリと口をついて出た感謝の言葉に、二人は笑って返してくれる。

これでいいのだろう。

新しく作っていくのだ。

あの過去を乗り越えられる、楽しい学生生活を……

『全校生徒に告ぐ、直ちに体育館へ集合せよ。繰り返し、直ちに体育館へ集合せよ』

しかし、私が思っている以上に現実には優しくはないようだ。

映写機の映像がスクリーンいっぱいに映し出される。

広報用に作られたTF道のPR映像が流され、それに合わせて、生徒会の人<sup>が</sup>耳当たりのよい言葉で解説をする。

正直な話、実際に体験したことがある人なら共感できるだろうが、大抵の場合このような広報用の資料は見栄えのよい綺麗な部分しか写さない。

しかし、耳に入る他の生徒の話し声は、案の定映像の制作者達の企み通りに進んでいると言ってよいだろう。

「わあ……魔法みたい」

「男の人って格好いいのが好きっていうよね！」

「ふおおおお！ランボルです！」

映像では真っ赤なスポーツカー、ランボルギーニ カウンタックの……確かLP500Sに変形するトランスフォーマー、ランボルがロボットモードからオルトモードくるまに変形する場面が映し出されていた。それに乗り込む広報用に雇われたであろう女性の姿は、まるで映画のワンシーンかのようにも見える。

それは女子生徒の心を掴むには十分だ。

実際、沙織さんは映像を見ながら自分の姿と重ねているのだろうか、やだもくといいいながら頬を押さえていた。

……やっぱり夢の学校生活は遠い。

あの後、体育館に集められた私たちを待っていたのは生徒会主催の必修選択科目の説明会だった。

内容は……露骨ともいえるTF道のごり押しだった。

確かに今年から復活する科目とはいえ、単位の優遇や特典、遅刻の見逃しなど明らかな鼻屑が入っているのは火を見るよりも明らかだろう。

だが、それ以上に広報用の映像や特典は魅力的に映ったのだろう。TF道を選択しようと思気込む生徒の姿がチラホラと目に映った。

私の前にもその生徒が二人。

「最近の男の子は頼れる子が好きなんだって！ あんなカッコイイとこ見せられたらイチコロだよ！」



「素敵です……」

思わず頭を抱えそうになる。

だが、そんな二人の姿には見覚えがあった。

内容は全く異なるが、TF道に憧れる少女の姿。

不思議と物悲しさを感じたが、罪悪感がそれを塗りつぶした。

沙織さんの言葉に苦笑しながら映像を見る。

自分も少し前まではあのように見えていたのだろうか、思わずにはいられなかった。

結局、私はTF道を履修しないことにした。

二人を心配させてしまったことに罪悪感を感じずにはいられなかったが、二人は気にすることがないと励まされてしまった。

だが、それで肩の荷が下りたのは確かだった。

昨晩はよく眠れたし、気分が悪くなることも無かった。

もう、深く考えなくてもいいのだ。

もう、TF道はしないのだから。

「ねえ、選択科目何にした？」

「えへへ……私TF道にしちゃった」

「えー！ 私もー」

昼休みの食堂で二人と食事していると、すぐ近くの席から、下級生と思わしい生徒の楽しそうな声が聞こえてくる。

思わず同じテーブルに座っていた沙織さんや華さんも暗い表情になるが、沙織さんが空気を変えようと下校時に名物でも食べに行こうと切り出した。

私と華さんも話を合わせてようとするが、それも長くは続かなかった。

『普通一科、2―A西住みほ。普通一科、2―A西住みほ。至急、生徒会室へ来ること、以上』

呼び出しの館内放送が流れ、思わず顔を見合わせる。

「ど、どうしよう」

「私たちも一緒に行くから！」

「落ち着いてくださいね」

二人が落ち着かせるように私の手に手を添えながら励ましてくれる。

今なら、二人と一緒に頑張れる。

二人に手を引かれながら生徒会室へ赴くと、入った途端に片眼鏡の人に鋭い目つきで睨み付けられる。

あまりの威圧感に思わず後ずさりかけるが、二人が居るおかげで不思議と落ち着いている。

片眼鏡の人が一枚の紙をつき出す。それは、私が提出した選択科目の希望用紙だった。

「これはどういうことだ？」

「なーんで選択しないかなあ」

「我が校、他にトランスフォーマーの搭乗経験者は皆無です」

ポニーテールの人が俯き、悲しそうな顔をする。

「終わりです……我が校は終わりです……」

「勝手なこと言わないでよ！」

「やりたくないと言ってるのに無理にやらせる気なのですか！」

二人が私のために生徒会に対して反論をぶつける。

二人の様子を見ながら、私のせいでこのような自体になってしまったことを酷く後悔する。

すると、生徒会長が頬杖をつきながら諭すような目でこちらを見る。

「んなこと言ってるとき。この学校にいられなくしちゃうよ？ あんた達」

その発言に、思わず背筋が凍った。

思いも寄らない発言に二人も言葉を詰まらせる。

「会長は本気だ」

片眼鏡の人が念押しするように付け加える。

一介の生徒会にそれほどの力があるのかという疑問が浮かび上がったが、愚問であることに気付く。

ここは学園艦なのだ。

学生達自身の自主独立を標榜するこの体制は、いわば擬似的な隔離された小国家。

学園艦の運営の多くは生徒達自身の手で行われ、中枢である生徒会は強い権限を有していることが多い。依然通っていた学校でもそれは同様だった。

しかも相手は選任されて職務を任された生徒会長だ。信頼も厚いことだろう。

あながち、言っていることは間違いないと言える。

「職権乱用です！」

「横暴だよ横暴！」

非難の言葉を浴びせる二人を、ポニーテールの人がたしなめる。

「TF道をやってくれただけでいいの、それだけで丸く収まるから」

思わず、今まで握られていた二人の手をぎゅっと握る。

二人も内心では怖いのだろうか、手の汗の様子から察せられる。

自分の不甲斐なさに呆れ果てるしかなかった。

このままだと、恐らく本当に生徒会長は何かしらのアクションをしかけてくるだろう。

今までの権力と地位を思うが儘に振るう様子からして、そうとしか思えない。

私の為にここまでしてくれている二人に、これ以上の負担を強いるのはもう耐えられなかった。

二人の手を再び握り直して。

「私、やります」

「みほ……」

「みほさん……」

生徒会長が、満足そうな顔をして私の顔を見る。

他の生徒会の人も、ホッと肩を撫で下ろしている。

沙織さんと華さんは納得いかないといった様子ではあったが、もうこれしかない。

ああ……

やはり、私は逃れられないのだろう。  
トランスフォーマーから。

### 第三話 近づくと始まり

トランスフォーマー道の授業初日。

グラウンドに履修者が集められ、授業開始を待っていた。グルリと周りを見回してみると、私と沙織さんと華さん。それ以外には存外選択した人は少ないように思えた。

だが金髪に軍帽を被った人や土佐弁をしゃべっている人、何故かバレーボールのユニフォームを着た一団など、個性の濃さには事欠いていないようだ。

過剰な優遇措置が取られていたとはいえ、やはり最近になって流行に陰りが出ていた影響なのだろうかと思っていると、生徒会の人たちがやってきて説明を始める。

「ここに集まっているTF道選択者の諸君には、まず感謝を述べておく」

「本当に久しぶりのことだから、どれぐらい集まるか心配だったの」  
私や沙織さんと華さんはその言葉に思わず苦笑する。

特に私には決定権はほぼなかったような気がする。

すると、近くにいた癖の強い黒髪の女子生徒が手を挙げた。

生徒会の人々が名簿と女子生徒を見比べる。

「ええと……秋山さん。何か質問ですか？」

「はい！ 一体トランスフォーマーは誰がいるんでしょうか！ スタンダードですか、それともビーストですか?!」

張り切っているのだろうか、元気よく質問する秋山さん。

その質問に答えたのは、授業が始まる前から干し芋を齧っていた生徒会長だった。

「うーん、そのことなんだけどさあ。まず私たちがやるのはトランスフォーマー探しなんだよねえ」

「トランスフォーマー探しでありますか？」

「うん。前にTF道やってた頃のトランスフォーマーがまだ何台か残ってるみたいでさ、一体はその倉庫の中にあるんだけど」

親指で後ろにある大きな倉庫を指さしながら生徒会長は芋を齧る。

突然の方針に、当然といえば当然だが選択者の中から不満を漏らす声が聞こえてきた。

まあトランスフォーマーに乗りに来たのにトランスフォーマーを探すことになるとは、私も予測できなかった。

「まあ取りあえずここに残ってるトランスフォーマーを見てみようよ。どんなにか気になるっしょ?」

生徒会長の言葉に多くの生徒が頷きで返す。

なんだかんだ言っても、やはり本物を見てからのほうが何かとモチベーションも上がることだろう。

生徒会の人が堅牢な倉庫の扉を開くと、何人かがむせ返ったり、コホコホと咳をする。中から鉄とオイルの匂い。加えて酷い埃が充満していた。

中をのぞいてみると、薄暗い倉庫の上には長らく使われた形跡のない運搬用クレーンや角材、修理に使われたと思わしきパーツが散乱していた。

そしてよく見ると、倉庫の中央にシートが被せられた車が鎮座しているのが見えた。

「あの車かな?」

「早くシートを取ってみましょう!」

先ほどから妙に元気な秋山さんとほか数人で掛けられていたシートを取ると、積もっていた埃が空気中に飛び散り思わずクシャミをする。

「なにこれ?」

「ちよつと古臭くない?」

「エンジンがまる見えじゃん!」

「でも意外と綺麗ですね」

「錆止めがしてあるんですよ」

姿を表した車両は赤いスポーツカーだった。

見たことがない車なので、恐らくフューチャーカーの系統なのだろう。

ボンネットには赤いファイアーパターンがペイントされており、改

造したのであろうエンジンが剥き出しになっていた。

「本格的な整備は自動車部と悪魔博士先生に確約してあるとして……誰か簡単な確認ができるのはいるか？」

「そういいながら、片眼鏡の人が視線を向けてくる。」

「こういう時のための私かと思いつつ、スポーツカータイプのトランスポーターに近づく。」

ボンネットに触れると、ファイアーパターンのカラーリングとは相反して鉄の冷たさが伝わってくる。

「久々の感触に寂しさと懐かしさがこみ上げてくる。」

ドアを開けて乗り込むと、内部は黴臭さと埃でいっぱいだが、まあ長い間放置されていたので仕方ない。

いざシートに座ると、身体に染みついた動きでハンドルやブレーキの感触、オルトモード状態の運転席から分かる情報を分析していく。

「質量変位システム……問題なし。意外、エネルギー残量がいっぱいだ……」

「なんだかすつごい手慣れてる……」

「先輩、デキる女みたいでカッコイイ〜」

「外野から聞こえてくる声に若干の気恥ずかしさを覚えつつ、車内から出てボンネットを開ける。」

中にはエンジンとランプを点灯させている幾つもの機械部品がある。取りあえず日常点検の要領での確認をする。

中のコードを触ったり、内部の機械をかちやかちや弄るのを見て、生徒会の人々が心配そうに話しかけてくる。

「どうだ、まともに使えそうか？」

「メインコンピュータの配線も大きな異常なし。一通り見ましたけど問題は無いみたいです」

「そうか、試しに動かせるか？」

「まだ本格的に動かすのは怖いですね……ちゃんとオーバーホールしてあげてからじゃないと」

「ふむと頷くと、名簿に何か書き込む。」

「おおよそ使えるのか使えないのかの整理でもしているのだろう。」

「ところで、質問なんですけど……トランスフォーマーを探すって一体どこを探せばいいんですか？」

一年生らしき生徒がおずおずと尋ねる。

それを聞いて生徒会長はやれやれといった様子で肩を竦める。

「それがわかんないから探すんだよ」

「会長は無理難題を仰る……」

「重ねて言えば、人数の都合上あと四体は必要だ。それに明後日には指導教官がお見えになるのでそれまでには見つけること。以上、解散！」

一方的な解散宣言を受け、各々自然とグループになって動き始める。

当然と言えば当然だが、無茶振りにも程がある。

だが、以外にも生徒達はやる気なようで各々どのような方法で探すのか考え始めている。

「ええ……どう探せばいいのさ」

「とにかく探し回ろう！ 足腰のトレーニングだと思っただ！」

「私の占いの本領発揮だな……」

沙織さんの方は気落ちした様子で、話と違うと言っていたが、生徒会長にカツコイイ教官が来ると言われあっという間にやる気になっていた。

恐らく教官といっても恐らく女性だろう。それ以前にTF道の男性教官は見たことが無い。

案の定一気に元気になり、倉庫からかけだしていく沙織さんを華さんと一緒に追いかけてながら、こんな簡単に騙される沙織さんが何だか少し心配になった。

「って言われても……何処にあるっていうのよ〜ッ！」

駐車場に沙織さんの声が空しく響き渡り、青空に消えてゆく。

結局あの後、車に変形するタイプなら駐車場にあるかもしれないとここまでやってきた訳だが、やはりとすべきかトランスフォーマー



らしき車は見当たらなかった。

「それに、車とかに変形してるトランスフォーマーをどう見分けろっというの！」

「車に紛れていたら、全く分かりません……」

実際二人が言うように、私も少し困っていた。

私を知っているトランスフォーマーだとしたら、恐らく外からでも少し確認すれば判別は付く。

だが、知らないトランスフォーマーだとしたら話は違ってくる。

一台一台車を見て風潰しに探すなど、砂漠の中で一粒の砂を探すようなものだ。

せめて、ビーストタイプならまだなんとかなるかもしれないが。

これから今日を含めて後二日、どうしたものかと頭を抱えていると。

「あの〜すいません」

後ろから声をかけられ、振り返ると授業始めに生徒会にトランスフォーマーの種類に関して質問していた女子生徒……秋山さんがいた。

「あ、挨拶がまだでした。普通二科、2―Cの秋山優花里と申します

！ ふ、不束者ですがどうぞよろしくお願いします！ よければ一緒にトランスフォーマー探しをさせていただければと思います」

お辞儀しながら自己紹介する秋山さんに思わずこちらもお辞儀で返す。

華さんや沙織さんも歓迎しているようで、自己紹介をする。

「まあ、こちらこそよろしく願います。五十鈴華です」

「武部沙織だよ〜」

最後に私がしようとすると、秋山さんに遮られた。

「存じ上げております！ 西住みほ殿ですよね！」

最後の敬称に若干驚きながら、どうやら私のことを知っているらしい事にも驚いた。

どうして知っているのかと思ったが、授業の様子と次の秋山さんの言葉からだいたい事が察せられた。

「私、トランスフォーマーの事に関すると目がないもので……しかし、この状況なら私の知識がお役に立てると思います！」

「どうやら生粋のトランスフォーマー好きのようで、その関係で私の事を知っていたようだ。」

「確かにある程度その道に通じている人なら私の事は知っている人はそれなりにいることだろう。それほどにあの事は業界で話題になったはずだから。」

「思わず暗い考えに向かいそうになるのに気づき、話題を変えようと試みる。」

「私も種類に関しては詳しいわけじゃないし、秋山さんがいれば心強いな」

「実際私たちじゃどうしようもありませんでしたし、是非お力をお貸しいただければ」

「いやあ、それほどでもありませんよ」

「これでなんとかトランスフォーマー搜索の大きな足掛かりは得られた。」

しかし、駐車場を一回り見てもみたものの、やはりというかトランスフォーマーらしきものは見つけれなかった。

沙織さんの提案で駐車場裏の山林に足を運ぶと。

華さんが突然立ち止まり、すんすんと匂いかぎ出す。

秋山さんが何をしているのかと不思議そうな顔をする。

「どうかしたんですか？」

「こちらから土と草木の他に鉄とオイルのような匂いが……」

「匂いで分かるんですか？」

華さんの思わぬ特技に沙織さんが面食らう。

「華道やってるとそんなことまで分かるの?!」

「私だけかもしれませんが……」

「一芸に秀でた者は多芸に勝るといいうが、華さんはそのタイプなのかもしれない。」

華さんの後に続いていくと、森林の中に大きな影が見えた。

それは、車では無いが明らかに森の中で異彩を放っていた。

「もしかしてこれって！」

嬉しそうに秋山さんに尋ねる沙織さんに、秋山さんは嬉しそうな顔で返答する。

その見た目は、力強く雄々しい姿をそのままに鎮座する恐竜だった。

有機的な皮膚では無い、鉄の皮膚がその威圧感をより強く感じさせるが、多くの人がいメージするところの典型的な恐竜の顔とはことなりそれはどこか愛嬌すら醸し出していた。

今では全く異なる見た目ではあるとされているが、有名なアニメ映画にも出たどこか懐かしいデザインの恐竜は、俗にいうティラノサウルスだ。

私の記憶の中で、この特徴に一致するトランスフォーマーは一体しか居なかった。

「グリムロック……」

「なんかさっきのよりもすっごい大きいじゃん！ それになんか顔つきも可愛いし！」

沙織さんが嬉しそうにする横で、秋山さんがワナワナと震えだしたと思えばグリムロックのボディにペタペタと触りだし頬ずりまでし始めた。

「グリムロック！ あの戦いだけなら全トランスフォーマーの中でも最強の一角、ダイノボットのリーダー……あのコンボイ司令官の下で戦い、メガトロンとも互角以上に渡り合った素晴らしい戦士なんです！ あ、ダイノボットというのは恐竜に変形するトランスフォーマー部隊の事なんです！ ……あっ」

「凄い生き生きしてたね」

「す、すいません……」

「キャプテン！ 見つかりましたかく！」

「もうちよつとだー！」

「二人とも気をつけてくださいよー！」

上からの呼びかけに応えながら岸壁を蹴り順調にラペリングしていく。最初はどうなることかと思ったが、日頃からバレーで鍛えていたおかげか見よう見まねでいけるものだ。

バレー部のアタッカー、河西忍が、シウルシウルと命綱の遊びを確かめながら話しかけてくる。

「本当にこんなところにトランスフォーマーがあるのかなあ……」

「絶対にある！……はず！ 気合いがあればトランスフォーマーもある！」

「これだけは気合いじゃなんともなりませんって！」

岸壁の割れ目まで到着し、慎重に地面に足を付ける。

奥が薄暗くなっており、目がまだ慣れずよく見えない。

「キャプテン、ありましたか？」

「んー……あれかな？」

薄暗い中、ようやく目が慣れてきてその全容が見えてきた。

影の中に何か大きな鋭角の物体が見える。

更に近づいて見てみると、それは間違いなくロボット……トランスフォーマーだった。

オルトモードではなくロボットモードだったので分かりやすかった。

全身寸胴の体系をした濃緑色のボディ。右腕はその自体が武器なのか銃口の形をしていた。

顔はバイザー状で口元はフェイスマスクになっていた。

「これは……なんですかね？」

「わからん！」

細かい事は細目検討がつかない。

だが、いまはそのようなことは気にすることでは無い。

思わずブルブルと武者震いがする。

ここから、これから始まるのだ。

私の、私達の、バレー部復活の夢が。

水面から一本の細く長い竹筒がぷかぷかと浮いていた。それを取り囲みながらじっと見守る私達。

足場は水だが水蜘蛛が取り付けられているおかげで沈む心配は無い。忍道の授業の成果が個々で役に立つとは、やはりハイテクよりもローテクのほうが時には優れているものだ。

古き業の良さを痛感していると、竹筒がどんどん浮かび上がり、水面に頭が浮かび上がってきた。

杉山清美 左衛門座の顔に濡れた長い髪がこれでもかかっており、昔芝居で見た番町皿屋敷のお菊のように見えて少々怖い。

「どうだ？ 見つかったか？」

「プツ……確かに見えた。水底に沈んでる」

今日は占いの調子がすこぶるよかったようだ。

フランスと満足げに鼻を鳴らす。

左衛門座曰く

車の外観は、うすあせぎ薄浅葱のボディに大きなフロントガラス。車体の前身になるにつれて鋭角になる車体。

一般の感性からすれば、近未来型の車の典型と言える見た目は、その系統がフューチャーカーであることを示しており、車体のあちこちに溶けた後や、何度も修繕したであろう継ぎ接ぎの合わせ目が見られる。

以上が見つかったトランスフォーマーらしき物の詳細だった。

「誰か分かるのはいるか？」

「うーん、トランスフォーマーの歴史は専門外ぜよ……」

「同じく」

松本里子 エルヴィンの質問に野上武子おりようも左衛門座も首を横に振る。

歴史を嗜む者としては少々遺憾ではあるが、まあ確かにトランスフォーマーの歴史に興味を持つ同好の士は私達の中にはいなかった。だが、よくよく考えれば歴史好きとしてトランスフォーマーについての見聞を広めるのも一興だろう。

生きた歴史の生き証人とも言える存在だ。歴史好きとしては新しい風を取り入れるのも悪くないだろう。

心なしか、ワクワクと胸が高鳴るのを止められなかった。

「ほんとにこんなところにあるのかなあ……」

「もうここしかないし、無かつたらもう諦めるしかないよ」

もう日が沈み、辺りも暗くなった頃。私達はトランスフォーマーを探してウサギ小屋にやって来ていた。

昼間は図書館で資料を漁っていた私達だったが、その中であつた歴代卒業写真（199×年度版）の卒業写真の一枚に、ウサギ小屋の中になにやら車のような物が映り込んでいるのが見られたのだ。

それ以外にもそれらしき写真はあつたのだが、普通の車だったり個人制作で作つた高度な模型だったりと空振りの連続だった。

「暗くなってきたし、早く帰りたいー!」

「ライトこっちに向けてよ! 暗くて怖い!」

もう完全に肝試してきな雰囲気醸し出していたが、ようやっとウサギ小屋に着くと目的の物が屋内に鎮座しているのが見える。

なんだか何処かで見たとあるようなデザイン。一見して高級車的な雰囲気醸し出しているこの車がトランスフォーマーなのか、私達には判断しかねた。

「よーし、鍵開けてー」

「アイー!」

安っぽい錠前を外し、中に入り近くでよく見てみるが、やっぱりよくわからない。

高そうな外車でありそんなことだけは分かるが、あとは白いボディとその中心に真っ直ぐと黒のラインが入っているということだけしか分からなかった。

するとあやが携帯で写メを撮る。

ポチポチとボタンを押してしばらくすると

「ええーっ?!」

突然大声を上げたので、思わずその場にいた全員混乱する。

「ひええええっ?!」

「でたあつ！」

「いやいや、お化けとかじゃなくてこの車！　ぽぽぽ、ポルシェだつて！」

ポルシェ？　一瞬名前を聞いて脳内で言葉がフリーズするが、落ちて考えて見ればとんでもないことだ。

みんなざわめきだし、売つたらいくらになるんだらうとあやの周りに集まりだす。

あやが震える手でかちかちとボタンを押し続ける。

「えつと、詳しい事はわかんないけどこの種類はポルシェでも935つて仕様で……最近あったオークションの予想価格が……三十万〜四十万ユーロ？」

ユーロという海外通貨が出され、思わず困惑する私達。

すると、ボーツと車を見ていた紗希がポツリと言う。

「おおざっぱで……だいたい五千万」

「ぐ、五千万ッ！」

思わず泡を食う皆。

五千万……私達学生でなくともとんでもない金額だ。

思わず夢の様な大金の使い道を考えてしまう。

他の皆も同様なようで、虚ろな目をしてポルシェを見ていた。

しかし、私は違和感を感じずにはいられず、皆に尋ねる。

「ねえ……仮にこれが五千万のポルシェだとしてさ、こんなところに置き去りにする？」

「……思い入れがなかったら、私だったら売っちゃってるなあ」

あゆみの発言に、皆も同じような反応を示す。

ということとは、仮説としてある可能性が浮上してくる。

「つまりさ、それはこれがトランスフォーマーだからじゃない？」

「確かに、本物の高級車だったらここに放置されっぱなしな訳ないもんね！」

「なーんだ、ちよつと残念」

優季の言葉に内心同意し、気落ちしながら生徒会の連絡先へコールした。

「よくやった。回収は手配してある、自帰宅していいぞ」  
そう言つて連絡用トランシーバーの回線を切る。

正直もつと時間がかかるかと危惧していたのだが、予想以上に今回集まったメンバーは何かともっているらしい。

安物の椅子に腰掛けたまま眠っている会長を揺り起す。

んあと間の抜けた声を出しながら、起き出す会長は私の持っていた名簿を奪い取り目を通しだす。

「んくん、以外とやればできるもんだねえ」

「情報も無い状況でよくやってくれています」

うんうんと頷く会長は椅子から立ち上がり、遅くになっても電灯が灯ったままの倉庫へと向かい、私もそれに続く。

中は昼間の荒れ放題だった様子が嘘のように片付いており、昼間の間に運び込まれたトランスフォーマーが並べられていた。

そのトランスフォーマーの横で工具を運び入っていたり、ジャッキで持ち上げられた車体の下に上半身を突っ込んでいる自動車部の面々と柚子の姿があった。

その様子を見て、会長は満足そうな笑みを浮かべる。

「調子はどうだい」

「やあくキツイですよ」

赤い車のボンネットの中を資料を見ながら点検していた自動車部の中嶋悟子がボンネットをバタムと閉め、疲れを滲ませながら応える。

「まず一般の流通してる技術とはかなり乖離してますからね……。なによりハードならまだしも極小タイプのマイクロチップの修理は完全にお手あげです」

「そのために悪魔博士駆り出したんだから、安心してよ」

そんな話を話していると、柚子がノートパソコンを持って来た。

「会長、トランスフォーマーの種類の判別終わりました」

「よくし、順番に説明よろしく」



柚子の説明を聞きながら時折真面目な顔をする会長。

トランスフォーマーを見る。

長年放置され、みすぼらしい見た目をしていたが今はそれにすら頼らなければならぬ。

教育局長のいけ好かない顔が思い出され思わず奥歯を噛みしめながら、あんな横暴に屈してたまるかと心を奮い立たせる。

私達には勝つしかないのだ。

会長にトランスフォーマーの解説をする柚子とその解説を聞きながら考え込む会長をみて改めて決意する。

大切な思い出を、守るために。

## 第四話 結成！ 大洗トランスフォーマーチーム

「皆の協力のおかげで全員分のトランスフォーマーを見繕うことができた。改めて感謝する」

「昨日は洗車で忙しかったし、今日は教官もいらっしやるので皆さん張り切っていきましよう！」

『おー！』

とうとう訓練教官を招いて訓練をする日がやってきた。

ようやくトランスフォーマーを動かすことができると多くの生徒が浮き足立つ中、一年生が手を上げて質問する。

「あの一、すいません。今日の授業なんですけど、私達はどのトランスフォーマーに乗ればいいんですか？」

「あー、そういえば決めてなかったね、ごめんごめん」

今思い出したといった様子の会長がグルリと回りを見回す。

すると、横から片眼鏡の人が少し思考し、助言する。

「やはり見つけたグループが見つけた物に乗るのでいいのではないのでしょうか」

「自分たちで見つけた愛着もあるでしょうし、いいと思います」

ポニーテールの人の助言もあり、会長が大きく頷く。

「じゃ、それでいいか。それじゃあ車両分けを発表するよ」

片眼鏡の人が名簿に書き込みながら各自の車両を振り分け始めた。

「Aチーム『ホットロデイマス』、Bチーム『ホイスト』、Cチーム『チャー』、Dチーム『マイスター』、Eチーム『グリムロック』。以上が搭乗するトランスフォーマーとなる」

言い渡された組み分けに、各々が反応を示す。

ついでに沙織さんは先程から教官の事で頭がいっぱいのようなのだ。

「デツカい腕が付いてますね」

「いいアタック打てそうです……」

「何というか、貧弱そうだな」

「あちこち継ぎ接ぎだらけぞよ」

「新撰組カラー……」

「いや諸君。調べたところ、なんとトランスフォーマーの中でも幾千の戦いを渡り歩いた歴戦の戦士らしいぞ！」

「「すごい！」」

「うーん、五千万……」

「まだ言ってるの？」

「値段はともかく、すごい早そう」

「ホットロデイマス……ってどんなトランスフォーマーなの？」

「私も気になります」

沙織さんと華さんが優花里さんに向かって尋ねる。

すると優花里さんはキラキラと目を輝かせてホットロデイマスを見ながら水を得た魚といった風に解説を始めた。

「ホットロデイマスはかつて若き騎士と呼ばれた程の勇敢なトランスフォーマーで、一時期はサイバトロンの総司令官も務めたくらい優秀なんですよ！ オルトモードはエンジンが剥き出しのホツドロッドカータイプで凄まじいスピードを誇るらしいです！ あ、ホツドロッドってというのはアメリカ発祥のエンジンを改造した車のこと指すんです」

「へえ！ スツゴい強いんだ」

「折り紙付きと言ってもいいくらいですよ！」

「エンジンが猛々しくていいと思います」

「でもスピードが出る分、操縦には気を付けないと……？」

各々が自分たちのトランスフォーマーを品評していると、何処からか音が聞こえてくるような気がした。しかし、すぐにそれが私の聞き違いではないと理解する。

他の皆も気がついたようで、周囲を見回している。

「そろそろ教官がお見えになる、皆粗相の無いように」

平穏を装っているが、片眼鏡の人も不安な空気を感じずにいられないのか、頬にタラリと汗を流しながら皆に指示した。

「……………」

「どつたの紗希？」

一年生の子がボンヤリと空を見上げていると思えば、おもむろに空

を指差し自然と皆の視線が空へと向かう。

すると、その方向に点があることに気がつく。

「あれ何？」

「鳥か？」

「飛行機かも？」

「……………船」

轟音の原因が近づき、次第にその姿がハッキリ見えてくる。

それは紛れもなく、宇宙船と言った類いの物だった。

近づく影響で、音は次第に盛大なものになり、倉庫の重い扉やトランスフォーマーのガラスがガタガタと振動する。

「うるさーいー！」

「騒音被害で訴えるぜよー！」

近づくにつれ轟音が酷くなってくるが、ある程度近づくとピタリと制止して騒音もピタリと止んだ。恐らくエンジンによる飛行から反重力装置による浮遊に切り替えたのだろう。

皆突然の事に啞然としているが、秋山さんはキラキラとした目で宇宙船を見て、

「あれは外宇宙探索訓練用宇宙船『ガンホー』じゃないですか！ まさか本物を見られるだなんて！」

夢中になって宇宙船の解説をしていた。

クリーム色をした宇宙船が制止したのを見ていると、外壁の所から何かが出てきてこちらに向かってきた。

次第に近づいてくると、その全貌が明らかになってくる。

それは、茶色い姿をした四足歩行の動物だった。頭の先には長い鼻、その横には左右一つずつ大きな牙が生えていた。

「……………空飛ぶ、象？」

「いや、どうやら毛が生えているようだ。つまりアレはマンモスだな」  
布のような物を羽織った人が事も無げに言う。

「ま、マンモス?!」

「マンモスのトランスフォーマー？ ……いやまさかそんなわけでも  
だとしたらそれってつまり」

「ね、ねえアレもトランスフォーマーなんだよね？」

沙織さんが優花里さんに尋ねるが、どうやら混乱してしまっている。

かくいう私も、優花里さん程ではないが非常に動揺していた。

少なくとも、私を知る中でマンモスのオルトモードを持つトランスフォーマーは一人しかいないことに加えて、それはとんでもない大物トランスフォーマーだったからだ。

「こっちに来るよー！」

空飛ぶマンモスは校庭に近づくと飛行速度を落とす、ゆつくりと校庭の土を踏みしめ着地する。

怒濤の展開に理解が追いついていない皆を、マンモスはじつと見つめる。

『こんにちはー！』

突然女性の声が響き渡る。

皆は我に返り声の出所がマンモスから聞こえてくる事に気がついた。

「あのマンモス雌なんだ……」

「そういう問題では無いと思いますが……」

漫才をする友人はともかく、マンモスは呆れたような雰囲気醸し出す。

『あ、ごめんなさい。今出るから』

その声と同時にマンモスの横腹の一部がバカリと開き、中から緑色の軍服のような格好をした黒髪の女性が現れる。

姿を確認すると、片眼鏡の人が佇まいを直し、

「今日の特別講師をしてくださるトランスフォーマー教導隊の蝶野亜美一尉だ」

今しがたやってきた女性の紹介をした。

軍服の女性—— 蝶野さんは颯爽とマンモスの腹部から飛び降り、笑顔で歩み寄ってくる。

「ご紹介に預かりました、蝶野亜美と言います！ 今日初めてトランスフォーマーに乗る人も多いと聞いていますが、皆さん頑張りま

「しょうね！」

ハキハキと喋る蝶野さん。

それとは対照的に沙織さんは肩を落として落胆の色を示している。

「騙された……」

「ま、まあ縁がなかったんですよ」

華さんが沙織さんを慰めている一方、教官がマンモスへと向き直る。

「今日の指導は特別に凄い人も参加していただく事になっています！」

蝶野さんの説明と共に、マンモスは呆れた様子を見せる。

「蝶野教官、そこまで誇張する事はないぞ。今の私は只の一訓練教官なんだ。君の同僚にすぎない」

マンモスが気の知れた様子で話し出す。

その光景に私と優花里さんを除いた皆は酷く驚いていた。

「しゃ、喋った！」

「すごいー！」

「動物タイプでも普通に喋れるんだな……」

皆の様子を見ると、ふと昔の事が思い出される。

幼い時に、初めてビーストタイプのトランスフォーマー会ったときは怖くて泣いていた。

母には逃げるなど叱られ、恐る恐る近づいては逃げ回り、その様子を見ていた姉に笑われたりした。

子供だった私の背丈よりも遙かに大な姿や大きな牙などが怖くて、そのまま父に泣きついたりしたのはハッキリ覚えている。

怖がる私をあやししながら父がトランスフォーマーに触ったり、お母さんや姉が触っている様子を見て、おっかなびつくり触った初めての毛皮はとても暖かくてゴワゴワしていた。

「それでは教官！　お願いしますー！」

「君も教官なのだが……まあいい。ビッグコンボイ、変身！」

かけ声と共にマンモスの姿がみるみる変化していく。

毛皮の外殻が開き、中から機械的な姿が現れる。

全身白を基調として所々に赤の塗装が施され、肩周りにはマンモスの牙だった物が雄々しく掲げられている。

頭部は多くの偉大な戦士に見られることの多い青い頭部にフェイスマスクを付けたコンボイフェイス。

背中には巨大な砲『ビッグキャノン』が備え付けられており、有事にはあの武器でとてつもない威力の砲撃を行うのだ。あの砲撃を受けたら並みのトランスフォーマーでは一たまりもないだろう。

「それでは紹介します。今回の新人訓練に特別に協力してくださいることになった、『ビッグコンボイ』特別教官です！」

「新人諸君。今日はよろしく」

本格的なトランスフォーマーとの対面に、皆戸惑い、また多くの生徒が思った。

（このビッグコンボイってそんな凄い人なのだろうか）と。

「び、ビッグコンボイ……伝説の……ワンマンアーミー……ぶはっ！」

そう虚ろな目で呟くと、優花里さんが鼻から鮮血を吹き出した。

優花里さんの奇行に皆が慌てる中、蝶野さんがこちらに歩み寄ってくる。

そして私の正面で止まるやいなや、顔を見てなにやら得心したようだ。

「やっぱり。西住師範のお嬢さんじゃありませんか」

突然の指摘に、思わず顔が引きつるのを自覚する。

だが彼女は私の様子に気がつかないようで、話を続ける。

「西住師範には私もお世話になってるんです。お姉さんの方は」

「蝶野……教官。私用は後でゆっくりやるといい」

「ハッ！ 申し訳ありません！」

ビッグコンボイ司令官の一言に、蝶野さんはキチリと姿勢を正す。

思わぬ助けに内心感謝する。

「では、時間も限られていますし。訓練の前に質問タイムにしましょうー！」

「教官！ 教官はやっぱりモテるんですか！」

沙織さんの質問に蝶野さんは指を唇に添える様にして少し考える。

「うーん、モテる……モテると言うより、狙った的を外した事はないわ！ 撃破率は……」

蝶野さんはチラリとビッグコンボイ司令官の方へと視線を向けた後、コホンと咳払いをする。

「撃破率は99%よー！」

「99……！ やっぱりTF道って凄い！」

沙織さんや一年の生徒がざわつく。

恐らく、そういう意味ではないのだろうと思うが言わない方が幸せだろう。

「はいっ！ 今日はい体何の訓練をするんですか！」

鼻にティッシュを詰めた優花里さんが元気よく質問する。

すると、今度はビッグコンボイ司令官が周囲をぐるりと見回し、

「とにかく実戦に勝る物はない。今日は実戦形式での訓練を行う」

「い、いきなり？」

「トランスフォーマーの操縦の仕方なんてわからないです……」

「安心しろ。武器は競技用に開発された殺傷力の低い物に加えてコックピット周辺の素材は私のビッグキャノンを受けても重大な損傷を受けない物で出来ているからな」

「そういう心配じゃなくて……」

「大丈夫大丈夫！ パートナーのトランスフォーマーもアドバイスしてくれるだろうし、あんまり気負う必要ないから！」

蝶野さんの言葉に皆の顔から若干不安そうな雰囲気か払拭される。

「それじゃあ皆！ 今から地図を配布しますからそれぞれの地図に書かれた開始地点までトランスフォーマーを動かしてみましよう！」

「トランスフォーマーを初めて起動するんだ。パートナーとのコミュニケーションも大切だぞ」

「それじゃあ皆！ 各自行動開始！」

「まず皆さん、トランスフォーマーの操縦に必要な人員について簡単に説明します！」



トランスフォーマーの前にそろって各々どうすればいいのか考えていたり、円陣を組んでいたりしている最中、蝶野さんが大きな声で解説を始める。

大まかにまとめると以下のようになる。

1. 登録したトランスフォーマーには最低でも操縦と通信、分隊長の三人は搭乗しなければならない。

2. それ以上の役割には攻撃手、管理士、索敵士がいる。

3. 基本どのトランスフォーマーにも乗員制限は存在しない。

個人的に少々付け加えると、1に関しては若干の例外が存在はするが、今の私達にはあまり関係のない話だ。

「それでは皆さん、試しに各々のトランスフォーマーを起動してみてくださいー！」

「どうすればいいのか全然わかんないよ〜」

「取りあえず、私達は分隊長と操縦、通信士と攻撃手に分かれましよう」

「コマンダーは西住殿がなさるんですよね？」

笑顔でそう問いかけてくる優花里さんに思わず言い淀む。

正直、あの時のことがまだ頭から離れず分隊長の役割を担うのは後ろめたかった。

優花里さんには悪いが、今回は遠慮させてもらうことにする。

「え、いや、その……私には無理かなって」

「困りましたね……」

「もうこうなったら、クジ引きで決めよう！」

何処からか沙織さんがクジを取り出す。

このまま続けていても堂々巡りになるような気がするので、ありがたくその案に乗せさせてもらうことにする。

クジ引きの結果、沙織さんが分隊長。攻撃手・優花里さん、操縦士・華さん、私が通信手という割り振りになった。

定員の割り振りも終わり、いざ乗車となると沙織さんが困った様子で車内を見渡した。

「ていうか、どう見てもこの車二人乗りだよ？」

「確かに、どう頑張っても三人しか乗れません」

「それなら大丈夫です。ちよつと見てて」

混乱する二人とキラキラした目で見ている一人に見守られながらホットロデイマスに乗り込む。

車内は昨日綺麗に掃除したため、埃っぽくはなく若干の芳香剤の匂いがした。

座席に座ると久しぶりの感覚に若干の高揚を覚えながら、記憶にある言葉がそのまま口を突いて出る。

「ゲットオン、オペレーター!」

私の言葉を認証し、通常の車であればカーラジオが備え付けられている所にある質量変位装置が作動する。

『認証・オペレーターゲットオン』

質量変位装置からスキヤング用の光が放たれ、私の身体を上から下へとスキヤンする。

すると、私の周辺の景色が広がっていった。

いや、正確に言えば私が小さくなっているのだ。

「え、え?!」

「これは、凄いですね……」

「いつ見ても凄い光景です!」

そのまま私の身体は装置の光に引き寄せられ、そのまま装置の中に吸い込まれた。

吸い込まれた先には四方を鉄の壁に囲まれた部屋があった。トランスフォーマー内部に取り付けられている副操縦席だ。

壁にはいくつもの機械が備え付けられており、部屋の中央には幾つかの机と椅子がある。

いずれ机にも多くのコードやパネルにキーボード、スクリーンなどがありそれぞれに専用のアタッチメントも取り付けてあった。

直ぐに机の端にオペレーター小さく彫られた座席に座る。すると、自動で安全のシートベルトが腰回りに装着された。

キーボードをタイプしながらヘッドセット一式を付け、質量変位装置の近くに付いている外部スピーカーと集音マイクを起動させる。

『みほが吸い込まれちゃった!』

『まるで映画の世界です……』

外の音がヘッドホン越しに聞こえてきたので、混乱している二人に問題ないと告げる。二人は安堵したという雰囲気や語気に滲ませる、

『これって大丈夫なの? 戻れなくなったりとか……』

「大丈夫だよ。すごい昔からある技術で安全性は実証されてるから」

『ともかく、早く乗り込みましょう!』

「攻撃手はゲットオン・アタッカーって言えば乗り込めます。あと、操縦士と分隊長はそれぞれ運手席と助手席に座ってください」

間もなくして優花里さんが副操縦席にテレポートされてきた。来るやいなや興奮冷めやらぬといった様子だったが、何とかなだめて攻撃手用の椅子に座らせ攻撃手用の専用ヘッドセットを被らせる。

攻撃用ヘッドセットは通信士用の物とは異なり専用の視点追従型の立体モニターが取り付けられており、それで外部の様子がトランスフォーマーの視界分だけ確認することができるのだ。

「何も見えません」

「まだシステムが再起動してませんからね」

優花里さんに攻撃手を使うアタッチメントの使い方や説明していると、

『エンジンをかけますがよろしいでしょうか?』

という華さんの許可を求める声が聞こえてきたので、少し待ってもらうように指示して沙織さんに指示を出す。

沙織さんは分かったと元気よく返事をし、一呼吸置いて、

『ええと、じゃあ行くよ! ホットロディマス、起動!』

沙織さんの起動指示を認証し、各所のスリープ状態にあったシステムが再起動を始め、私たちのいる副操縦席にも変化が現れた。

「おお! 外が見えます!」

「そろそろかな……ホットロディマスさん。聞こえますか?」

私が問いかけると、数瞬だけ間を置いてヘッドホン越しに返答が返ってきた。

『ここは……どこだ？ 君たちはいったい誰なんだ？』

長い間スリープモードでいたせいか少々混乱しているホツドロ  
デイマスに経緯を手短かに説明した。

すると、先程までの様子とは打って変わって明るい様子になる。

『いやあいいじゃあないの！ 久しぶりにぶっ飛ばせるんだ、こんなに嬉しいことないね！ これからよろしく頼む！ ……なんてつたっけ？』

そう言っただけで困るホツトロデイマスに自己紹介を始める。

「秋山優花里です！」

『五十鈴華と申します』

『武部沙織だよ！』

「西住みほです。こちらこそよろしくお願いします、ホツトロデイマス」

私たちの紹介を受けて、ホツトロデイマスは軽い調子で答えた。

『改めて紹介するよ。俺はホツトロデイマス、皆これからよろしくな！』

学校の古い倉庫の中で、私達のトランスフォーマーチームが誕生した。

それが、後に大きな奔流の中に投じられる一石となり、大きな波紋を生み出すことになるのは、誰にも想像もできなかった。

## 第五話 初めての实戦

大洗女子指定のTF道訓練施設……といっても、それは名前ほどきちんとして整備されているような場所ではない。

学園艦の寄港先である土地の周囲で、人気がない山道をそのまま訓練所としての貸し出しをさせてもらえるように要請し、許可を貰って使わせてもらっているのだ。

今回の訓練場はごく普通の山の中といっても過言ではない程のありふれた山である。

人の手が加えられている様子といえば、定期的に手が入れられている形跡のある雑木林や溪谷にかけられた吊り橋、ハイキング用に整備された小道などがあるだけで、そのほかには自然と動物が繁栄している。

人気が無いだけで町からもそこまで距離が離れているというわけではないので、ちよつと自然を味わいたいという時などには最適だろう。

耳を澄ませば鳥のさえずりが聞こえ、土のにおいや草木の匂いが鼻孔をくすぐる。

いつもならそのような物静かな山の中だが、

「とにかく逃げてくっ！」

『おいおいもつと早くハンドル切らないと木に突っ込むぞ！』

「そ、そんなこと言われましても！」

『ひええええっ！ 視点が！ 怖すぎますっ！』

『華さん、ギアを2速に落として、とにかく道なりに逃げてください！』

『落ち着いてちゃんと狙って！』

『逃げられちゃいますよ！』

「いやあ、足が遅くてゴメンよ！」

『よおしミサイルアタックだ！』

『よ、酔いそうです……』

『このまま追い立てるぞ！』

『疾風怒濤だ!』

『逃がさんぜよ!』

『勝ち星はいただく!』

「いやあ、久しぶりに血が騒ぐわい!」

今日は一段と騒がしいようだ。

『いくら指定されてなかったからって協定結ぶなんてズルいく!』

『沙織さん、少し静かに……』

『いやあスピードはあんまり出てないがスリル満点だなこりやあ!』

訓練開始して間もなくして、私達のグループはいきなり窮地に立たされていた。

どうやらBチームとCチームが密約を交わしていたようで、2対1の布陣に持ち込まれた挙句にレーザー攻撃の雨あられを受け絶賛大ピンチという訳だ。

『くうっ、お、重いです!』

『もつとカーブの時にはスピードを殺すんだ。なあに事故つても怪我するだけさ!』

『十分問題だよ!』

加えてオルトモードの運転席に座っている華さんも突然のことで冷静さを欠いており、沙織さんはもはやパニック状態だった。

優花里さんは攻撃手用のバイザーを外してふうと息をついた。

「うっぶ……これすごい酔いますね」

「すごいスピードで上下に揺れながら左右にも振り回されるからね……華さん、その先のY路を右折してください!」

『わかりました!』

地図で確認したところ、この先は高低差が少ないことに加えて少し広くなっており、まっすぐ行けば溪谷に続いているようだ。

少なくともスピードを出すことができればBチームのホイストであれば追いつけないのはハッキリしている。

チャージャーなら追いつけるスペックはあるが、何分あつちも初心者なので、おそらく加速が凄まじいこちらに分がある。とにかく今は2対1

という不利な状況から脱出するのが先決だ。

『広いところに出ました!』

「了解です、そのまままっすぐ広場を抜けたら道なりに」

「華さんストップです! 人がいますよっ?!」

再びバイザーをかけていた優花里さんが叫ぶ。

『え、はいっ!』

『ついでに思いっきりハンドルを右に切れ! このままだと林に突っ込むからな!』

次の瞬間、思い切り前のめりに圧力がかかり安全用のベルトが強く食い込む。

そのまま遠心力で、体が左に引つ張られるような感覚に襲われ思わず目を回す。

肺が一瞬とはいえ思い切り圧迫されたため、少し咳がでる。

「ケホッ……みなさん大丈夫ですか……?」

『大丈夫です……』

『し、死ぬかと思つたよ……』

「め、目が回りますよ〜」

皆の安全を確認し、安堵しつつ、ホットロデイマスに外にいた人が無事かどうか尋ねる。

『そこにいた女の子ならこつちが近づいてきた時には林の中に飛び込んでたぞ。 いや、今出てきたな』

『……って麻子じゃん! 何やってるのこんなところで』

すると、ヘッドホン越しに沙織さんが親しげに話しているのが聞こえてきた。

どうやら彼女——冷泉麻子さんと沙織さんは幼馴染の関係のようで、麻子さんは授業をサボタージユして山の中で昼寝をしていたらしい。

『みほ、このままだと危ないし乗せてもいいかな?』

「大丈夫です、副操縦席はある程度人数が入れるようになってますから」

少しすると、空いている座席の近くに麻子さんが転送されてくる。

そのまま座席に腰掛けたかと思うとあつという間に眠りだした。

突飛もない行動に、優花里さんが苦笑する。

「こ、個性的な方ですね……」

「あ、あははは……ってあれ?」

どこかで見たことがあると思い、少し思索する。確か今日の登校中に辛そうだったのを学校まで連れて行った人だったはず。

沙織さんの知り合いらしく、なんだか少し変わっていると思う。

『……Buuuuuu』

「あつ、華さん! 追いつかれそうです!」

空いていた索敵土用のインカムを耳に押し当てていたため、かすかに聞こえて来たエンジン音が耳に入った。

指示の返答としてホットロデイマスのエンジンが激しく唸り、一気に加速する。

少しすると、予定通り橋に着いたようで一気に減速する。

『お、落ちたりしないよね?』

『おいおい、俺は戦車じゃないんだからそこまで重くはないぞ?』

笑いながら言うロデイマス。

一応華さんに安全に通れそうか聞いてみると、古くはあるが意外としつかりした作りではありそうとのことらしい。

「一応安全を期してゆっくり行った方がいいんじゃないですか?」

『うくん……ゆっくり行こう! 安全第一!』

『分かりました』

体にゆつくりと車体が動くのと、吊り橋の上のためか左右に揺れる感覚が伝わってくる。

バイザーを付けている優花里さんや、主運転席の沙織さんが怯えたような声を出すので、なぜだか嫌な予感がしてならない。

そして、大抵の場合こういつた嫌な予感は的中するモノだと改めて理解する事になる。

『ん……? あつ、前に恐竜の頭見える!』

『グリムロックの奴だ!』

沙織さんから今考えられる中で恐らく最悪の事態のうちの1つの



連絡が届く。

華さんが車体を逃がそうとバックさせるが、ここでは気休めにしかならないのは明白である。

それは、私達がここに来た理由があったからだ。

「……あれ？ マズくありませんか？」

『バックミラーにB、Cチーム確認できます……』

橋という出口と入口が限定された場所で挟み撃ちに遭う。

典型的だが、最も遭遇したくない事態に陥ってしまったようだ。

つうと頬を汗が流れる。

「ど、どうしましょう?」

「とにかく逃げられる状況じゃなくなりました、ロボットモードで戦うしかありません。沙織さん、華さん、ホットロディマスをつランスフォームさせてください!」

『ど、どうすればいいの?!』

『華! ギアを一番下まで下げてハンドル横の赤いスイッチを押すんだ!』

『これですか……?』

『ホットロディマス、つランスフォーム!』

華さんがスイッチを押すと、ホットロディマスの外装に変化が現れる。

つランスフォームが始まったのだ。

車体の各所が滑るように動き、その形を変える。

『え、私達どうなるの?』

「ロボットモード中は副操縦席に移動しますから安心してください。

優花里さん、準備はいいですか?」

「ええ! 緊張はしてませんが問題ありませんよ!」

攻撃手用の小型の銃を模した武器アタッチメントを片手に持ちながら興奮した様子の優花里さんは銃を構えて攻撃準備に入る。

少しすると、沙織さんと華さんが副操縦席に転送されてきた。

相当焦ったようで二人とも酷く汗をかいている。

「た、助かった……」

「心臓に悪いです……」

『よし、変形完了だ！　しっかり頼むぞニュービー諸君！』

「華さん、バイザーを付けて操縦を！」

華さんがいそいそとバイザーを付けている間、優花里さんが武器アタッチメントを構え狙いを定める。

本格的な戦いの始まりだ。

「おれグリムロック、ロディマスたおす！」

「お前の射撃の腕じゃあせいぜい脅しにしかないぞ、グリムロック！」

ビーストモードからロボットモードにトランスフォームしたグリムロックが銃を向けて意気込んでいる。

とりあえず軽口を叩いたものの、状況は悪いとしか言い様がなかった。

背後から排気音と足音が聞こえ、とつさに後ろを振り向く。

『グリムロックはよろしいのですか？』

「あいつの酷い射撃の腕じゃ止まった的も掠められないさ。そんなことより、本命のお出ましだぞ」

背後から近づいてきていたBチームとCチーム……チャーとホイストが橋の向こう側に到着したのだ。

ホイストはロボットモードに変形しながら、こちらに右手のミサイルの銃口を構え、チャーも銃を構えながら意地の悪い顔で笑っていた。

「二人とも、初心者相手に随分と大人げないんじゃないか？」

「馬鹿拔かせ、初心者なりに手を尽くそうとした新人達を褒めるところじゃぞ」

「まあこうもしないと君たち相手に僕は勝てないからね。悪く思わないでくれよ！」

二人の武器からレーザーとミサイルが放たれる。

上体を下げて被弾に備えるが、相手の攻撃の腕もまだまだのようで

かすめる事も無くあらぬ方向に弾が飛んでいく。

これ幸いと、こちらも銃口を構えて狙いを付ける。

相変らず一定以上は体の主導権を奪われる感覚はなれないが、銃を構えるのに若干の懐かしさを思い出していた。

「今度はこちらからいかせてもらうぞー！」

銃口が右往左往しながらも、なんとか引き金を引く。

何発か撃ち続けると、数発が相手の体に命中し、体制を崩す。

『いやっほおおおおおおお！ さいつこうだぜえ！』

優花里はやたらとハイになっているが、トリガーハッピーのケでもあるのだろうか。

「ぐうつ、相手の方が狙いは正確じゃなあ。　じゃがこちらも負けはせんぞー！」

「慌てることはないよ、ゆっくりでもいいから確実に狙っていこう」

最初はこちらが優勢だったが、それも次第に傾き始める。

相手も慣れてきたことに加えて、人数の差がそれを助長していた。グリムロックは背後で銃を撃っていたが、当たる心配はないので意識せずとも大丈夫だろう。

すると、チャーのレーザーが吊り橋を支えていたワイヤーを掠めた。

競技用の低出力レーザーとはいえ、その熱量は鋼鉄製でなかったワイヤーを焼くに十分以上の威力を持っていた。

ブツンと大きな音を立ててワイヤーがちぎれ飛び、支えの一つを失った橋がバランスを失う。

途端に体制を崩してしまい、橋の上に転んでしまった。

「うおっ！　早く体勢を……」

『ううつ、どうすれば』

体勢を立て直そうとしたが、体がそれに追いつかなかった。

操縦手の華が突然バランスの悪い足場での操縦にさらされ四苦八苦してしまっているのだ。

「このままじゃ……ええい、届けっ！」

ノロノロと動く腕で橋の縁を掴む。そのまま橋は重量を支えきれ

ず一気に傾き、体が数本のワイヤーを重量で切りながら橋から転がり落ちた。

だが、縁を掴んでいたおかげで真つ逆さまに落下するのは避けることが出来た。

とはいえ、危機的状况に変わりはなかったが。

「今なら動くに動けん、たたみ掛けるんじや!」

「言われなくてもそうするさ、恨むなよロデイマス!」

「おいおい早く上がらせてくれないと、このまま蜂の巣にされちまうよ!」

『そうしたいのですが……上手くいきませんっ!』

なんとか空いた手でも橋の縁を掴むが、機能制限と華の操縦の不慣れさが相まって体を持ち上げられない。

ガラ空きの横っ腹にホイストのミサイルとチャアのレーザーが容赦なく突き刺さる。

装甲の表面が削り取られ、神経センサーから痛みの情報が流れる。

「ぐうっ……」

『胴体と右脚部にダメージ! このままだと蓄積値でリタイアです!』

みほの限界に近いことを知らせる連絡が届き、もはやこれまでと思つたその時、

『貸せ、私がやる』

『麻子? ちょっとなにやって……』

「なんとかなるなら思いっきりやってくれ!」

ロデイマスが叫んだ瞬間、力が入らなかつた腕に本来に近い力が入り、勢いよく体が宙に舞つた。

そのままダメージを受けた右脚部をかばうようにバランスを失つた橋に器用に着地する。

「な、なにいつ?!」

『麻子凄い! どうやったの?』

『マニュアル読んだ』

まさかあそこから復帰するとは思わなかつたのか、ホイストと

チャーが驚く。

その瞬間を、俺とみほは見逃さなかった。

「今だー！」

『優花里さん、今です！』

『任せてくださいっ！』

流れる動作で銃を構え、銃口から数発のレーザーが放たれる。

そのまま熱線は二人のトランスフォーマーに降り注ぐ。ロディマスの流れるような動作に、両チームの操縦士は反応することが出来ない。

胴体と頭部に熱線が直撃する。

「ぬうつ……なかなかやる、わい……」

「あはは、やっぱり向いてないなあ」

二人のトランスフォーマーの肩から白いフラッグが飛び出す。

それは蓄積ダメージによる撃墜判定……敗北の証だ。

『や、やった！』

『一気に二人も倒しましたあ！』

『凄かったですよ、麻子さん、優花里さん！』

『皆さん凄いです！』

初撃破に喜ぶ皆の声が届き、なんだかこちらも嬉しくなってくる。久しぶりの実戦の感覚に体が熱くなり、エンジンの回転数が上がる。

「おれグリムロック、桃、おれよりヘタクソ！」

「お前だってそんなに上手くないだろグリムロック！ 優花里、あいつは頑丈だから思いつきりお見舞いしてやれ！」

『わかりました！』

両腕を構えてグリムロックに向けると、両腕に取り付けられている六本のエグゾーストパイプにエネルギーが送り込まれる。

オルトモードでは排気の役割を担う部分であるが、ロボットモードにおいてはビームを放つエネルギー兵器となるのだ。

グリムロックの頑丈な装甲にダメージを負わせるには、これぐらい

の火力は必要だろう。

「食らえ！」

『優花里さん、グリムロックの装甲だと一撃では落とせないかもしれないかもしれません！』

『オーバーヒートぎりぎりまで打ち込んでやりますよ！』

エグゾーストパイプから六本の光線が放たれる。足の遅いグリムロックは避けきれず、そのまま巨体に六つの光線をモロに食らう。

「ガアッ?! 痛い！」

「まだまだいくぞ！」

よろめくグリムロックに容赦なくビームを食らわせる。

最初はなんとか耐えていたが、エグゾーストパイプが焼け付く寸前にはグリムロックが地面に膝を着く。

そして肩からカシユツと音を立ててフラッグが飛び出した。

「グウ〜……」

地響きを立てながら倒れるグリムロック。

怒濤の連続撃破に、皆歓喜の声を上げた。

だが、一つ大切なことを忘れていた。

突如、グリムロックが倒れた側の林の中から何かが飛び出してきたのだ。

そのまま飛び出してきた何かは両腕ごと体に巻き付き、ガツチリと縛り上げられてしまう。

状況を把握できないみほが何事かと慌て出す。

『ロディマス、一体何が?!』

「これは……マイスターだ！」

ロディマスの想像通り、林の中からマイスターが姿を現した。その左腕は変形しており、そこから飛び出したワイヤーがロディマスに絡みついたので。

マイスターは空いた右手で銃を構えこちらに向けている。

「すまないロディマス。だが勝ち譲ってもらおうぞ！」

『ロディマス、ソウブレードでワイヤーを切れますか?!』

「残念だがブレードを出しても切れない所を上手く縛られてる、これ

はもう……」

「なあに、すぐに済むさ、食らえ！」

銃から飛び出した光線がロディマスに襲い掛かる。

——はずだった。

銃から光線は放たれず、唐突にワイヤーがマイスターの左腕に内蔵されたウインチによって巻き上げられ始めたのだ。

突然のことに対応しきれずに、マイスターとロディマスの体は引き寄せ合う。

だが、ここは渓谷。

その引き寄せ合った体は近づく過程でお互いの体を谷へと投げ出させた。

「うおおおおお?! マイスター何したんだ！」

「間違えて攻撃手がウインチを巻き上げたみたいだ！」

真つ逆さまに谷底に落下する二人。

トランスフォーマーといえども、重量や高さの関係からこのまま地面に叩き付けられたらただでは済まないだろう。

マイスターとロディマスはできる限り中の皆に衝撃が伝わらないように姿勢を変え、そのまま地面に激突する事を覚悟する。

「ハーケンミサイル！」

すると、どこからか赤い錨いかりが飛んできた。

その錨からは鋼鉄のワイヤーが伸びており、マイスターとロディマスを絡め取った。

錨が引き上げられ、重力とそれに相対する引力によって体に衝撃が走る。

その代わりに落下速度は徐々に落ちていき、やがて体は空中でつり上げられた。

錨のワイヤーの出所を目で追っていくと、渓谷の縁に続いている。その先には、なんとビッグコンボイの姿がある。

ビッグコンボイの脚部からは赤い錨……ハーケンミサイルに取り付けられたワイヤーが伸びていた。

「訓練終了！ 全員学園艦に帰投した後に反省会を始める！」

「皆、訓練お疲れ様！ 初心者なりによく頑張っているのがわかったわ！」

ロデイマス達を倉庫に運んだ後に、私達は蝶野さんの総評を聞いていた。

もう日も大分傾いており、皆本格的な訓練の後ということもありくたびれた様子である。

蝶野さんが一通りの総評を終えると、蝶野さんの後ろで静観していたビッグコンボイが一步前に入る。

「諸君、初めての实战形式の訓練にしてはなかなかよくできていた。

最後に私から各部隊に評価と修正点を伝える」

ビッグコンボイの言葉に、思わず姿勢が正される。

それは他の皆も同じだったようで、皆くたびれた様子ながらも顔つきに生気が戻る。

「順番に評価する。まずはAチーム、撃墜スコア3でトップだ。

3対1という不利な状況から、機を逃さず、果敢に戦う姿勢は見事だった。だが、優秀な結果故に最後の油断が惜しいと言わざるを得ない。終始警戒しろとは言わないが、一切姿を見せない相手に注意を払う大切さを学べただろう」

ビッグコンボイの言葉が身につまされる思いだった。

不利な状況からの逆転という状況に、思わず舞い上がってしまった、いつ周囲から攻撃が飛んできてもおかしくない場所で油断してしまったのだ。

これが公式試合ならば、後悔してもしきれないミスになっていただろう。

「続いてBチーム。これはCチームにも言えることだが、初心者なりに策を弄するなどなかなか面白い手を打つのは感心したぞ。今後もアイデアがあれば随時提案して仲間同士で共有するといいだろう。反省点はCチームは有利な状況からの油断からくる操作の遅れだ。トランスフォーマー自身もある程度は挙動をとることがで



きるが、操縦する者達による操作のほうも重要だ。しかもロデイマスと長い付き合いのあったチャーならロデイマスがああ危機状況を開する可能性も考えていたはず。もつとパートナーであるトランスフォーマーと情報共有することを心がけるんだ。次にBチームだが、チャーよりも後ろに陣取るべきだった。チャーはグリムロック程ではないが頑丈なトランスフォーマーだ。ミサイルという連射速度が早くないホイストの弱点を鑑みても、硬いチャーを後ろから援護することで相手が手を打ってきたとしてもチャー共々撃墜される可能性はより低くなつてたはずだ。もつとトランスフォーマーのことをよく知り、パートナーの強みを生かせるように努力するように」

「はいっ！」

「いい返事だ。次にEチームだが……ビーストタイプのトランスフォーマーということに加えて、我の強いグリムロックが相手とはいえ、射撃の腕が酷い。初めてとはいえ、動けない的に当てられないのは論外だ。それに、グリムロックの強みはそのビーストモードの圧倒的なパワーだ。ロデイマスにあのまま橋を渡らせ、油断したところをビーストモードで一気に撃墜するという方法もとることができただろう。今後の課題としては、攻撃手の射撃の練習とグリムロックとのコミュニケーションだ。最後にDチームだが、攻撃力の低いマイスターであることと、初心者であるということを含めて最後の最後まで隠れているというのは賢い戦法だった。最後の最後でロデイマスを倒そうと動いてもいたのもよかつたぞ。ただ、うっかりとはいえ武装の操作ミス危険性は今回の訓練でよくわかつたはずだ。一つの過ちが仲間に必要な被害を与えることもある。今後も操作を間違えないように練習しておくように」

「わかりました〜」

すべての評価を終え、ビッグコンボイは改めて皆を見て、ゴホンと咳払いをする。

「最後だが、私から大切な事を教えておく。トランスフォーマー道は一人で戦うんじゃない、トランスフォーマーと、君たちと、皆で戦

うんだ。 One for All, All for oneだ！」  
「……ビッグコンボイ教官って、意外と熱いこというんですね」

今まで冷静でクールな評価を下していたビッグコンボイの以外にも熱血な発言を以外という一年生の言葉に、思わず何人か笑い出す。続いて、熱血という言葉に触発されたのか、バレー部のキャプテンらしき人（この学校にバレー部があったかは疑問なのだが）が興奮し始める。

「クールな人かと思ってたんですけど、意外と熱血好きだったんですね！　なんだか親しみを感じるっ！」

「……また私らしくない事を言ってしまったな」  
「寧ろ、ビッグコンボイ教官らしいですよ？」

蝶野さんがビッグコンボイ教官に笑いながら言うのと、ううむと唸りながら納得いかない様子。

「とにかく、今回の訓練ご苦労だった！　今後も初心を忘れることなく、TF道に努めて欲しい！　以上、解散！」

『失礼します！』

訓練が終わるやいなや、多くの生徒たちに囲まれるビッグコンボイ教官。

最後の言葉で親しみやすいと思われたようで、皆に囲まれて困惑する教官だったが、話しかける皆に少し待っていてくれと断りをするのと、私の方に向かってきた。

正直な話、分かっていた展開だった。

「久しぶりだな、みほ。　またTF道をやる気になったんだな」

「……お久しぶりです、先生。　恥ずかしながら、帰ってきました」

「ここじゃ話にくい、少し離れた所にしよう」

ビッグコンボイに連れられ、皆から少し離れた芝生の上に座り込む。

その横にビッグコンボイもドスンと大きな音を立てながら座り込んだ。

夕日に照らされた校庭が、何処かノスタルジイを感じさせる。  
「あの事、まだ引きずっているようだな」

いきなり本題に入るビッグコンボイの質問に、思わず言い淀んでしまおう。

情けなさから思わず俯いてしまおうが、ビッグコンボイは何も言わない。

「ビッグコンボイ、ビーストモード！」

突然ロボットモードからビーストモードになったビッグコンボイ。

マンモス特有の毛の生えた長い鼻が俯いた私の目の前に突き出される。

「触ってもいいぞ」

「……失礼します」

言われた通りに鼻に触ると、ゴワゴワした毛の感触とビーストモード特有の暖かさが伝わってくる。

懐かしい感触に、思わず息が詰まった。

鼻を撫でながら何も言わない私に、ビッグコンボイはクールでも熱い様子でもなく、優しく話しかける。

「辛かったろう」

「……はい」

「君がした事は確かに間違っていたかもしれない。だが絶対に間違っているとは、私は思わない。多くの人が君を非難したとしても、私は君の味方だ」

「……先生、私……私ッ」

ビッグコンボイの毛皮に顔をうずめる。

彼の優しさが暖かく、懐かしさと、涙が止まらなかつた。

ビッグコンボイは何も言わず、私が泣き止むまでそばにいてくれた。

## 第六話 親善試合

「というわけで、聖グロリアーナ女学園との親善試合を組むことになった。皆、心して準備するように」

「ちよつと唐突すぎない?!」

「聖グロリアーナってどんな学校だっけ？」

「超が十個付くぐらいのお嬢様学校」

いつものようにTF道の訓練を始めるために集まった私達だったが、いつものというか、相も変わらず突然の報告に面食らう一同。

そしていつも通りに生徒会長——最近やつと生徒会の人達の名前を知ったが、角谷さんというらしい。角谷さんは気楽そうな風体で芋けんぴをポリポリ齧っている。

「ねえねえ、聖グロリアーナ女学園ってTF道としてはどんな感じなの?」

「端的に言って強豪ですね。全体の連携もさることながら個人個人の操縦技術を高い水準で維持する努力を怠らない、バランスのいいチームと言えます」

まあ実戦のビデオや関連雑誌からの受け売りですがと、最後に断りを入れる優花里さん。

優花里さんが言うように、確かあの学校は中々に優れた操作テクニクを持っていたはず。

決定的な打撃力に乏しい面はあるが、代わりに少数であっても確実な結果を残すことができる厄介さを持つといった印象だ。

「この後、各チームのリーダーを集めてミーティングを行う。リーダーは生徒会室に集まるように、以上」

片眼鏡——河嶋さんというらしい。その河嶋さんがいつものように終わりのあいさつをすると、みんな思い思いに散らばって行く。

前回の訓練の後、なんだかんだで分隊長の役割に据えられた私は、指示通りに生徒会室へ足を運ぶ。

その後は予定通り作戦会議はつつがなく進んだ。

河嶋さんがホワイトボードに張り付けた地図とその書き込みを、手で示しながら説明する。

余程自信があるプランのようで、説明に力が入っているのが目に見えた。

だが、その内容に私は少し思うところがあった。

「……と、このように閉所に誘い込みつつ、私達は高所であるこの地点に陣取って敵を待ち伏せする」

「……あの、ちよつといいですか？」

「ん、どうした西住」

「その……」

「取りあえず言ってみなっ」

角谷さんからの押しもあり、思ったことを口にする。

「その作戦だと、航空機型のトランスフォーマーに対しての警戒が薄いんじゃないかと……うちには飛行できるトランスフォーマーはいませんし、閉所だと最悪一方的に……」

「お前は私の立てたプランじゃ不満だというのか？」

「え、いや……」

「作戦に文句があるなら、お前が隊長をやれッ！」

責めるように威圧する河嶋さんに、思わず口ごもる。

思わず目線を下げてしまうが、更にそれが河嶋さんの癪に障ったらしく、更に追求される。

このまま気まずい問答が続けられると思われたが、見かねたのか角谷さんが助け船を出す。

「まあまあその辺にしときなっ、桃ちゃん」

「桃ちゃん言うなッ！」

桃ちゃんという呼び方にコンプレックスでも持っているのか、逆鱗に触れたようで烈火の如く怒り出す河嶋さん。一喝すると、途端に頭が冷えたのか一つ咳払いをして冷静になる。

角谷さんは静かになった河嶋さんから視線を私に移し、

「でも、確かに隊長は西住ちゃんがいいかもね」

「はあ……え？」

とんでもないことを言い出した。

突飛も無いことに思わず辞退しますの一言がでてこず、動揺する私にたまたみ掛けるように角谷さんは話しを進める。

「そんじや、西住ちゃんがウチのチームの指揮をとって!」

そういうと、パチパチと拍手をする。同じく生徒会室に集まっていた他の分隊長の皆もそれにつられて拍手をし、事実上リーダーになることを容認されてしまった。

「もちろん、勝ったらいいモンあげるからさ! 干し芋3日分! どうよ!」

笑顔で提案するのに対して私の口からは愛想笑いが出ていたが、恐らくその景品をもらって喜ぶのはこのメンバーの中で貴方だけだろうという言葉をぐつとこらえた。

すると、横で話しを聞いていたバレー部のキャプテン(予定であるらしい)の磯部さんが質問する。

「ついで、負けたときはどうなるんです?」

「ん? ん〜そうだなあ……納涼祭であんこう踊り踊ってもらおう?」

「えっ?!」

「あ、あのあんこう踊りをですか……」

角谷さんの提案を聞いた途端に、なぜだか生徒会室の部屋の気温が1〜2度は下がったかのような錯覚を覚えた。

皆は顔を引きつらせており、河嶋さんも小山さんもまるで歯医者に行くのと親に告げられた子どものような顔をする。

「んじや、皆親善試合に向けてガンバルゾー!」

一人元気な角谷さんが笑顔で拳を振り上げた。

早朝、冷たい海風が頬を撫でる。

学園艦の朝はいつもだが、朝の底冷えが酷い。夜中にタイマー付きのエアコンで部屋をある程度暖めていないと恐らく十中八九風邪をひきそうなのだ。

そろそろ夏本番ということもあり、昼間には日本特有の夏の湿気や

海からの照り返しなどもあってなかなかの暑さになるが、朝の海風はどうにも寒くていけない。

夜の湿気と温度の対処に頭を悩ませながら、学校の倉庫へと歩をすすめる。

朝早くと言うこともあって、校庭は朝霧と異様なほどの静けさに包まれており、昼間の賑やかな光景とのギャップからなんだか不思議な気分になる。

早くロデイマスを出してしまおうと校門へと向かうと、校門の入口に髪をキチンと切りそろえておかつぱにしている風紀委員の人が立っていた。

相手もこちらが目に入ったようで、キチン姿勢を正して挨拶をしてくる。

「おはよう、貴女たちも大変ね」

「おはようございます。毎朝頑張ってる風紀員さん程じゃありませんよ」

「……確かにね。冷泉さんがもつとシヤンとしてくれれば、私ももつと気楽でいられるんだけどね……今はそんなことどうでもいいか。今日は試合なんですよ?」

「はい、聖グロリアーナと」

「ふうん……TF道とかは私にはよくわからないけど、頑張つてね」

素っ気ない様子で言い残して、再び風紀員らしくキチリとした姿勢になる。

彼女なりに気を浸かってくれているのだろうと、内心感謝しながら校門を後にする。

その足で倉庫へと向かうと、既にいくつかのチームが集まってパートナーのトランスフォーマー達と話していた。

「おや、ニシズミ隊長。今日はよろしくね」

ホイストが手を振って挨拶して来たので、軽く手を振って返すと、周りにいたバレーボール部の皆もぺこりと頭を下げた挨拶をする。

運動部らしく、大きくハッキリとした声に少し驚きながらまた挨拶

を返す。

「隊長、今日は勝ちましょう！」

「あんこう踊りは絶対避けましょうね……」

明るい様子の典子さんとは対照的に、他三人は若干引きつった笑みを浮かべている。

昨日から気になっていたが、そこまで酷い物なのだろうか、今更ながら不安になってくる。

試しにホイストに尋ねてみると、

「……昔アレを見たことあるけど、少なくとも一生忘れられない思い出になると思うよ」

言い淀みながら答えた。聞かなかった方が良かったと若干後悔する。

昨日、沙織さん達にも聞いてみてはいたが、やはり相当アレな行事らしい。

すると、話しを聞いていたのかマイスターが横から話しかけてくる。

「どうやら一年組はまだ来てないらしく、暇をもてあましていたらしい。」

「いやあ、そんなに気を揉む事も無いさ。 案外ノれるいい曲だよ」

「それを言えるのは少なくとも君だけ思うな……」

「アレを踊ったら少なくとも高校生活の間はずっと笑いのネタにされまますよお……」

音楽好きで知られるマイスターは務めて明るく言うが、ホイストとバレエ部の近藤さんがそれを引き気味に否定する。

恐らく彼女の言うとおりなら、節目節目に思い出されては笑いのネタ扱いにされる一番酷いタイプのモノなのだろう。

「おいおい。 お喋りするのには構わないが、早く行かなきゃならないんじゃないのか?」

すると、倉庫の奥でチャーやグリムロックと話していたロディマスが催促してきた。

時計を見ると、予定の時間までもう少しといったことに気がつく。



話しているのに気を取られて完全に失念してしまっていた。

「いやあグリムロックを抑えてたんだが、やっぱりいくら話しても無駄だな」

「おれグリムロック、早く戦いたい！」

「やめんかバカ！ その元気は試合までとつとかんかい」

『す、凄い馬鹿力だぞコイツ！』

「あははは！ いいぞくやれやれ！」

「会長、笑ってないでなんとかしてください！」

狭い倉庫の中で尻尾を振り回そうとするグリムロックを歴女チームの皆が乗り込んだチャーターでなんとか押さえ込んでおり、それを会長が笑って見ていた。

関わらないのが吉とみて、ロデイマスはさっさとトランスフォームし、私もそれに乗り込む。

「よし、ぶっ飛ばすぞ！」

「危ない運転しないでくださいよ……？」

「分かっているって、行くぞ！」

口ではそういうロデイマスだが、私が触れる前にギアが一気にガッツと音を立て1速に叩き込まれ、アクセルが勝手に踏み込まれる。

エンジンが盛大に音ながら一気に回転数を上げると、一気に車体が加速し倉庫を飛び出す。

そのまま校庭の砂利を盛大に巻き上げながら校庭を突っ切り校門へと突入、先程会った風紀委員の人の横をドリフトしながら通り抜ける。

「こらーっ、危ないでしょお！ まったくやっぱりアイツの知り合いに碌なのいないじゃない！」

そんな声が聞こえた気がしたが、そんなことはつゆ知らずといった様子でロデイマスはエンジンを噴かして一気に走り抜けた。

そのまま朝の静けさを台無しにするような爆音をたてながら暴走同然に目的地へと向かう途中、華さんと優花里を迎えに行く。華さんに操縦を変わってもらおう頃には、ある程度走って満足したのか操縦をこちらに譲渡して安全運転に切り替わった。

そのまま華さんの安全第一の運転で目的地……麻子さんの家へと向かう。

一軒家の平屋の麻子さんの家に到着すると、どうやらまだ起床に苦戦しているらしく沙織さんが布団を引きはがしている所だった。

「華さん、思い切りエンジンを噴かしてください」

「いいんですか？」

「近所の皆さんも珍しく早起きできる機会だと思えば大丈夫です」

華さんがアクセルを踏み込むと、フロントのホットロッドエンジンの回転数が一気に上昇し、エグゾーストパイプとエンジンからけたたましい音が鳴り響く。

周囲の民家からは何事かと表に人が集まってきたので、軽く謝罪をしてエンジンを止める。

企み通り、あまりの五月蠅さに麻子さんも観念したようで、寝間着の姿のままだが荷物を持ちながら家から出てきた。

そのまま沙織さんと麻子さんを乗せ、副操縦席で麻子さんの支度をさせながら寄港の際の乗り降りのための大型駐車場へと乗り入れる。何十分かロディマスに載せたカーラジオを聞きながら揺られていると、ようやく寄港先の大洗町へと到着し、他の車の流れに任せてロディマスを降船させる。

他のチームの皆も上手く下りられたようで、一列に並びながら船から降りる。

すると、いつもであれば青空が見られるはずの場所が何かに被われている。よく見ればそれは、聖グロリアーナ女学園を擁する学園艦であつた。

大洗女子の物との大きさの違いに圧倒されながら、親善試合の会場へと向かう。

大洗町の住宅地を横断しようとする、町の人たちが物珍しそうにトランスフォーマー達を見物しに来ていた。

「おお、ホットロディマスだ！」

「グリムロックにマイスターもいるぞ！」

「なんだか久しぶりだなあ……この感じ」

「最後はもう20年も前になるのかの」

「ホイスト！ ホイストじゃない！」

「……ああつ?! もしかして杏子くんかい！ いやあ随分美人になったじゃないか！」

「ロデイマスやあ、この年寄りのこと覚えとるかい？」

「忘れるもんか、機械イジリが好きだった花山！ まだまだ元気そう  
で安心したぞ！」

「おれグリムロック、ずいぶんかわったけど、大洗なつかしいぞ」

周囲からの暖かい声援に囲まれながら、ロデイマス達トランス  
フォーマーが地域に深く根付いていることに操縦者の皆は驚きを禁  
じ得なかった。

しばらく声援に囲まれながら進んでいくと、競技会場付近になるに  
つれて人が少なくなっていく。

静かになった途端に、不思議と緊張が皆を包み始めた。

会場に到着すると、すでに聖グロリアーナの人たちが到着してお  
り、トランスフォーマーの簡易検査を行っていた。

一台のトランスフォーマーらしき車両が近づいてきて、私達の前を  
塞ぐように停車した。

青と白を基調とした大型のキャリアカーで、連結されている荷台横  
には赤い弾頭の大型ロケットが備え付けられている。

「大洗、全車両停止してください」

そう一声かけて車両を停止させるとキャリアカーの扉が開き、中か  
ら人が降りてきた。

赤い競技用ジャケットに身を包み、透き通るような碧眼に整えられ  
た美しい金髪の女子生徒—— 資料で見た事がある、聖グロリアー  
ナ女子学園のリーダー、通称ダーズリンその人だ。

河嶋さんが降りて事情を聞こうとすると、こちらが話しかけるやい  
なや、

「用事があるのは私ではありません。 こちらのトランスフォー  
マー、ウルトラマグナスの方ですわ」

「久しぶりだな、ロデイマス」

キャリアカーが変形した。

荷台部分が変形し、前方の車両部分を包み込むように外装がスライドする。

あつという間に上部の土台部分が腕に、下部が足になり、ロボットモードに変形した。

「ウルトラマグナス！ いやあ懐かしい顔が揃ってるじゃないか！」

「お前さんもTF道に参加してたんじゃないか」

「ウルトラマグナス、おれグリムロック、会えてうれしいぞ」

口々にこちらのトランスフォーマーも親しげにウルトラマグナスと話し出す。

『なあ隊長、トランスフォーマーって大体知り合いなのか？』

「長寿ですからね、多くのトランスフォーマー同士は皆お互いの事を知ってますよ」

通信越しに松本<sup>エルヴィン</sup>さんの質問に答えると、何やら嬉しそうな笑い声が出た。

歴史好きとは話しから聞いて（といっても見た目からでもなんとなく想像は付くのだが）いたが、最近はトランスフォーマーに関しても熱心に学んでいるらしい。

久しぶりの再会を喜び合う皆。

そんな中、ダーズリンさんが何か考える様な顔をしてこちらを見ている事に気がついた。

こちらの視線に気がついたのか、顔に笑みを浮かべる。

彼女の容姿もあるが、所々に見られる所作の雅やかな雰囲気も相まって非常にさまになっており、心なしか見とれてしまう。

こちらのメンバーで彼女に近いのは華さんぐらいだろうか。

彼女も言葉尻や動作の一つ一つが品がある。といっても、ダーズリンさんの方はまさに淑女といったモノで有り、華さんの場合は大和撫子といった部類であるが。

「……どうかしたか」

「いや、なんでもありません」

ロデイマス達はもう会話を十分したようで、試合準備に入ろうとしている。

ウルトラマグナスは姿勢を下げ、私達の方をみると、笑顔をむけてきて、

「初めまして、君たちがロデイマス達のパートナーだね？ 私はウルトラマグナス、見ての通り彼らとは無駄に長い腐れ縁さ」

「いいか、そいつの人の良さに騙されるなよ。 そんな紳士ぶった物腰して俺の知り合いの中じゃなかなかのやばい奴だぞ」

「うるさいぞロデイマス！ 少なくとも暴走行為で免許停止処分を受けたお前に言われたくは無いな」

「ああそんなこともあったの……ワシも長いこと生きとるが免許食らったトランスフォーマーはお前だけじゃったよ」

『トランスフォーマーって免許取ってたんだけ……』

『ええ、ありますよ。 政府発行のヤツが、といっても国際A級ライセンスぐらいのレベルですけどね』

『凄いのか凄くないのかよく分からないですね』

「うるさいぞ！ 走るの俺の人生なんだ、少しくらい羽目を外してもいいだろ?!」

そんなことをしている内に、集合前の合図が鳴り響く。

ウルトラマグナスは聖グロリアーナの団の方へと向き直ると、トランスフォームする前に、私達に向けて話しかける。

「昔の仲間だとしても、今日は私達が勝たせてもらう」

「いやあどうかなマグナス。 なかなか筋がいい奴らだよウチは」

「そうか……手加減はしないからな」

そう言い残すと、キャリアカーにトランスフォームし、ダージリンが乗り込ませると自分たちの仲間の下へ向かっていった。

「それでは、聖グロリアーナ女子学園と大洗女子学園の親善試合を行います！ 双方、礼！」

『よろしくお願ひします！』

聖グロリアーナ女子学園との戦いが、遂に始まる。

## 第七話 開戦！ 聖グロリアーナ

聖グロリアーナ女学園は、所謂名門である。

その認識を一般に持たれる要素として、各々が高い意識を持っている事が上げられるだろう。

提携先であるイギリスの縁から、生徒には礼儀作法・格式の指導が徹底され、淑女を育成する学校とも呼ばれている。

また学業で高い成績を残しているのは勿論のこと、各方面への活動参加を推奨しており、ボランテニア等の地域や社会的な協力等にも定評があり、ノヴレス・オブリージュを有言実行している。正に英国的な優雅さを体現しているのだ。

TF道に関しても先述したことに準じており、OBの各所への太い繋がり・経済援助から設備、ノウハウのアドヴァンティジを獲得しており、後進指導に余念が無い。

常に冷静に、優雅であれ。

それが、彼女達の信条であり、

今代の聖グロリアーナTF道代表・ダージリンもまたそれに準じる者である。

「……今日は随分と抑えていますのね？」

『何がです？』

質問に要領を得ないといった様子で、オレンジペココ聞き返してくる。

我ながら意地の悪い質問をしたかと思っただが、直ぐに考えを改めた。

「今日の紅茶は随分と味気ないということよ」

『はあ……』

生返事で返すペコに、若干物足りなさを感じながら、どうにか彼女がジョークの一つでも返せるようにならないものかと思案する。

彼女は一年にしては随分と優秀な通信士である。指示には従順で

あるし、反抗的な態度をとったことは彼女が我が校のTF道に参加してから見たことが無い。

かのサミュエル・スマイルズは自助論に於いて、  
『Every one has problems — that's life.  
at them as obstacles or opportunities  
と残しているが、彼女が入ってから凡そ二ヶ月の間、日頃の素行は謹厚そのものであり、性根からしてそういった性分なのだろうと私は推察した。

だが私は些か素直すぎる嫌いがあると、彼女の性質に対して気にかかるところがあった。

素直なのは結構なのだが、何分彼女は顔や言動に出やすいたちであつたからだ。

聖グロリアーナにはある暗黙の了解があり、年功序列じみた雰囲気がある。

学校の運営費をまかなう出資者は殆どがOBなどで占められているため、自然とそのような風潮が生まれたと、以前先輩が零していた。

簡単に言ってしまうえば、我が校では我が物顔の先輩の顔を立てて後輩はそのイエスマンでいるべきと言つた 居丈高な思考が跋扈している。

私もその例に漏れてはいないという自覚はあるが、少なくともそれは個人の素養や努力からくる自信が私をそうさせるのであって、それは決して学校の経歴を傘に着た虎の威を借る狐のじみた矮小な考えからでは決して無かつた。

だが、そのような好かない人種を相手取らなければならぬのが世の常である。

相手の言葉に対して笑みを返しながら、その口で嫌みの一つ返せるような度胸と気丈さが無ければ、彼女も私が嫌うようなイエスマンか己の身の丈を理解しない高慢な言葉を投げかける淑女とはほど遠い存在になってしまうことだろう。

身の丈を理解しろというよりは、各々の立場を配慮した振る舞いを

すべきというべきか。

二年の時には、上級生と下級生に挟まれていたのであまり気にはならなかったのだが、三年という責任ある立場に立つと、後輩に対してある種の愛着といったモノが湧いてくるものである。

当時私が彼女と同じ歳だった頃は、先輩のからかいに対して辟易していたのを覚えているが、今思えばあれは先輩達なりの優しさだったのだろう。

同じ立場になり、始めて当時の先輩達が抱いていたであろう思いと同様であろう思いを抱えていた。

私ほどでは無いにしても、彼女に目をかけている身としてはもう少し対応などをウェットに富んだものにして欲しいと、こうして毎度の如く解りにくい謎かけじみた質問や趣味の格言を講じているのだ。

「ダージリン、あまり虐めてやるな。オレンジペコはまだ一年生なんだからな」

「あらウルトラマグナス。私が彼女と同学年だったころは冗談の一つは返したわよ?」

「オレンジペコ、あまり真面目に聞くもんじやないさ。彼女の話は紅茶のお茶請け程度に思っていればいいんだ」

『そういうモノですかね……』

頬に笑みを浮かべながら、ウルトラマグナスの揺れを感じつつ紅茶を口に含む。

まだ淹れてからあまり時間が経っておらず、キームンの華やかな香りが面白い。

だが安物を使ったのか、はたまた抽出の際に湯を高温にしたのか。舌に若干のエグみが残り、後味と残り香を損なわせていた。

『こちらパワーグライド、いやあ今日は晴天でよかったねえ! お陰でやつこさんも見つけやすくて助かったよ!』

『何言ってるんだ。お前さん只アクロバットしてただけであの岩場に目をつけたのは俺だぞ』

「エアレイド、貴方のお陰というのはわかったわ。でも自慢話をする前に詳細を教えてくださいな」



『ああすまない。大洗は斥候を出してるな。十時の方向にある岩場からこつちの様子を伺ってるみたいだぜ』

「そう……報告ありがとう。航空部隊は太陽を背に無音飛行へ。あとパワーグライド、アクロバットをするのは構わないけれど、隊列を崩さないように」

航空部隊からの通信を小耳に挟みつつ、おおよその予測をする。

大洗女子学園——再興したTF道のチーム。

今回がほぼ始めての実戦ということで、操縦の腕はまあ察する所だろう。

トランスフォーマーは、以外にも有名どころが揃っているらしい。

聞いた話だとあのダイノボットのグリムロックに老兵チャー、加えてホットロディマスまで保有しているとか。

だが、そこまで恐れることはないだろう。

いくらトランスフォーマーの性能が良かろうと、最後に全てを決するのは操縦手とトランスフォーマーの呼吸だからだ。

相手もそれぐらいは解っているはずだ、なら一体何をすべきか。策を企てることだ。

この周辺の地理には疎いが、相手が逃げる先には何かしらの地理的優位があるはず。

でなければ、航空偵察相手に隠蔽無しで斥候など放つだろうか。

——まあ、何をしてこようと慌てるものでもないか。

そもそも今回は親善試合。

此方の力を見せつけ相手を蹂躪するのも悪くはないが、まあそれは美しくない。

胸を貸すぐらいの心持ちでいかせてもらおうとしよう。

そう思った時には手に持っていたカップを置き、ペコに指示を出していた。

「地上部隊は中央にウルトラマグナス、左右にサンストリーカーとストリークですね」

「航空部隊は……ダメですね。見当たりません」

ウルトラマグナス……優秀なサイバトロンの戦士だったトランスフォーマー。遠・中距離にはロケットミサイル二つに大型のライフルという火力重視の装備。近接は大型のボディを用いて相手を殴り倒す、遠近共に隙の無い戦い方をする。生粋のサイバトロンの戦士だったと言うだけあり、策を弄する柔軟性を持っているが、武人としての性質も持ち合わせていると話には聞いたことがある。

その横に付けているサンストリーカーは、いつぞやのTF道紹介PVでみたランボルの兄弟だ。

大型キャリアカーに変形するウルトラマグナスとは異なり、こちらはスピード重視のスーパーカウntax。

反対側のストリーク。こちらはフェアレディ280Z-Tに変形している。

「流石に名門です。かなり堅実な部隊じゃないですか?」

「うん。正面からのぶつかり合いだと、かなり苦戦すると思う」

一見してこの左右両者の能力は把握しづらいが、その本質はやはりロボットモードであり、かなり厄介な編成をしているのだ。

サンストリーカーは遠距離武器主体であるが、その特筆すべき点はなんとと言っても電子推進ブースターを装備している事で空中戦が可能であることだ。このお陰でかなりの移動能力があるし、なにより三次元機動を行える強みがある。

対してストリークは、飛行能力こそは有していないものの、狙撃手としての腕はかの超A級スナイパー『リジエ』に相当する腕前らしい。

これらの情報を総合すると、

前衛を頑強なウルトラマグナス、ミドルレンジには機動力のあるサンストリーカー、後衛にストリークという理にかなった綺麗な布陣を敷いているということだ。

河嶋さんの作戦通りにいけば、この強固な布陣も打ち崩すことができるかもしれないが一つ気がかりなのは先程から見あたらない相手の航空戦力であった。

「ここに着いた時には飛行音がしてたんですけどね……あ、こっちに

向かってきますよ」

「気付かれましたね。 予定通り集合地点に誘い込みましょう」

近くに止めていたホットロデイマスに乗り込み、合図をすると麻子さんがガコガコとギアを滑らせアクセルを踏み込む。

「舌噛むなよ」

「できる限り安全運転でお願いしますよ……?」

そういうと、左右を岸壁に囲まれた狭く荒れた道をギリギリ相手に追いつかれる程度の速度で進行する。

まあどのみちホットロデイマスでこの道を飛ばせば、荒れた地面にタイヤをとられ最悪車体が宙を舞い、フロントから地面か岸壁に突き刺さることになるだろう。

「どうやら奴さんも相当ノリがいいみたいだな。 上手くこつちについてきてくれてるぞ」

バックミラーを確認すると、聖グロリアーナの地上部隊がこちらに追走してきているのが見える。

そして次の瞬間、ウルトラマグナスのキャリアー部分に備え付けられたロケットランチャーが動き出したのが目に入った。

「攻撃来ますッ！ 麻子さん、車体を左右に振ってください！」

「わかった」

「かといってスピードを緩めるなよ！ 追いつかれたら袋叩きにあうからな！」

冷泉さんがハンドルを切ると同時に、ロケットランチャーが放たれた。

飛来した赤い弾頭は先程までいた地面に飛来し、激しい爆音と熱風を伴いながら弾け飛んだ。

車体には破片が降りかかり爆風に煽られるが麻子さんのハンドリングでなんとか車体を制御する。

思わず息を飲むが、相手の攻撃はまだ続く。

続いてストリークのルーフが開き、中からライフルがせり出してきた。

そのまま銃口が此方に向く。

銃口から光があふれ、反射的に麻子さんがハンドルを思い切り切る。

その数瞬後に、光線がホットロディマスの塗装を焼き地面に突き刺さる。

ロディマスも今の攻撃には肝を冷やしたらしく、口笛を吹く。

「ストリークの奴、なかなか腕上げたんじゃないか？」

「走行中じゃなかったら当てられてましたね……」

何発か続けて打ち込んでくるものの、流星におうとつのある地面での走行中、しかも腕で撃つ時ほどの繊細な動きがとれない状況では相手側の攻撃手も狙いをつけづらいのだろう。

そのまま相手の攻撃を上手く躲しつつ進んでいくと、予定ポイントが視界に入ったので沙織さんに通信をお願いする。

『えー、こちらAチーム間もなくポイントに到着します。準備してください!』

『P i P i P i P i P i P i—— 了解、なんとかおびき寄せてくれ。そうすればこつちのものだ』

河嶋さんの返事を頼りに、合流地点に突っ込む。

あとは迂回しつつ自陣に復帰し、攻撃に参加しようとチームに指示をだす。

だが、ここで予想外の事態が発生した。

何故だが私達に向けて光線の雨が降り注いできたのだ。

突然の裏切り行為に沙織さんが叫ぶ。

『ちよつとーっ?! 仲間を撃つてどうするのよお!』

『撃てえッ! 撃て撃てエッ!』

『おれグリムロック、うちまくるぞ!』

『大変だ! 河嶋副隊長が錯乱しているぞ?!』

『マイスター、早くあの馬鹿共を締め上げんか!』

『ほらグリムロック、あと副隊長。一旦落ち着こう、深呼吸するんだ』

『ヒューッヒューッ』

『河嶋さんって以外とアレな人なんですな……』

仲間内で混乱が発生しているうちに自陣に到着すると、いつの間にか敵が予定攻撃地点を通過しだしている事に気がつく。

「沙織さん！ 皆さんに攻撃指示を！」

『え、あつ。 皆、敵に攻撃してっ！』

指示を出されてようやく冷静になったのか、なんとかまとまった攻撃を始めた。

だが、世の中作戦の通り上手くいかないのが常である。

攻撃をしたは良かったのだが、攻撃が全く当たらないのである。

「おい、一斉にバラバラの敵を攻撃してどうする！ 一人一人確実に倒していかなきゃ！」

「無茶いなチャァ。 これでも皆大規模な攻撃は初めてなんだぞ！」

マイスターの言うように、ここで致命的な失敗が露呈した。

集団攻撃の基本は相手を威圧する飽和攻撃と、相手を確実に倒せる火力を集中させるかである。

私達のメンバーは速度、火力、防御のバランスが良く、様々な応用が利くという将来的利点がある。 それと引き替えに現状の決定的な火力担当は接近戦型のグリムロックぐらいしかいないのである。

故に、私達は相手に対しての手前味噌な飽和攻撃よりもなりふり構わず一体一体を確実に倒す各個撃破を狙うべきだったのである。 今となっては後の祭りであるが。

此方の集団攻撃の隙間を縫うようにかいくぐってきた相手チームは、あつという間に此方を半包围するように陣取る。

「総員、トランスフォーム！ アタック！」

「いくぞロディマス！」

「これでも食らえっ！」

ウルトラマグナス以下、地上部隊が変形し武器を此方に向けた。

正真正銘、ピンチである。

「敵の攻撃が来るぞ！ 全員頭を下げろ！」

ロディマスが一声をかけた瞬間、周囲が爆発に被われた。

ロディマスの身を起こして状況を伺おうとすると、真上をストリー

クが放ったレーザーが通過しすぎさま岩場に身を隠す。なんとかその場を凌ぐが、ここでまた一つ想定外の自体が発生した。

『うわあん！ もう無理！』

「お、おい！ 皆危ないッ！ 戻ってくるんだ！」

「もういやあー！」

なんと、Dチーム<sup>一年生</sup>が攻撃のプレッシャーに負けてしまったのか、マイスターを放棄してしまったのだ。

操縦手を失ったマイスターの動きが一気に悪くなり、バランスを保てず倒れ込んでしまう。

「悪いなマイスター、恨むんなら臆病なパイロットを恨むんだな！」

「くうっ……ここまでか……皆、すまない」

なすすべの無いマイスターに、サンストリーカーは容赦なく背部に背負ったミサイルと手に持った銃の光線を浴びせかける。

またもに防御姿勢もとれないままマイスターは殆どの攻撃を被弾し、そのままうつぶせに倒れ込む。

数瞬後、カシユつと軽い音をたてて倒れたマイスターの背中からフラッグがせり出した。

「このままじゃ全滅じゃぞー！」

「おいおい、しかもそれだけじゃ無いみたいだ」

ホイストが上を指さすと、崖の隙間を縫うようにして敵航空部隊が飛来しているのが確認できる。

その先頭にはパワーグライド。

次に起こることが予測し、とっさに指示を飛ばす。

「全員、敵飛行部隊の赤い攻撃機を牽制してください！」

両側からの攻撃を受けないように頭を下げながらパワーグライドに向かって集団攻撃をしかける。

数発被弾すると、不利とみたのか航空爆撃を中止し崖沿いのルートから離脱していく。

「沙織さん、各自状況を確認してください」

『え、あ……各チーム状況を報告して!』

『Bチームアタックが凄いですけど大丈夫です』

『Cチーム言うに及ばず!』

『……………』

『Dチームダメみたいだねえ。 Eチームは全然大丈夫だよ』

『まだ無事な奴は撃って撃って撃ちまくれえっ!』

取りあえずの所、現状の戦力としてはDチームのリタイア以外は問題ないようだ。

だが、この状況をどうしたものだろうか。

明らかにこのままここで応戦しては火力にゴリ押されて磨り潰されてしまうだろう。

かといって、ここでどう打開するべきか——

思考がまとまらない。

焦りと切迫した状況が答え導きだそうとするのを邪魔する。

どうすれば——

「みほ! 迷うことないぞ! どんな無茶だってオレ達ならやってやるさ!」

「—— ロデイマス……」

ホットロデイマスの一言が契機だった。

『西住さん。 指示をお願いします』

『私達、みほの言うとおりにする!』

「どこへだって行ってやる」

『西住殿、命令してください!』

—— 覚悟は決まった。

ここまでされて、奮い立たないわけがない。

破れかぶれでも無茶でもやるしかない。

やれるだけの事をやらせてもらう。

きつと、皆なら答えてくれる。

「……BチームとCチームはこのままここから移動開始します!」

『了解! いくよ皆、ホイストもねッ!』

『心得たッ! チャー、気張ってくれよ!』

『待てえっ！ 一体何を』

『おれグリムロック。オレ、モモよりもミホのいうことシタガウ！』  
「Eチームは私達が通過したあとにグリムロックで思い切り右側の岸壁を殴りつけてくださいー！」

『いいよ。ほら準備するよ』

次が決まればあとは早いものだ。

ロボットモードからオルトモードへ変形し、一気に戦線を離脱する。

勿論こんなことをされれば相手も思わず追いかけてやろうとするわけ、

「全員、トランスフォームして追いかけて……」

「グリムロックトランスフォーム！ おれ、壁破壊する！」

ビーストモードに変形したグリムロックが、思い切り岸壁に体当たりをする。

すると、岸壁が何かが砕ける音と割れるような音を発し始めた。

すぐさまグリムロックが二本足でドタドタと岸壁から離れ、次の瞬間には岸壁が崩落を始めた。

「な、とんでもないことをするな！」

「岩が降ってくる！」

「下敷きにされるぞ！」

先陣を切っていたウルトラマグナスはなんとか落石に飲み込まれずにすんだが、後続にいたサンストリーカーとストリークが岩雪崩に飲み込まれた。

リタイア判定まではいかなかったようだが、なんとかこれで時間稼ぎにはなるだろう。

「このまま市街地に行って障害物と地元の有利を利用します」

「みほ、ところで作戦の名前とかはあるのか？」

ロデイマスに尋ねられ、少し考える。

町中に隠れてのゲリラ戦—— いや、なんだか物々しい。

もっと可愛らしい方がいいだろう。

ふと、さつき河嶋さんの作戦はコソコソ作戦だったことを思い出



す。

ならばこれしか無いと思い、胸を張って作戦名を告げる。

『もつとコソコソ作戦』です!」

「……もつとどうにかならないのか?」

—— もつとネーミングの勉強をしたほうがいいのだろうか。

なんだかちよつと悲しくなった。

## 第八話 空の戦士

「……できるかしら？」

『無茶言うな。オレ一応か弱い航空機で通つてんだぜ？ まあ一応出来ないことも無いと思うが……あと、大洗の連中だが、あのまま道なりに進んでいった』

「報告ありがとう。あと、やりたいようにやってみなさい。貴方と貴方のパートナー達ならできるわ」

『信頼痛み入るよ、じゃあ指示通りに』

エアレイドの通信が切断され、一先ず憂いはなくなる。

—— 目の前の岩石の山を除いてではあるが。

「う、動けない……」

「早くこの岩をどけてくれないか……エネルギーが口から出てきそうだ」

「あんまりガタガタ騒ぐな。大丈夫今どけてやる」

無残な光景に思わずため息をつきたくなるが、らしくないと思いがくつとこらえる。

ウルトラマグナスが岩石を退けている間に、今後どうするか考えることにしよう。

すると、察したのかペコがさつと地図を広げ、現在地に印を付ける。ペコに礼を言いながら地図を確認し、エアレイドの情報と統合して現在地から道なりに進んだとする。その先には大洗町の居住区が広がっていた。

「厄介な所に籠もられましたね」

ペコが苦い顔をして呟く。

彼女が言うように、確かに難儀な所に入られたものである。

まず、彼女達大洗女子のテリトリーに完全に入り込まれたのはかなりの痛手だ。

地元の地理を熟知しているという利点を惜しみなく使ってくる事だろうし、なにより最後のグリムロックを用いた大胆な作戦。

あの無謀とも言える手段に、私は少し興味を持った。

前半の手堅くも使い古された囮戦術とは違い、まるで発案者が変わったかのような方向性。

一歩間違えればグリムロックだけが取り残され貴重な戦力を失うだけという可能性もあっただろうに。

—— 久しぶりに面白い相手になるかもしれない。

「何を笑ってらっしやるんですか？」

「……訂正するわ。今日の紅茶は意外なアクセントが効いてたのね」

「はあ……」

相変らず察しの悪いペコはさておき、ここからは少し静観という。

高揚した気分のままこの熱をぶつけてしまうのも悪くは無いが、これでもまたよろしくない。

戦いの熱は気分を良くさせるが、引き替えに機を見逃してしまう危険性も孕んでいるからだ。

今はウルトラマグナスが地上部隊を回収して再び相まみえる事になったときまでに、彼女達が聖グロリアーナの航空部隊相手にどう相手取るのか、紅茶を飲みながらじつくりと見極めさせていただくしよう。

不思議と、頬が緩むのを押さえられなかった。

『取りあえずルクリリ達と協同して絨毯爆撃でもしましょうか？』

「……野蛮だなあ。もつと楽しめよお！ この景色とかをさ！」

『非効率的ですね。第一今は競技中、何を景色なんて楽しんでるんですか』

「そりゃあ、あれだよ。こう、口では言えないもんさ！」

『理解できません』

攻撃手アツサムのありがたあい提言をなんとか却下し、一先ず安堵した。

彼女には色々足りていない気がする。余裕や感性を養う努力とか

が。

先程アツサムに言ったように、俺は高高度から大洗の町を一望しながら得も言われぬ充実感を感じていた。

昔から高いところから町並とかを観察する事が好きで、暇があれば許可を得て飛行制限ギリギリまで高く飛び、空から色々な所を見てきた。

何気ない町も、貴重な観光資源がある場所も、俺にとっては新鮮に思えたからだ。

空から見ると、ほんの小さな点にしか見えないモノ一つ一つに生活があると思うと、途方もなく充実した気分になれる。

ダーズリンやペコ、ルクリリあたりは理解してくれるのだが、どうにもアツサムやあの暴走娘—— なんといったか……まあ気にする程でも無いか。

とにかくあの辺りの感動や情緒といったモノから程遠い奴らはどうにもわかり合える気がしない。

暴走娘はとにかく飛ばしてやれば喜ぶが。

そんな事を思っていると、ダメーヂチェックから復帰したパワーグライドがようやく追いついてきた。

かなりの速度で一気に近づいてきたかと思うと、一気に機首を上げて急減速すると、ゆっくりと機首をさげて速度を俺と同期させた。

相変らず推進力を二台の大型ターボファンエンジンに頼っている割に、よくもまあ器用に飛ぶものだ。

「おーいエアレイド！ そっちはどうするんだい？」

「アツサム嬢は空からの爆撃がお好みらしい。俺はあんまり乗り気じゃないんだが」

「いやあそれはよくない！ そんなんじやこのパワーグライド様とパイロット皆の凄さを観客にみせられないからね！」

「よし、じゃあダーズリンの指示通りに各個撃破で行くか。 しくじるなよ？」

「まあかせなさいって！ 行くよ皆！」

そういうと、パワーグライドは一気に機首を下げ大洗の町へと向

かっついていった。

アツサムが不満げにため息を漏らす。まあ今回は俺の提案で行かせてもらおう。

—— 始めてペコを乗せた時、どうして感性が合わないのに、俺の攻撃手の席はアツサムしか乗せていないのかと聞かれた事がある。確かにその通りで、彼女の効率重視の考えは好きではないし、おそらくあっちも俺の趣味を理解するのは難しいだろう。

だが、ただハッキリと言えることがある。

それは彼女は戦いのパートナーとしての相性ならバツチりだと、お互いに確信していることだ。

大洗町はTF道の会場となったため、近隣住民の退去を行ったので町の中は今とは異様なほど静かだ。

猫の声すら聞こえない静けさの中、小道の一角に一台のトランスフォーマーが忍んでいた。

住宅の植え込みと高さのある建物の影に隠れ、そのトランスフォーマー……チャーは上空を警戒していた。

そんなチャーの副操縦席の内部では、歴女チーム総出での作戦会議が催されていた。

「んー……チャーのパワーはそれほど高くない。でも火力でゴリ押せないと逃げ回る内にこっちがやられるぜよ」

「だが私達の操縦技術では歯が立たないのは、先刻の撃ち合いでもわかった……どうしたものか」

「大洗は我々の庭のようなものだ。必ず勝ちの目はある」

「エルヴェインの言うとおりだな。チャーの武装はマスケットガンと塩酸弾。これでなにかできないものか……」

手詰まり感に思わず歯噛みする。

こんなことならクレー射撃でも習っておくべきだったか。

私—— 左衛門座 杉山清美は、このBチームの攻撃手を担っている。

理由は、私が弓道をやっているという理由と自分からの立候補で

あった。的を狙うという事のコツや撃つものであるから多分きつと  
なんとかなるんじゃないかということからの攻撃手であったが、これ  
が想像以上に、まあ当然のことながら大苦戦。

弓道も狙って射るものだが、ここまで激しく動きながら射ることは  
まずないし、流鏑馬などといったものもしたことはない。

結局の所、練習と参考にするノウハウが決定的に足りていなかった  
のだ。

好きな戦国時代の戦術なども単機では殆ど役に立つことが無い用  
兵の術ばかり。

まあ、門外漢といわれてしまえばそれまでなのだが、こうも力にな  
れていないとどうにも申し訳なきでいっばいになる。

「んん？ あれは……」

チャーが視点を上に向けると、付けていたバイザー内の視点もそれ  
に追随して表示される。

視線の先は太陽が眩しく照っており、光度の関係から白飛びしてし  
まっている。

次の瞬間、チャーが叫ぶ。

「おりよう、小道に逃げ込むんじゃ！」

「応！」

おりようがロボット操縦用の操縦桿の片方を思い切り引き倒し、足  
下のペダルを踏み込む。

連動してチャーがより狭い小道に入り込むと、先程までいた地点に  
レーザーが着弾し、アスファルトを砕き、溶かす。

再び空を見上げると、太陽の光の中に黒点が紛れているのが確認で  
きた。

黒い点は次第に大きくなっており、急接近していることを理解す  
る。

「あれは……赤いトランスフォーマー！ エルヴィン、誰だ!？」

「赤い攻撃機……パワーグライドだ！」

赤い攻撃機パワーグライドは地面に対して殆ど垂直に近い形で急  
降下してきており、そのまま此方に突っ込んでくる勢いだ。

「いくぞチャー！ パワーグライド様のお通りだ！」

そのまま相手はレーザーを連射しながら機首を此方に向け始め、エルヴィンがとつさに指示を出す。

「おりよう！ 横にと飛べ！」

おりようが咄嗟にレバーを倒すとチャーの体が横に飛びすきり、操縦席に凄まじい遠心力がかかる。

カエサルがチャーのコンディションを表示するパネルを見ながら声を上げる

「あまり無茶させるな、チャーといえども関節がイカれたらどうしようもない！」

「注文が多いぜよー！」

チャーの横をレーザーが掃射し、機首を上げたパワーグライドはそのまま此方に背を向け飛びすきっていつて、あつという間に見えなくなる。

エルヴィンがホツと息をつき、指示を出す。

「今のうちに何処かへ隠れるぞ、飛ぶ相手に構っていられな……」

「いんや、パワーグライドの早さはそんなことさせてくれんよ。ホレ見ろ」

チャーの視線の先には、既に此方に機首を向けるパワーグライドがいた。

一息つけるかと思ったのも束の間、想像以上の早さで此方に向かってくる。

「オレっちの早さに酔いしれなつ！」

パワーグライドのレーザーが降り注ぎ、数発被弾する。

チャーが呻き声を上げるが、彼の耐久性ならまだまだ耐えることができるだろう。

だがこのままだとリタイアするのも時間の問題だった。

「このままやられるか！」

バイザー内のロックオンサイトを相手の機影に合わせ、トリガーを数回引き絞る。

チャーのマスケットガンから光線が相手に放たれ、光線は相対速度

も合わせり凄まじい速度でパワーグライドに襲い掛かった。

だが、すんでのところまで相手は機体を捻らせた。そのまま光線を避けクルリと一回転し同高度に復帰する。

「そんな攻撃じゃあこのパワーグライド様を落とすなんて100年はやいよ！」

余裕の言葉を投げかけながらチャアの真上を通過し、相手は再び此方の射程距離外へと飛び去っていく。

今のうちと、おりようがチャアの身を背の高い建物の影に逃がしたが、思わずエルヴィンは歯噛みする。

「くっ……このまま颯られてたまるか！」

「かと言ってどうする。相手の方が技術も速度も上、しかも空を飛ぶ」

カエサルが冷静に状況を判断する。

確かにその通りであった。

少なくとも経験はあちらの方が多く、なおかつこちらは経験が足りていない。

更に私の技術では空を飛ぶ素早い相手の体に攻撃を当てるだけの技量はない。

あまりにも一方的な構図である。

「でも、このままやられたままは悔しいぜよ……」

おりようが操縦桿を握りしめて呟いた。

その言葉に私は思わず、おりようから顔を背ける。

実際に戦っているチャアを除けば、この中で一番負担がかかっているのは操縦手のおりようである。逐一素早い相手の行動に合わせねばならないし、加えて一方的な状況は彼女への凄まじい心的負担となっっているのは想像に難くない。

私が攻撃を当てることができさえすればこの閉塞感から脱却できるかもしれないが、その自信も力もないのは明らかだった。当たったとしても、それは数撃てば当たるの偶然から生み出されたものであり、しかもその一発を当てるのにどれほどの攻撃を相手から受けるだろうか。



情けなさに思わず唇を噛む。

「隠れたってすぐに見つけ出してやるからなく！」

再び飛来してきたパワーグライドだが、こちらが身を隠したことが幸いして捕捉しそこねたようだ。

だがエルヴィンは焦った様子で地図を睨み付けた。

「だが、この手は二度もつかえないぞ。最初の奇襲の時のように高度から探されたら丸見えだ」

「八方塞がりか……」

思わず弱音が口を突いて出る。

それを聞いていたのか、チャーが怒鳴りつける。

「何を諦めとるんじや、ワシは諦めとらんぞ！」

「チャー、今の私にやれと言われてできるような実力はない」

「馬鹿いつとる暇があつたら撃たんか！ パワーグライドは早さこそ凄まじいがそこまで頑丈なトランスフォーマーじゃないんじやぞ！」

チャーの一言を聞いて、カエサルが唇に指を当てて何か考え始める。

そして、一つの提案を投げかけた。

「……無茶だ。チャーにどれだけ被害が」

「いいや、それで行くでしょう」

「チャー！ 私は仲間を痛めつける趣味はないぞ！」

エルヴィンが却下しかけるが、チャーがそれを遮って賛成の意を示した。

当然ながら私もエルヴィン同様に納得できず反対する。

だがチャーは既に乗気であり、マセットガンをゆっくりと構え始めていた。

「ワシを信じんか。ふざけてグリムロックに噛まれたときの方が余程痛いだろうよ。それともなにか、お前達は相手に舐められたままでもいいとでも言うのか？ TF道であってもそんなワシはご免じやよ。ここでハッキリ言っておくがの、この程度でうろたえるような奴をパートナーにするのはこつちから願ひ下げじや」

「……石頭の爺めツ！ 腹を決めたぞツ！」

エルヴィンが帽子の鰐をつまみ、深く被り直す。

おりようは無言で操縦桿を握りしめて集中し始め、カエサルは目をパネルに釘付けにした。

私は攻撃手用のデバイスを握り、チャーへ声をかける。

「……その気概、確かに買ったぞ」

「おう。お前さんも気張るんじゃないぞ」

少しすると、高度から索敵をしていたパワーグライドがやってきた。

相手も此方を発見したようで、一気に高度を下げ始めた。

そして、予定通りにおりようがチャーを操縦する。

「—— おいおいチャー！ 自滅する気かい?!」

チャーは大通りに仁王立ちのように立ちはだかる。態々相手の目の前に身を曝け出したのだ。

パワーグライドは動揺はしつつも、高度を住宅の屋根の上ギリギリを維持したまま此方に迫ってくる。

「そつちがその気なら、こつちは容赦しないよ！」

「やれるもんならやってみるんじゃない！」

パワーグライドが熱線を連射し、そのまま真っ直ぐチャーに襲い掛かる。

だが、チャーは避けることをしなかった。

正面から受け続けているのだ。

「このままりタイアしてもらおうよ！」

「……まだまだッ！ もつと撃つてこんかい！」

「チャーの胴体ダメージ蓄積値、4割を超えたぞ！」

カエサルの焦りを含んだ報告が操縦席の緊張感をより一層高めさせた。

あちらの攻撃は止まらない。

「ルクリリ！ このまま押し通してくれ！」

「まだじゃ……まだ……」

チャーは銃を構えたまま微動だにしない。

攻撃用のバイザーの視点から伝わるあまりの圧力に、思わず引き金

を引いてしまいたくなる。

だが、それはしてはいけないことだった。

おりようが、チャーが一番それをしたいのだ。

一番抵抗したいであろう二人が堪え忍んだ後の逆転のチャンスを、私が託されているのだ。

「ダメだッ！ 機首を上げちゃいけな——」

「——今ッ！」

パワーグライドが機首を上げた瞬間。

そこが決定的なチャンスだった。

機首を上げるためにフロップが上げられたパワーグライドの速度は、微々たるものだが減速する。

そして、機首を上げたために、機体下部の部分が此方に一瞬だが曝け出された。

正面からだと面積の小さいのだが、この瞬間と真上を通過するときだけこの的は最大限大きくなる。

あとは、ここを狙うだけ。

否、狙うのではない。

絶対に当てるのだ。

バイザーのサイトが、チャーが体を張って稼いでくれた距離と、圧力に屈した相手が無防備にも曝け出したことによつて最大限に大きな的となった両翼を捉えた。

トリガーを、二回だけ引いた。

正確には、それだけしかチャンスがなかった。

それ程の短時間の間しかなかったが、マスケットガンから放たれた塩酸弾がパワーグライドの両翼を穿った。

「バ、バランスがッ?! 翼が溶けて……」

「翼がなけりやお前さんは只の脆いトランスフォーマーじゃよ、パワーグライド」

「うわあああああッ!!」

溶けたことによつて脆くなった両翼は、風圧と揚力によつて一気にもぎ取られ、バランスをとる両翼を一気に失ったパワーグライドは勢

いを殺せず真上をすっ飛んでいく。

そのまま住宅地を数件派手に破壊しながら突っ込む。崩れた住宅から凄まじい砂埃が巻き上がった。

そのまま油断せず、銃を砂埃に向けたままにする。次第に舞い上がっていた埃が晴れていく。

ようやく視線が通ったときに見えたものは、無残にも両翼を失い、勢いよく建築物に突っ込んだことでリタイヤ判定の端をつき出したパワーグライドの姿だった。

「—— いっしょしッ！」

「や、やった……やったのか？」

緊張感から解放されたのか、ガッツポーズを取るエルヴィン。

カエサルは実感を感じないのか呆けている。

おりようは、操縦桿を握ったまま頬に冷や汗を流しながら震えていた。

「……………死ぬかとおもったぜよ」

「私もだ……」

頬に笑みを浮かべるながら言うおりようの言葉に同意し、攻撃用のデバイスをぎゅうと握る。

恐怖とか突っ込んでくる相手の圧力からの怯えとか、そういうものは完全に霧散してしまっていた。

ただただ、嬉しかった。

皆とチャード、協力して勝ったことが。

嬉しかった。

「勝って兜のなんとやらってねッ！」

「—— なっ」

突然、大きな衝撃と共に、バイザーの視界に何かが下から飛び出してきた。

おりようも同じ物を見たようで、驚いた声を上げる。

「何……？ 胴体へのダメージ九割突破……リタイヤ？」

「カエサル、何を言ってるんだ？ 一体何が——」

いきなり起こった出来事に、エルヴィンもカエサルも動揺する。

画面に現れた物を良く見てみる。

橙色をした長く細長い何か。

それは、剣だった。

自然と、何が起こったのか理解した。

「剣だ……チャアが……後ろから刺されたんだ」

「そんな……こんな、なんで……」

おりようが途切れ途切れに眩く。

ズルリと剣が抜かれたのか、剣が視界から消える。

すると、ダメージが一定以上を超えたチャアに行動制限がかかり、

一気にチャアが崩れ落ちた。

外部の近距離用集音マイクから拾った音を流すスピーカーから、聞き覚えの無い声が聞こえてきた。

「体張ってパワーグライドを墮としたのはお見事だったが、ちょっと油断しすぎたな」

チャアが視線を相手に向ける。

黒を基調とし所々に橙色の塗装を施した、細身のトランスフォーマー。

その右手には大きな剣が握られており、紫色と茶色の液体がべったり付着していた。

「パワーグライドの奴は囷だった。お前らが上ばっか気にしてる間に地上を走って近づいて、油断した所を後ろからグサツと、な」

まさかパワーグライドの奴を落とすとは予想外だったけどと、相手は呟いたが私達の誰もそれを碌に聞いていなかった。

「ま、及第点ギリギリってところかな。もつと訓練してから出直して来な」

そう言うと、黒のトランスフォーマーはエイリアンジェットに変形して飛び去っていった。

残された私達の間には、重苦しい静寂が満ちる。

チャアは、スリープモードに入ったのか、何も答えてくれない。

「……チクシヨウ」

少しして、おりようが眩いた。

その一言だけで、私達の思いを全て代弁していた。

エルヴィンも、カエサルも何も言わない。

ただ、俯いたままだった。

「……絶対、見返す」

口から呻くような細さで、私の率直な思いを告げる。

今までなんとなくだった。

カエサルやエルヴィンに誘われるままに、TF道を選択した。

だが、たった今変わった。

こんな短い間だったが、チャーや皆と確かに一緒になって戦っていたのだ。

それはとても、充実していた。

このメンバーで、皆で勝ちたい。そう思った。

そして、確かに勝ったのだ。

ほんの一瞬だが、相手を倒して、勝利した。

だが、私達は手のひらで踊らされていて、挙げ句相手に『及第点ギリギリ』と評されたのだ。

——悔しすぎるじゃないか。

目に涙が溜まり、零さないように上を向いてぐつと奥歯を噛みしめる。

「今度は絶対勝つッ！」

私の言葉に、親友達は黙って頷いてくれた。

## 第九話 繋がる意地

「確かに閉所に誘い込んでからの奇襲は基本戦術だけど……まあ相性が悪かったな」

「……やっぱりこっちは向いてないのかなあ」

「そんなことアないさ。ラチエツトだって戦線勤務みたいなもんだったし」

「あはは……でも、やっぱり悔しいなあ」

「んじや、終わりまで眠ってな」

上空から主砲を構え、熱線を浴びせかける。

閉所に籠もっていたホイストは、碌に避けることも出来ずにまともに食らう。

この武器は一発一発の火力は高くは無いが、高い連射性能はその欠点を補うには十分であった。

みるみるうちに装甲は溶け出し、ホイストが苦しげな声を上げて膝を突く。

一矢報いようとミサイルを打ち出すものの、集中された弾幕はあつけなくそれを打ち落とすした。

それを最後にホイストは沈黙し、肩からフラッグを飛び出させた。

「なんか弱い物イジメみたいでいやだなア……」

『ほぼ新人も同然の相手です。 氣に病むこともないでしょう』

「……俺はお前の将来が不安でしようがないよ」

『失礼ですね。 客観的に考えているだけです』

真面目な返答に思わずため息をつく。

この非情とも言えるほどの冷静さ、なんだかプロールの奴を思い出す。

アイツもなかなかシビアな性格をしていたが、彼女は彼がそのまま人間の女性になったような感じだ。

情報や効率一番で考える所など正に彼そっくりではないか。

『……今、何か疚しいことを考えませんでしたか？』

「いやいや、そんな滅相もない……ほら、残りは二機だろ？ さっさと

行こうぜ！」

『そうですね。では変形して空から攻撃しましょう』

「おう。トランスフォーム！」

エイリアンジェットに変形し、ギリギリ地上が主砲の射程圏に入る程度に浮遊する。

フワフワと周囲を警戒しながら浮かんでいると、痺れを切らしたのか地上からレーザーが飛んできた。

クルリと機体横に付けられたブースターを勢いよく噴かし、横に回転するようなマニューバで回避する。

だが光線は浮遊していた位置とは全く違う位置へ飛んでいき、空の彼方へ飛んでいった。

操縦席で索敵手が視点を絞り、発射位置へと拡大すると、

『……どうやらグリムロックのようです』

「うわあ……近づきたくない」

ロボットモードの怪物がいた。

「オレグリムロック、敵ハカイする！」

銃を構え何発か撃ってくるが、全てあらぬ方向へと飛んでいく。

相変らず銃の腕前はお粗末らしい。

いや、そうではなく、

『相当中身がお粗末のようですね。一気に倒してしましましょう』

「気をつけろよ、あんな凶体でも空を飛ぶからな」

『……データに加えておきます。モノは見かけによりませんね』

エイリアンジェットのまま、主砲の光線をお見舞いする。

視界一面が放たれた光線の光で白飛びするが、これが悲しいほど当たらない。

「エアレイド、相変らず射撃へたくそー！」

グリムロックが笑いながら此方に打ち返してくる。

だがこれも当たらない。

まるで子どものお遊戯会のような光景だ。

『本当に貴方の射撃の腕には感動します』

「うるさいっ！ 当たればいいんだよ当たれば！」



『誤差修正します。　ちゃんとしてくださいよ』

数秒後、腕がわずかに動き彼方此方に散っていた弾丸が次第に収束していく。

そして、殆ど当たらなかった弾丸の雨が面白いようにグリムロックに着弾し始めた。

本当にアッサムの馬鹿馬鹿しい程の情報至上主義は俺とすこぶる相性がいいらしい。

彼女の方も、一発を確実に当てるよりかは弾をばらまいて相手の行動を縛る戦い方が好みのもので、聖グロでTF道を始めて以来殆ど俺の攻撃手を担当している程だ。

基本的に、撃てば当たるような泥仕合を聖グロの生徒は好まない。弾をばらまくような戦い方は校風にそぐわないんだそうだ。

そんな校風、形があれば即刻穴だらけにするかブレイドで切り刻みたいところであるが、悲しい事にそんなものはない。

訓練の内容も、一発一発の攻撃を確実に当てるような訓練を行う。だが単発式でない俺の武器は明らかに他とは異なっていたのだ。

パワーグライドの奴も連射式だが、アイツは射撃スキルは俺と違い半端ない優等生だ。

まあ結局の話、俺は聖グロでもかなり浮いていた。

そんな中で、俺の戦い方を理解したのがアッサムやダーズリンだ。アッサムの情報主義は、俺の弾が勝手に避ける銃を素直にしてくれ、たし、ダーズリンは校風を反故にして、あまり登用されていなかった俺に出番を与えてくれた。

別に浮いていたのはどうでも良かったが、期待されて結果を出せないようじゃ俺のスパークは完全に腐りきってしまったことになる。

だから、俺は負けない戦い方をする。

それが期待に応えることでもあるし、なによりアッサムが一番活躍する戦い方であるからだ。

「やっぱり堅いな……全然倒れる気がしないぞ」

『動かないで、むしろ弾が当たりそうです』

数十秒、大容量の弾倉が一つ空になるまで攻撃を撃ち続けたが、相手は全く応えた様子がない。

火力だけには自信があったので、少しめげてしまいそうだ。

『——いや、避けてッ！ 一気に上昇！』

「ッ?!」

浮遊のために下に向けていたスラスターを一気に噴かし、上昇する。

すると真下をレーザーが飛来し、続けて此方に向かってきた。

「ロデイマスか?! 避けられないッ」

『……一回離脱しましょう。 弾倉交換もありますし、体勢を立て直します』

「了解！」

浮遊状態で遊ばせていたスラスターを一気に点火させ、前方に急加速する。

危機一髪と言ったところで、後方を何発もの弾丸が遅れて通過した。

だが、安心したのも束の間、視界が一気に暗くなった。

巨大な何かが目の前に突然現れたのだ。

そして、それは此方に飛んできており、なおかつ此方の進行方向にあるのだ。

「……なんだこりゃッ?! 避けきれねえ！」

『トランスフォームして、衝撃を和らげなさい！』

操縦手が咄嗟にトランスフォームを起動させ、トランスフォームコグを酷使させる。

ロボットモードになったことで、一気に表面積が増え速度はガクンと落ちたが、目の前に飛来した物体を避けることは叶わず正面から衝突する。

ぶつかる瞬間、受け身の要領で全身で受け止めるように体を操作されるが、何分あちらの質量が膨大でとてつもない衝撃が全身を駆け巡った。

全身の装甲がミシリと音を立て、間接がいけない方向へ曲がりかけ

る。

だが、ほんの少しだけ衝撃は殺せたようで、ギリギリ脱陸判定はされなかったようだ。

すぐさまエイリアンジェットに変形し、自由落下を始めた物体から離脱する。

去り際に何が飛んできたのかと確認すると、それは地面ごと空を飛ぶ（正確には落下するだが）一般住宅だった。

「マジかよ?! 馬ツ鹿じゃねエのツ?!」

『グリムロック……ここまでの膂力とは……理解できない……』

下を見ると、地面が1カ所まるまるえぐれており、そこに土まみれのグリムロックが立っていた。

とどのつまり、小さな銃の攻撃が当たらないなら大きな岩を投げればいいといわんばかりに近くの住宅を投げつけてきたのだ。

ブレインモジュールがパワートレインに直結しているとしたか思えない行動に思わず面食らうのも無理はないだろう。

だが、状況はそれを許してくれるほど甘くは無かった。

『ダメージ限界! スラスターが爆発します!』

「はいはい、いま外しますよ!」

ロケットモードに変形しながら、火を吹き始めた飛行用ブースターを切り離す。

数瞬後、スラスターは小さな爆発と共に粉々に弾け飛んだ。

飛行不能になり、そのまま自由落下を始めるが、聖グロの整備班が付いていた緊急用の小型パラシュートが開き地面に激突する危機は免れる。

だが、じつとしてもいられない。

安全ギリギリの高さですぐさまパラシュートを外し、受け身を取りながら着地する。

真上には、身を隠したままのロデイマスが放ったと思われる光線が過ぎ去っていた。

「さて……どうしたもんかね」

顔を上げた目の前には、家々を破壊しながら真っ直ぐ此方に向かっ

てくる鋼鉄の恐竜がいた。

「オレグリムロック、戦いダイスキ！」

ビーストモードのグリムロックが建物をなぎ倒しながら突っ込んでくるのをすんでのところで横飛びして回避する。

通り抜けざまに危うく尻尾にはじき飛ばされかけるが、無様に身を勢いに任せて転がせ避ける。

すぐさま懐から小型の剣と大型の剣それぞれを片手に携える。

「こいよグリムロック。相手してやる」

『耐久ギリギリです。無茶はしないで』

アツサムからの連絡から、あまり長い間相手はできないと判断する。

だが空も飛べず、ロデイマスが何処に潜んでいるかも解らない現状で、逃げるという選択肢はない。

グリムロックが各部のフレームを軋ませ、まるで咆吼のように盛大な音を掻き鳴らす。

そのまま巨大な尻尾を振り上げ、勢いのまま薙ぎはらう。

咄嗟に後ろへ飛びすさり回避すると、尻尾はそのまま周囲の建物を派手に破壊した。

「おいおい、怪獣映画じゃないんだぞー！」

「こわすのダイスキ！」

尻尾を振った反動でガラ空きになった横腹を切りつける。

かなり力を入れて振ったのだが、いくらか傷がついただけで致命傷にはならない。

だが幸いブレードのレーザー部分は仕事をしているようで、ダメージはしっかり通りグリムロックが叫び声を上げる。

怒りに満ちた様子でガチガチと歯を鳴らし、此方を睨み付けてくる。

「Grrrrrrrr……」

『—— 相手頭部から高温の輻射熱を確認！』

「避けられるか……ッ?!」

炎に卷かれる前に、咄嗟に先程グリムロックが破壊した建物の影に

飛び込む。

次の瞬間、相手は大口を開け、灼熱の火炎を勢いよく吐き出す。レーザーファイアーの高熱は瞬く間にコンクリートを溶かし、外炎から放たれた熱波が無残になぎ倒された植え込みを一瞬で焼き、灰にする。

「あつつあつつツ！」

『外装が溶け出しています。これ以上は……』

「いや、まだ一矢報いるのに遅くはなアチツツ?! 早くしないとリタイア前に関節が溶接されちまうよ！」

『……解りました。無茶はしないで』

「オタクらの腕は信用してるからなあツ！」

数の有利があるとは言え、グリムロックをほぼ完全な状態でダーズリン達に押しつけるのはマズイ。

一応、信頼されて送り出されたのだ。

敗北の一因はなんとしても摘んでおく。

「見せてやるよ！ オレの最終」

「ところはそうはいかないんだな、エアレイド！」

突如、横から呼びかけられ思わず視線を向けてしまった。

そこには、此方に備え付けられた六本のエグゾーストパイプと両手に二つの銃を構えた……

「ロデイマス……！」

敵の一人がいた。

「次に目を覚ましたときにおたくら負けてるだろうさ！」

飛来する光線を咄嗟に数個切り捨てる。

だが、ここで遂に恐れていた自体が起こった。

グリムロックの炎によって関節が焼き付いたのだ。

アッサムや操縦手がなんとか動かそうとするが、もはや無駄な努力だった。

「悪いな皆、ここまでだ……」

『全体5に対してスコア2。十分です』

防御することも出来ず、ロデイマスの攻撃をまともに浴びせられ

る。

激痛が走ったと思ったそのときには、俺の意識は飛んでいた。

「エアレイド、リタイア確認しました。 Eチームの皆さんお疲れ様です」

『ほ、炎なら狙わなくても平気だからなっ!』

先程までのエアレイドとの戦いの余韻が残っているのか河嶋さんが威勢良くいうが、思わず乾いた笑いしかでなかった。

隣で機体と武器の状況を確認していた沙織さんがプツと噴き出す。

「全然銃はあたってなかったじゃん!」

『うるさいッ! 銃は数撃てば当たる!』

「オレグリムロック、モモはいくら撃ってもあたらなさそう」

三人のじゃれ合いを聞いて他の皆も張り詰めていた雰囲気は解れ始めた。

実際、ここまでの展開はかなり一方的なものだった。

地の利を得ようとすれば利を生かさせんと言わんばかりに航空部隊からの圧力をうけるし、数も確実に減らされている。

チャーターがなんとかパワーグライドを墮としてくれたのは、本当に助かった。

あのままパワーグライドまで残存していれば、エアレイドとの協力され勝ちの目は無かっただろう。

グリムロックは確かに戦況を一変させ得る程の優秀な戦士ではあるが、そこまでの実力をださせるにも下準備をする必要がある。

そして、皆が稼いでくれた時間や状況は、今その盤面をひっくり返すに十分な要素を与えてくれていた。

「そろそろ敵の地上部隊がやってくるはずですよ。 Eチームは予定ポイントで待機してきてください」

『りようか〜い。 んじゃレッツゴー!』

『会長、まだ話しの途中……』

ロボットモードになったグリムロックは警戒しながら予定地点へ

と向かっていく。

さて、ここからが本番だ。

やれることはやれるだけやった。

後は、なるようになるだけだ。

静かに息を吸い、ふうと呼吸を整える。

準備が済めば、あとはやるだけ。

麻子さんに向かって指示を飛ばす。

「相手を釣り出します。麻子さん、ロディマス。お願いします」

「分かった」

「任せろ、足の早さなら負けないさ！ トランスフォーム！」

返事の後、ホットロディマスがオルトモードとなり一気に加速、先程の戦闘で荒れた住宅地から少し離れた大通りへと向かう。

その道は、例の岩場から町中へと続く一番近く大きな道である。

相手は恐らく戦力を分散せず、スタックを組んでくると踏んでいるからだ。

なぜなら、此方にはまだグリムロックがいる。

聖グロリアーナの戦術は極めて堅実なことでは有名で、実際にチャールは陽動によって一対一をしていると見せかけられて二対一という不利に晒された。

先程のエアレイドの単独行動はパワーグライドを墮とされたことが予想外だったのか、それとも相当自信があったのか、兎も角あれは例外だろう。

それを除けば個別に行動させるといったことはまずしないだろうし、やるとしても今残った戦力ではそれをさせるにはとんでもなくリスキーだ。

相手側で無事なのはウルトラマグナスだけで、他二体は岩雪崩のダメージが残っていていつリタイアしてもおかしくない。

こつちには、ほぼ無傷なホットロディマスにグリムロック。どちらも強力なトランスフォーマー。

この状況で戦力分散を選び取るのは非常に度胸がある。

続いて狭い道では三体のトランスフォーマーは自由に動けないの

は目に見えるし、なによりウルトラマグナスはなかなか大柄だ。各自が好きに動けないような状況ではせっつかく分散させなかつた戦力を十全に活かせない可能性は非常に高い。

結論として、やはり可能な限り戦力分散をさせず、且つある程度動ける広さのある場所を選択して動いてくると踏んだのだ。

『——聞こえた。エンジン音、それも二つぐらい』  
『予想通りですね』

沙織さんから与えられた情報を、華さんが首肯する。  
取りあえず、二分の一の賭けはこちらの読み通り。

あとは、麻子さんの腕と私のナビゲーション、ロディマスの自力にかかっている。

地図、視覚、沙織さんからの情報から、大体の接敵地点を割り出す。

「この先の道を右折して、そのまま一気に大通りに出てください。相手をするのはほぼ一瞬で構いません。一気に大通り沿いを逃げてください」

「……ロディマスさんは出来ると思うか？」

「信用してくれよ。この間の訓練のときだって上手くいっただろ？」

オレは麻子の腕を信じるだけさ」

麻子さんの疑問に、ロディマスは明るい様子で答える。

「……わかった。好きにやらせてもらおう」

それ以上何も言わず、麻子さんがハンドルを強く握る。

「少し揺れるぞ」

右折し、大通りまでの直線に入ると、運転の質が一変した。

ロディマスのエンジンが一気に回転数を跳ね上げられ、悲鳴のような音を上げる。

そしてスロットルレスポンスを挟んだ次の瞬間、体が座席に押さえつけられた。

凄まじいGに思わず搭乗者全員の息が詰まる。

「くうっ……」

『うう……ぐるじい』

『こ、これはなかなか……』



『息が、詰まります……』

「少し耐えてくれ」

大通りへの合流地点に入る瞬間、麻子さんの足がアクセルペダルを踏みながら片方の足でクラッチペダルを蹴り込む。只でさえ高かったエンジンの回転数がさらに急上昇、リアが滑り出し、ハンドルの思い切り切ってノーズを進行方向に向けながらテールを滑らせつつ大通りに躍り出た。

咄嗟に車体の後ろを確認すると、視界に白い大型車と二台の車を捉えた。

「地上部隊がいました!」

「ロデイマス、やっぱりお前のエンジン音だったか!」

当然ながら向こうも此方を捉え、一気に加速し始めるが、こちらは既にカウンターステアを当て終え、テールを暴れさせることなく、車体がまるで地面を滑るかのようにコーナリングさせていた。

ギユラギユラと猛るホイールの空転音が心臓に悪い。

「次は」

「このまま直進……例の場所までとにかく逃げてください」

指示を出し終えたときには、ドリフトは終わり一気にギアを操作する。

あまりの早さに、此方の通ってから数秒後に相手の攻撃が遅れてやって来ていた。

すると相手はスピード差から、自然とウルトラマグナスが遅れだし、ストロークとサンストリーカーが先行して此方を追走する形になった。

「まだか……?」

「まだです……あと20秒ほど……」

「安心しろ! こんなくらいじゃオレのエンジンは爆発したりしないさ!」

麻子さんの頬を冷や汗が流れる。

当然のことだが、今走っているのはサーキットでもなければF1の市街地コースでもない。

地面は当然の如く荒れている所もある普通の公共道路、隣を見ればごく普通の市街地だ。

時折タイヤが石を弾くたびに、助手席に乗っている私も恐ろしさで身が竦みそうになるのに、これを運転している麻子さんのストレスは計り知れないものだ。

だが、確実に勝ちの目に近づいているのだ。

あと少し、あと少しだ。

高揚でバクバクと心臓が高鳴るのは分かる。

乗るか反るか――

「その道ですッ！」

「わかった」

再び麻子さんがアクセルを踏み込み、ドリフトに入る。

あつという間に車体は大通りから別の通りへの接続へと滑り込み、少し走ると後ろを見た。

付いてきたのは――

「サンストリーカーとストリークツ！ ウルトラマグナスはいません！」

「よし！ いけるぞー！」

ロデイマスが喜ぶが、まだ勝負は決まっていない。

あとは予定通りに進むことを祈るのみだ。

先行するサンストリーカーの車体後部に取り付けられたミサイルが放たれる。

だが、ここで避ける訳にはいかない。

ロデイマスに被弾し、派手に爆発する。

衝撃波で車体が焼かれ、ベコンとサーフ部分が凹み、爆風は車体をあおりだす。

「ハンドルが……」

「やらせるか！」

麻子さんが爆発の衝撃にハンドルを取られかけたが、咄嗟にロデイマスもタイヤを僅かながらにそうさし、壁に思い切り車体の助手席側を擦りつける。

壁が直ぐそこに迫り、ガリガリと派手に音を立てる光景に思わずゾツとする。

だが、直ぐに体勢を立て直し、再び加速する。

その光景に驚いたのか、サンストリーカーが大声で呼びかけてきた。

「ロディマス！ もう諦めたらどうなんだ！」

「いいや、ここで諦めるなんてご免だよ！」

続けて後続のストリークもサンストリーカーの影から何発か打ち込んでくる。

『ホットロディマス、蓄積ダメージがそろそろマズイですよ！』

優花里さんが状況を報告してくる。

だが、もう直ぐそこに用意していた勝利への算段は近づいていた。

「——麻子さん。このさき300メートル先の道を右折して、後は予定通りに」

「……」

無言で頷く麻子さんは先程までの様子と違って、どこか普段通りに見えた。

そのまま予定ポイントに車体をつつませ、一気にロディマスをとランスフォームさせる。

副操縦席に転送されると、華さんに指示を出す。

「華さん！」

「任せてください、繋げてみせます」

攻撃用アタッチメント構え、華さんが照準を合わせる。

「ロディマス、誤差の修正をお願いします」

「わかった」

若干の照準のずれを修正する。

そしてそれが終わるか否のその時、追いかけてきていた二台のトランスフォーマーが姿を現した。

「ようやくマトモに戦う気になったか！」

「よくやったが、ここまでだな！」

二人ともロボットモードにトランスフォームし、こちらに銃を構え

だが、もう遅い。

すでに、華さんはトリガーを引いており、レーザーは二人を飛び越えてその後ろに用意されていた目標へと着弾していた。

「おいおいどこに向かって——」

ストリークが着弾した場所を見た瞬間、光が周囲を包み込んだ。

サンストリーカーのミサイルとは比較にならない程の、凄まじい爆発が起こったのだ。

予想外の爆発を後ろからマトモに浴びた二人は、まるで風に煽られる木の葉のように吹き飛ばされ、同様に巻き込まれた周囲の建築物と共に近隣の家屋をなぎ倒しながら突っ込んでいった。

爆風を受けないように地面に伏せたロディマスの周囲を熱風と爆風が吹き荒ぶ。

「くうッ……」

「若干ダメージを受けてますが……大丈夫、耐えられます」

優花里さんがコンソールにかじり付くように向かいながら言う。

爆発も収まり、ロディマスがよろよろと立ち上がり吹き飛ばされた二人のトランスフォーマーへと目を向けると、家屋に突っ込んだままどちらも微動だにせず、フラッグをパタパタと靡かせていた。

ロディマスがぐつとサムズアップをしながら喜ぶ。

「やったな皆！」

「—— やったじゃん！ 一気に二人も倒した！」

「西住殿の作戦勝ちですね！」

沙織さんと優花里さんも歓喜の声を上げる。

麻子さんは、少しだけ息をつくと再び操縦桿を握っていた。

「しかし、助かりましたね……アレがなかったらどうなっていたか」

「Bチームの皆が残してくれて本当に助かりました。あれのお陰で勝ちを引き寄せられましたからね」

そうやって華さんと共にバイザー越しに視線を向けた先には、先程攻撃した目標—— 溶解し、千切れ飛んだまま放置されたままだった翼に取り付けられていた、パワーグライドの振動爆弾だった。

「リタイアした本体は直ぐ回収されちゃうんですけど、ああいった千

切れたパーツや武器は最後に片付けられますからね。運がよかったです」

「これで形勢逆転だな」

ロデイマスが再び気を引き締めた様子で言う。

確かに、ここからが正念場だ。

相手はウルトラマグナスただ一人。

だがグリムロックと協力したとしても、勝ちに行くのは厳しいかもしれない。

こちらはどちらも戦闘でダメージを受けているが、あちらは殆ど無傷。

そして、此方は手札を使い切った。

本当の本当に、正面切つての真剣勝負の始まりだ。

## 第十話 原石

視界に突然ウルトラマグナスが現れた。

巨大なキャリアカーが道路端から忽然と此方に向かって飛び出して来たのに驚き、反射的に握っていたアタッチメントのトリガーを引く。

同時にグリムロックの手に握られた二連装ロケットランチャーが放たれ、燃烧する推進剤の尾を引きながら現れた敵へ向けて飛んでいく。

しかし弾頭は途中で軌道を変え、目標を逸れ明後日の方向で爆発した。

「ちよこまかと！」

「いやあ、相手がどうこうよりもセンスってやつかなあ……」

会長がなにか言った気がするが、攻撃と前方の敵に気を取られてなんと言ったのか聞こえなかった。

弾頭が無くなり、隙だらけになったこちらに向かい突撃するつもりなのか、相手は加速しながら此方に向かってくる。

思わずトリガーを引くが、弾が切れたランチャーから『N O A m m o』の返事が返される。

「おれグリムロック、負けないぞ！」

「お願いグリムロック、言うこと聞いて！」

柚子が回避しようとレバーを引こうとするがウンとも寸とも言わず、グリムロックは正面から受け止めるつもりなのかどっしりと腰を据えて両手を構え始める。

「おれグリムロック、戦士はたたかう！」

「そんなに勝負したければ遠慮無くいかせてもらおうぞ！」

相手もその気なのか、一気に加速しそのまま此方めがけて突っ込んできた。

衝突した瞬間、とてつもない衝撃が操縦席を揺らした。

グリムロックは相手前方の車体部分をガツチリと握り込み、踏ん張りを効かせようとする。

だが、まったく重心が制御できずに足下の地面は衝突の衝撃で割れ、一気に吹き飛ばされん勢いで押し返されていた。

柚子が衝突の勢いで揺さぶられたために、咄嗟に受け止める動作ができなかったのだ。

するとウルトラマグナスが急停止した。

突進の勢いで凄まじい慣性が働いているグリムロックは操縦のサポートもなく、車体部分を掴んでいた手を離してしまい、ボディは勢いのまま宙を舞うが如く吹き飛んで、頭から家屋の塀や壁やらを巻き込んで突っ込んだ。

先程とは比べものにならない衝撃が、再び操縦席を襲う。

安全ベルトで固定されているからよかったが、付けていなかったら操縦席の中をきりもみしていたところだろう。

だが脳が思い切り揺さぶられたため、思わず頭を抑えて眉をひそめる。

「うう……」

「いててて……ああッ?! あたしの干し芋が……」

手元をなにやら探っていた会長が天井——今は上下で言えば床なのだが、天井を見ると干し芋の入ったジップロックの袋が無残に中身をぶちまけて転がっていた。

操縦席が逆さまになってしまっているので、私達は今宙ぶりの状態となっていたのだ。

「おれグリムロック、目がまわるぞ……」

「すぐに立て直します!」

柚子が頭をブンブンと振って再び集中し、レバーをガチャガチャと動かす。

だが、相手はそんな余裕を与えてくれるほど優しくはなかった。

ロケットランチャーが打ち込まれ、爆発。そして間髪入れずにレーザーで狙ってきた。

「うーん……柚子。動けそう?」

会長が渋い顔でコンソールを見ながら尋ねると、柚子は焦った様子で顔を横に振る。

「ダメです、爆発とレーザーの衝撃でまともに立てません」

柚子がレバーを引こうとするが、相手の攻撃が絶え間なく襲い掛かってきているからか、ガタガタと操縦室が揺れるとレバーが再び初期位置へと戻っていった。

「このままじゃあ体のいい的ですよ！ 何か手段は……」

「ないね！」

必死に天井の干し芋が入った袋へと手を伸ばしながら、会長はにべもなく答える。

諦めるのかと非難しようとする、会長は私の考えをわかっているかのように続けて言う。

「たればの話だけど、西住ちゃんが乗ったらできたかもね。でもあたしらじゃ逆立ちしたって無理。ちよつとこの子のこと甘く見過ぎた、確かにスツゴいスペック持ちだけど、こりゃあ私以上のじゃや馬だよ」

「ど、どういうことなの？」

柚子が顔を真っ赤にし、両手でレバーを力一杯引きながら尋ねる。「グリムロックはね、あたし達のこと嫌がってるんだよ。グリムロックは優秀な戦士、でもそのプライドは実力と同じでとんでもなく高い。初期のビースト系によくある問題点らしいね。で、アタシ達はその能力の十分の一も引き出せてない。だから嫌がられてるんだよ」

「そんな……」

思わず愕然とする。

嫌だから。

そんな理由で機械が反抗するのかと、酷く驚いた。

ビッグコンボイの言うとおり、今後の改善点だねえと言いながら、攻撃の衝撃で浮き上がった干し芋の袋をキャッチする会長。

笑顔で中身を取り出して囓り付くが、内心その感情はどうなのだろうと、思わず考える。

あの約束はいつも頭をよぎって、焦っているに違いないのに、平然としていられる。



私には出来ないことだ。

会長は、芋を囓りながら少し考え込み、

「……おいグリムロック！」

「なんだアンズ！ おれグリムロック、今いそがしい！」

グリムロックが声に反応したのを確認すると、干し芋を囓るのを止め、すうと息を吸う。

そして、付けていたインカムに大声で怒鳴り散らし始めた！

「あのグリムロックがこんな弱いなんてガツカリだよ！ そんなんで戦士？ 笑っちゃうよね！ 優秀とか言われるけど、実は一人だとなんにも出来なかったんじゃないの？ 仲間のお零れでそんなに持ち上げられちゃってさ、可哀想だよねエ！」

インカムに向かって大声でまくし立てる会長。

あまりの剣幕に、私も柚子も思わず呆然とする。

「それともアレかな？ バカには難しくってわかんないか！」

「おれグリムロック、バカいうヤツがバカ！ チビのくせしてナマイキだ！」

「チビで結構だね、アンタは馬鹿でかい体して碌に無駄に頑丈なだけじゃん！ほんとに強いんならさあ、見せてみなよ！ アタシ達の下手な操縦でもやれるってところをさあ！」

「おれグリムロック、イわれっぱなしシユミじゃない！」

すると、突然グリムロックの操縦桿が軽くなったのか、柚子が軽く引いただけで素直にレバーは動き出す。

そして、周囲のモニターやランプが一層激しく点滅し始めた。

会長はコンソールを見ながら、インカムの接続をカットしふうとため息をつく。

「一気に火が付いたみたいだね……1年分ぐらいの大声出した……はあ〜」

「会長、お疲れ様です」

「後は私達の出番だな！」

そう言って、攻撃用のアタッチメントの操作を格闘戦用に切り替える。

アタッチメントを足下の収納棚に放り込み、格闘専用の操縦桿を握った。

既に柚子はグリムロックを素早く立ち上がらせ、相手めがけて突っ込んでいた。

操縦桿のスイッチを押し、思い切り引くと、グリムロックが何処からか何かを取り出した。

それは、大きな剣の柄だった。

両手でそれを握り込み、ウルトラマグナスめがけ切り込んだ。

すると、柄から凄まじいエネルギーが放出され始めた！

「——踏み込みが甘い！」

「クソッ！」

巨大なエネルギーの光—— エネルギーブレードはウルトラマグナスの装甲を焼き切りかけたが、相手が咄嗟に半歩退いたため、手のもっていた銃の銃身部分だけを両断した。

思わず毒づき、再びレバーを思い切り引き倒す。

それに対し、相手は先の無くなった銃を此方に放り投げた。短くなった銃は、さっきの攻撃で炉の部分を破壊してしまったのか、派手に光を放って爆発した。

強烈な光でカメラが真っ白に白飛びしたが、グリムロックは怯むこと無く剣を振り下ろす。

その瞬間、レバー越しに強い抵抗感を感じた。

「貰ったぞー！」

抵抗に逆らうようにレバーを引く。

剣は最初はゆっくり切り込み、後は一気に振り抜く。

振り抜いた数秒後にはカメラが復旧し、視界に色が戻ると、相手の長い肩部分が肩口付近にまで切り飛ばされているのが確認できた。

足下には切り落とされた肩パーツとロケットランチャーが弾ごと転がっており、相手は苦しげな顔をして肩の部分を抑えている。

あれ？ 以外と私、接近戦はイケるかもしれない？

「よーし、上等上等……いい感じだね。——ん？」

満足げに笑っていた会長が、突然インカムのスピーカー部分を抑え

た。

そして、一層笑みを深くして、

「時間稼ぎしゅーりょー!」

作戦の最終段階への移行を告げた。

「Eチームまだ残ってる!」

沙織さんが嬉しそうな様子で報告し、操縦席の皆は思わず笑みを浮かべた。

その後、グリムロックの直ぐ近くまで近づき戦闘が起こっていることに気がついた私達は、物陰に隠れ攻撃の準備をしていたのだ。

「いけるかもしれないよ! 私達!」

「うん……でも油断は禁物だよ」

優花里さんの歓喜に対して、頭を冷やしてから答える。

なにせ最後に残ってしまったのが相手の大将格、何が起ころしても不思議はない。

優花里さんに状況を確認してもらおうと、ロディマスは先程の作戦で結構なダメージが残っているようである。

「接近してもこっちは役に立てそうにありません。射撃で援護しましょう」

「わかりました」

華さんがアタッチメントを構えて、トリガーを引こうとする。

だが、いくら経っても腕を上下左右に動かすだけで一向に撃つ気配を見せない。

不審に思い、尋ねてみる。

「どうかしましたか?」

「グリムロックが射線に入ってきて……撃つタイミングがありません」

華さんの言い分に、私も外部カメラのバイザーを付けると、グリムロックは大剣を振り回して相手に張り付き続けており、一向に射線を開ける気配は無かった。

沙織さんに指示し、射線を開けるに連絡してもらおう。

だが、いくら経つてもグリムロックは此方に背を向け剣を振り回し続けた。

「一体何が……」

「ふふふ……イケるッ!! イケるぞオ!!」

「おれグリムロック、このままタオすぞ!」

「ちよつと桃ちゃん?! もう攻撃はいいから!」

「ええい動くな! 真つ二つにしてやる!」

「……駄目だこりゃ!……あつ」

次の瞬間、ウルトラマグナスは、剣を振り下ろしたグリムロックの腕を片手で上から押さえ込んだ。

重心を剣と共に一気に前のめりにしていたグリムロックは、そのまま腕と共に空いていた手で肩も押さえ込まれ、あっけなく地面に倒れ伏した。

そして手首を外側へと捻り込まれ、握力を失った手からブレードをいとも簡単に奪い取られてしまった。

「焦ったが、ここまでにしてもらうぞ!」

「おれグリムロック……くやしいぞ……」

そしてウルトラマグナスはエネルギーブレードを逆手に持ち、そのままグリムロックの胴体部分に差し込んだ。

短い呻き声が聞こえたかと思うと、グリムロックは背中からフラッグが飛び出させた。

「……」

めまぐるしく起こった展開に、思わず誰も何も言えなかった。

だが直ぐに冷静になり、華さんに射撃指示をだす。

呆然としていた華さんも我を取り戻したようにトリガーを引き、攻撃を始めた。

だが、相手はまるで攻撃を予測していたように、すぐさま建物の間の小道へ逃げ込む。

「こちらは射線が通らず、相手は手軽な獲物を失う、硬直状態に突入した。」

「どうしましょう、強気に攻めてみますか?」

「うーん……相手のロケットランチャーの残弾がどれぐらい余ってるのかな。剣はグリムロックを刺したままになってるから安全として、もし弾が2発以上残ってたら道の狭さで避けられずに爆風に巻き込まれてリタイアです」

優花里さんの提案も確かだが、このまま悠長に待っていても相手が手を打ってくるはず。

そうしたらロディマスが初撃を耐えられる可能性はとても低いと言わざるをえないだろう。

「優花里さん、ロディマスの各パーツの損傷度はどのくらいですか?」  
「ええと……装甲は大分削られちゃってますけど、関節周辺と脚部は無事です」

「みほ、何か考えがあるなら早めに言ってくれ。 奴さんそろそろ仕掛けて来そうぞ」

ロディマスが急かすなか、なんとか考えをまとめる。

足回りは健在でこっちの武装は射撃中心、対して相手は遠距離武器がロケットランチャーが片方に残っていると仮定して、家屋を盾に狭い道に逃げ込んでいる、

—— やっぱり賭けにしかならないなあ。

でも、勝ち目があるならやってみる。

「家屋の上を進んで行きましょう」

「え、屋根の上ですか?」

「はい、無理矢理接近戦に持ち込みます」

恐らく、相手が一番恐れているのは残り少ないロケットランチャーの弾を無駄撃ちすることだ。

相手の攻撃手は相当焦っているだろうし、それはウルトラマグナス本人も同様だろう。

そして、相手もグリムロックと戦ったときに受けたダメージもそれなりに大きい。

対してこちらは、遠距離武器なら豊富だが一発どころか爆風すら危うい状態だが、相手に攻撃を当てることが出来れば十二分に勝ちを狙える火力はある。

この勝負を決めるのは、相手に先に攻撃を当てた方になる。

一撃を避けられても、当てられても負ける。

そのぐらいのつもりで行かなければならない。

「よおし、じゃあ行とするか！ 行くぞ麻子！」

「うん」

麻子さんの操縦に合わせて一気に正面の家屋に飛び乗ると、およそ車一台分以上の質量がかかって屋根がミシリと音を立てた。

足場が崩れる前に、次の家から家へと屋根の上を駆ける。

最悪足場ごと崩れ落ちてリタイヤなどという可能性が今更ながら思い浮かんでゾツとする。

だが、そんな不安を尻目に麻子さんはロディマスを用意に操り相手に向かっていく。

そしてついに敵がいる通りにまで迫った。

「華さん！」

「任せてくださいー！」

華さんがぐつとアタッチメントを握って構える。

そしてそのまま相手のいる通りへと飛び込んだ！

「相手はッ?！」

「左です！ 十時……！」

華さんが銃を撃とうと構えた。

だが、ここで予想外の事態が起こっていた。

なんと既に相手は此方に向かってロケットランチャーを既に撃っていた！

読まれていたのか、それとも音で屋根越しにやってくると咄嗟に判断されたか。

いや、問題はそんなところではない。

通常、ウルトラマグナスのロケットランチャーの最大発射数は二発である。

これは両肩に取り付けられているランチャーの最大装填数が片側で一つずつ。これを両方同時に発射した場合に二発同時の最大火力となるのだ。

だが、今は片側が切り落とされて一発しか撃つことはできない。

そして、接敵されている状況で再装填などといった悠長な事はできないのは自明である。

つまり、相手は読んだ、察したという理由だけでたった一発の虎の子を、偏差射撃してきたのだ。

そしてなにより、その読みと博打は見事成功し、此方は空中を自由落下しているところを狙われている。

このままの弾道では直撃することを避けられないことだろう。

撃ち落とせるか――。

万事休す、そう思ったそのときである。

「――！」

咄嗟に麻子さんがレバーを素早く操り、フットペダルを蹴り込むと、ロデイマスが銃を放り投げ、足が連動して動き出す。

そして、空いた手でロデイマスが家屋の屋根を掴み、ぐっと腰を捻り込む、そしてそのまま飛んできている相手のロケットを、

「な――?!」

「え――？」

蹴り返した、

爆発寸前の弾頭を、相手側に蹴り返したのだ！

これは後でわかったことだが、この曲芸じみた技にはある偶然が絡んでいた。

ウルトラマグナスのロケットは近接信管式ではなく、爆発タイミンが着弾の瞬間である瞬発信管であり、弾頭に信管が備えられていることと、誘導式ではない所謂撃ちっ放しのロケットであったことだ。ミサイルを蹴り返した瞬間、ロデイマスの爪先は弾の弾底側面部分を蹴っていた。

この時、コンマ数秒の間だが、爆破に誤差が生まれた。

爆破の瞬間はほぼ同時であったが、そのほんの一瞬、側面を蹴り抜

かれたロケットは空中で半回転し、推進力が最大になっていた弾は無  
理矢理軌道を修正され、ほんの少しだけ、相手側へと飛んだのだ――

そして、弾頭は丁度私達と相手のど真ん中で弾け飛んだ。

一気に視界が明るくなったかと思ったときには、凄まじい衝撃と爆  
音が操縦席を襲った。

上下左右めちゃくちゃに振り回されて、三半規管は滅茶苦茶にされ  
方向感覚を失う。

その後も数回、大きな衝撃が走ったかと思うと途端に振動は収ま  
り、あつという間に何事もなかったかのように静まりかえった。

盛大に頭が揺さぶられたため、少し気分が悪くなった。

酷く耳鳴りがして、頭を抑える。

いや、そんなことよりも大切な事を確認しなくては、

「皆さん……大丈夫ですか？」

もしもの事がないかと、すぐに点呼確認をする。

すると、ぽつりぽつりとだが返答が来た。

「秋山あ、大丈夫です……」

「五十鈴も、なんともありません……」

「う、うええ……私も、なんとか……」

「……大丈夫だ」

全員の安全を確認し、胸をなで下ろす。

次に、ロディマス の状況だ。

「優花里さん、こんな状況ですけどロディマスはどうですか？」

「あ、はい……」

優花里さんが、ふらふらと目を回しながらコンソールを確認する。

ふつと、その表情が曇ったのがわかった。

「……リタイア判定、確認しました。ロディマスはスリープモード  
に入ったみたいですね。カメラも止まってしまっただけで相手がどう  
なったかはわかりません」

優花里さんの報告が来たそのとき、沙織さんがインカムのスピー



カーを抑えた。

そして、眉をひそめて、

「今、審判側から連絡きた……リタイア判定、ほぼ同時だったけど、タッチの差で相手側の勝ち……だって」

気まずそうに言う沙織さん。

「わかりました……皆さん、お疲れ様でした。ここまでみたいです」  
皆に終わりを告げるが、酷く疲れ切ったのか、誰も何も言わなかった。

「とんでもない新人が現れたモノね……」

機能停止に追い込まれたウルトラマグナスのコックピット内でもり言ちる。

最後の最後で、まさかあんな捨て身の作戦にでてくるとは、正直驚いた。

最後の攻撃を蹴り返してきたのもそうだが、なによりなりふり構わず飛び込んでくるあの度胸は、私には出来ないやり方だ。

通常、あの状況で武器が制限されていれば、恐らく屋根越しに攻撃を仕掛けてくるというのは考える人は多いだろう。

だが、それはあくまで考えるだけである。

実際にやるといえるのは無謀や蛮勇といったものだ。

屋根越しに移動しようというのは、基本空を飛ぶ能力があつてやることである。陸上を走るトランスフォーマーで行おうとするのは勇氣と相応の技術いる。

なにより相手はほぼ初心者。

手元が狂えば無様に転げ落ちる危険性は十二分にありえたはず。いや、殆どの者はここまで操縦しきることとはできないだろう。

少なくとも、我が校でも初心者でそれが出来そうな操縦手はいないだろう。

だって、誰もやろうとしないもの。

すると、通信席で目を回していたペコが起き出した。

「いてて……あ、皆さん大丈夫ですか」

「あら、今頃起きたの？ 皆無事よ。あと、勿論勝ったから安心なさい」

「そうですか……はあ……よかったあ」

無事と結果を報告すると、安心したのかぐったりとシートに体を預けて脱力した。

最後の奇襲。

恐らくペコがいなかったらマトモに食らってこっちがリタイヤしていたかも知れない。

攻撃手はプレッシャーで完全に視野狭窄一步手前になっていたし、私も先程言ったように奇襲について考えてはいたが確信を持てずにした。

そんな時、外部スピーカーにただひたすらに耳を傾けていたペコが、異常な位置の音源と接近速度、距離感を報告してきたのだ。

咄嗟に私は攻撃手に指示を出して、一発しかなかったロケットをペコが予測した位置とタイミングで打ち込んだ。

いくら焦っていたといっても、流石私と共に三年も訓練してきただけあり、攻撃手の子は命令すればあとは慣れた手つきでやってくれた。

思い返せば親善試合としては上々、濃密な内容だった。

此方の強みも、弱みも、改めて理解させられた。

ほぼ実戦が始めての学校相手にだ。

開始前にみた、相手側の代表の顔が思い浮かぶ。

確か名前が、

「西住みほ……あの西住流の……合わないはずだわ」

「……どうかしましたか？」

「ペコ、戻ったら彼女達に茶器を差し上げて。いい物をね？」

そう言い残して、私も目を閉じ、シートに身を預けた。

彼女達は今年の全国区には出場するのだろうか、ふと思った。

出場するとしたら今年の大会、面白いことになりそうだ。

期待に胸踊らせながら、軽く眠りに就いた。

## 第十一話 トランスフォーマーのいる日常

今回は、大洗女子学園のとある休日から物語を始めよう。

前回の聖グロリアーナ女学園との戦いを通して、お互いのコミュニケーションの重要さを実感した大洗TF道選択者達。

トランスフォーマー達と出会って間もない彼女達は、パートナーであるトランスフォーマー達との交流を深めていた。

大洗女子学園・TF整備用倉庫

鉄と油の臭いが充満している倉庫では、休日ながら協力者として整備を担当している自動車部のメンバーやソフトメンテナス担当の悪魔博士、何人かのTF道選択者が集まっていた。

チャーと大洗歴女チームの一人、おりようが難しい顔をして台をはさんで向き合っていた。

他三人は二人の様子を静観し、エルヴィンは手元の紙に何かを書き込む。

おりようは苦々しい顔をしながら、額にたらりと汗を流す。

そして決心したように台に手を伸ばした。

「……4六角」

「……7七飛、返しはあるかの?」

チャーの指しの通りに、エルヴィンが飛車を掴まんでパチンと小気味いい音と立たせながら将棋盤に置く。

途端におりようは渋い顔をしながら盤上を睨み付ける。

「……………参りました」

チャーの一手への返答を考えたが、将棋盤を前におりようが敗北宣言をして礼をし、相対していたチャーもそれに返す。

すぐさま感想戦に移り、左衛門座やカエサルが脇から盤を覗き込みながら、狐につままれたような様子でエルヴィンが付けていた棋譜と見比べる。

「これは……わけがわからない」

「打ってる私が一番わからんぜよ……」

「何故ここで角の利きをしていた飛車を自分から動かせるんだ……？」

「あつはつは、年の功じゃあ若いモンにはまだまだ負けられんわい」

エルヴィンがううむと唸りながら棋譜を睨み付けパチリと1筋の歩を進め、端歩を伸ばそうとするが、これ以上端歩を伸ばすとチャアの角道が開いてしまい取り返しが付かなくなる事が目に見えた。

チャアの盤面は9筋の歩を五まで押し上げており、そこを基点として端歩を伸ばして箱を構築し振り飛車との併用で完全において角を殺していた。にも関わらず、利きの飛車をわざと下げ、おりようが組んでいた矢倉の金と銀が箱を崩せない形に持ち込み攻め手を完全に潰したのだ。

おりようが飛車の圧力に屈して角を押し上げた事で攻めきる手を失ったため、このまま打ち続けてもおりようの勝ち筋は無いといえるだろう。

「なんとというひねり飛車……」

「もつとドンと構えなけりや勝てるもんも勝てんぞ？ そうじゃな、一つ面白い話をしてやるかの。そうアレはワシがまだ惑星間をあちこち飛び回っていたころじゃ……」

「お、チャアの昔話の時間だぞ」

4人は感想戦もそこそこに、昔話を始めたチャアを中心に座り込む。

昔を懐かしみ、高揚した様子でチャアは語り続ける。

「まさに蟻の巣の様な洞窟での、仲間と散り散りになったワシは、いやあ迂闊じゃった。ビツクヤツクの巣の中に飛び込んでしまったんじゃ。あの時はワシもこれまでと思ったわい」

「……毎度話に出てくるがビツクヤツクってなんなんだ」

「……さあ？」

「じゃがの、最後の最後にチャンスが巡ってきたんじゃ。あれはなんじゃったかのお……」

歴史好きと昔話好きの老兵の組み合わせは、やはりというか上手く噛み合っていた。

チャーの昔話好きは、少々行き過ぎたところがある。事あるごとに過去あんなことがあったこんなことがあったと、耳にタコが出来そうな程に語りだすのだ。

実際、トランスフォーマーの中でも戦いの話が大好きなグリムロックを除いては、チャーの昔話に辟易してきる所があった。

チャーは分け隔てなく接する性質でもあったし、戦士としての強さは誰もが認めるところではあったが、少々口煩い老人というのが周囲からの総評である。

だが、歴史好きの彼女たちからすれば、チャーは正に生きた化石、生きた偉人のような人物である。

彼女たちがチャーのパートナーとなったのは、ある種運命的であった。

「チャー、単身で乗り込んだ話は十分聞いたから何か徒党を組んで戦った話をしてくれないか？」

「トランスフォーマーの戦い方に興味あるぜよ」

「……まだ途中なんじゃがの」

傍から見れば、それは昔話をねだる子供と老人そのままであった。

「よし、始めるぞー！」

「ホイスト、おねがーいっ！」

「いくぞお……それっ」

ホイストが右手のミサイル発射口を少し上に向けると、パシユンと軽い音を立てて何かが飛び出した。

なんとそれはバレーボールで、飛び出したボールを茶髪のロングヘアの揺らしながら妙子が受け止める。

上手く衝撃を緩和されたボールの先にはすでにキャプテンの典子が構えており、そつとボールに触れたと思うと、以外にも見た目には想像も付かない高さでボールが浮かび上がる。

コート中央にかけられたネット付近に落下していくボールを、アタッカーの忍が鋭いアタックで相手側のコートにねじ込もうとする。しかし、打ち込んだ瞬間に下から人形がせりあがってきて、忍のアタックを弾き返す。

完全に決まったと思ったアタックは勢いをそのままに自陣コートに突き刺さり、バヨンと音を立てて跳ね返った。

フィールド横で記録を付けていたあけびがペンで成否の欄にペケを付ける。

その横には十回分の印が既に付けてあり、それは全てペケ印であった。

「うーん、今のアタックが入らないのか……」

「ちよつとホイスト、これ本当に入るの？」

敵陣側のネット下に備え付けられた装置を指さしながら不平を漏らす忍と妙子。

だが、ホイストは首を横に振って間違いだとそれを跳ね除ける。

「四人の身体測定時の記録や、ちよつと前に取ったデータに合わせて作ったんだけど……どこか間違えたかな？」

手元の調整用パネルをポチポチ押ししながら、ホイストが唸る。

計算上では、確かに十二分に成功するレヴェルでの調整になっていた。

困った様子のホイストに、典子が笑いながら話しかける。

「いや、ホイストは多分間違えてないよ」

「ん？ それじゃあ一体……ああ、そういうことか。確かにそれは

僕の領分じゃないなあ、ハハハ」

ホイストは何か納得すると調整用のパネルの電源を落として、再びミサイル発射口にバレーボールを詰め込む。

一方で典子は記録係をしていたあけびも含めて、顔を突き合わせて円陣を組み始めた。

「絶対あのブロックは崩せる！」

「でもキャプテン、あれ反応が早すぎますよ……」

「いや、私はホイストを信じる！ 気合が足りないのは私達の方だ！」

あけびの弱気な発言に、小さいながらもデン！と胸を張って言い切る典子。

若干呆れ気味になるあけびに向かって、笑いながらホイストが付け加える。

「いやいや、キャプテンの言うとおりさ。どんな辛いことだって意思さえ折れなきやあ大丈夫。機械だって調子が悪いときもあればいいときもある。でも、どれかが悪くたったって他の皆でカヴァーすればもつといい結果が出るときだってある。ほら、ビッグコンボイも言ってたろ？ ワンフォアオール、オールフォアワン！って」

「うーん、ホイストの説明はわかりやすくて助かる」

「キャプテンはちよつとわかり辛いところがありますからね……」

忍と妙子が苦笑いしながら言うのと、典子は少しふてくされた様に考え込む。

「むー……気合いじゃわかんないのかな……」

「ちよつと伝わりにくいだけで、キャプテンは間違っちゃないさ。

ほら、練習練習！」

ホイストが上に向けていた砲塔をチョイチョイと左右に振って準備するように促す。

自然と、皆が所定のポジションへ就いていく。

それぞれのポジションに就いた途端に、先程までの緩い雰囲気とは打って変わって空気が引き締まるような感覚を覚える。

それを見てホイストは、

「よし、行くぞー！」

嬉しそうな様子でボールを打ち出すのだった。

#### 大洗女子学園・校庭

「グリミイちゃんも桃ちゃんも頑張ってる！」

「桃ちゃん言うなッ！」

「おれグリムロック、ちゃん付けするナ！」

「ほおれ二人とも、余所見してる暇があったら指を動かすう！」

「くうっ……このっこのっ」

校庭の一角にて、いつもの生徒会メンバーとグリムロックは射撃訓練をしていた。

といっても、彼の得物は実銃のレーザー銃でない。

あんなものを振り回しては安全管理するしないどころの話ではないので、全日本TF道連盟公認のペイント弾（後で予算で落とそうとしたらとんでもない値段だった）を使つての訓練だ。

桃が使っているのは普通のエアークガンである。

お互い簡易的な向かつて先程から撃つて撃つてを繰り返してはいたが、それらの殆どは予算をドブに Dank シュートするが如き結果となつていた。

私や会長としては的に掠つたりするたびに、桃が一喜一憂するのが面白いので飽きはしないのだが。

「モモもう少しおちついて狙え。目をとじてたらあたらない」

「うるうさあいッ！ 言われなくつてもわかつてる！」

グリムロックが横から口を出すと、癩に障つたのか桃はつんけんとした態度で応じた。

本心でないのは私や会長もわかっているし、彼もわかっているアドヴァイスしているように見える。

その様子を見ながら、私は先日あつたことを思い返した。

前回の親善試合の後、私達の中で一番落ち込んでいたのはグリムロックである。自動車部と悪魔博士に修繕してもらつた後に会つた時には、いくら話しかけても生返事で大好きなチャアの昔話にも耳貸さなかつた程だ。

あまりの落ち込みように、このままふて腐れてしまうかと心配していたが、そんな心配は杞憂であつた。

「おれグリムロック、頼む、オレのこと勝たせてくれ！」

何日か経つた後、復帰したグリムロックの第一声がこれだ。

突然の態度の変化に戸惑つていた私達に対して、彼はウンウンと考えながら言葉を続けた。



「……オマエらが事オレのことふつうに戦わせるのムリだ……でも、オレ、マケるの嫌いだ！」

こちらのことを操縦させたくないほど嫌がっていたグリムロックが、頭を下げて頼んできたのだ。

その言葉に、私は何も言えなかった。

少なくとも私達の努力不足が敗因にあるのは間違いでないし、グリムロックと歩み寄ろうとしていなかったのは確かなのだ。

動かせばこちらの指示通りに動くと、勝手に思い込んでいた。初歩的な事を忘れていたのだ。

彼は、彼らは、ただの機械ではなく、意思ある生命体なのだ。

意思がある事も、生命体であるということも知識では理解していた。

だが、私達は直面して始めて気づかされた。

彼らは、本当に生きているんだということ。

「あ、当たったぞ！ それ見ろ、私の方が好成绩だ！」

「おれグリムロック、モモだけにはマけたくナイぞ！」

「おい！ どういうことだ！」

「アツハハハハ！ ドングリの背比べだよお！」

「会長！ 何故そこで笑うんです?！」

会長が笑ったのにつられ、思わず笑ってしまう。

桃は納得いかないといった様子で慥然としてしまうが、グリムロックが大きな手で桃の肩をポン（というよりはゴンと押す感じか？）と乗せ、

「絶対ミカエしてやるもんね！ やるゾ、モモ！」

「——フンッ！」

慰められて恥ずかしかったのか、桃は顔を赤くしてそっぽを向き、エアージェンを的に向ける。

ちよつとずつでも、仲良くなつていけるかな？

そんな事を思いながら、再び練習を始める二人を笑顔で見守るのだった。

「ヒューツ！ 痺れるサウンド！」

「自慢のサウンドシステムだよ。　ブロードキャストの奴にも嫉妬されるくらいだね！」

「ブロードキャストって誰……？」

「古い友人だよ。　……皆どうしてるんだろうなあ」

懐かしむように言うマイスターだったが、皆は彼の感傷よりもサウンドシステムの方に夢中であった。

乾いた笑いをするマイスター。

オルトモードのマイスターを中心に、ドアを全開にして皆詰めるようにしてマイスターに乗り込んで彼のサウンドシステムを楽しんでいた。

だが、席を譲り合っても乗り込みきれなかった比較的背の高い私澤梓やあゆみはマイスターのボンネットやルーフに腰掛けている。

楽しそうに好きな音楽をかけてもらっている皆を見ながら、すこし申し訳ないような気がしてきた。

なんだか不憫に思い、私だけでも聞こうと思って、恐る恐る話しかけてみる。

「すいません、皆子でもつぽくって」

「謝ることもないさ。　楽しそうでいいじゃあないか、梓も好きなミュージックでもかけてみるかい？」

「私はいいですよ。　そっちよりも私はマイスターの話が気になります」

「そうかい？　……じゃあお言葉に甘えて。　皆は音楽を聞いているからインカムを付けてくれるかい？　あ、でも敬語は付けなくても大丈夫」

マイスターの言われるままに、首にかけるようにしていたインカムを耳に付けた。

マイクを数度ノックすると、マイスターの声が聞こえてきた。

「よし、じゃあどんな話しをしようかな……梓は何か聞きたい事はあ

るかい？」

マイスターの音声が丁度よく聞こえるように音量をイジリながら、少し身をよじる。

なんとなくだけど、マイスターの声（ボイスシステム？）はなんだか耳に悪い。

こう、囁き系というか何というか……。

「ええつとー！ そうだなあ……昔の話もいいけど、これからの話しがしたいなって。ホラ、TF道のこととかも」

「ああうん、そっちも大切だね。じゃあそうだな……」

少し考えると、彼はじゃあちよつと暗い話題だけど、と前振りをして話し始める。

「皆、私が相棒だと心許ないかな？ ちよつと気になってね……」

「……重ね重ねになつちやうけど、ほんつとゴメン……みんなパニツクになつちやうって思わず……」

「君達が悪いんじゃない。誰だつて怖いさ」

「マイスターも怖いのか？」

私は疑問を言った後で、何を馬鹿なことを言っているのかと自戒した。

スポーツとはいえ、体を傷つける武道が怖くない訳ないではないか。

まして体を張っているのはマイスターなのだ。しかも私達が操作している状態 ведь。

自分から話題を振っておいてなんだが、あまりの浅ましさに正に顔から火が出る思いになる。

「うーん……怖いってのはないわけじゃないけど、それよりも楽しい方が勝ってるかな？」

「楽しい？」

「うん。楽しい」

思わず聞き返すと、彼は気恥ずかしそうに答える。

「ずうつとスリープ状態……あ、それじゃわからないな。そうだな……スパークとブレインは動いてるとき……ウサギのクラブハウス

「になつてる間もずっと臆気に意識はあつたんだ」

「え？ そうだったの？」

「ブレインカスパークが止まったら大変なことになるからね。で、ウサギに遊ばれてるノも悪くはなかったけど、またこうやって自由にいられるのがすつごく嬉しいのさ」

声は若干うわずって、心底楽しいという感じが声からでも伝わってくる。

それ故に、前回の失態が私の罪悪感に重石が如くのし掛かつてきた。

楽しいことを十全にできない。

どれだけ辛いんだろう。

そう思つた時には、私の口は動き始めていた。

「絶対マイスターを活躍させてみせるよ。……時間は、かかるかもだけど」

「……あははは！ ゆっくりで構わないよ。皆で頑張っていこう」

「……うん。約束する」

そう格好を付けて言つたは良いが、一拍おいてみるとなんだか恥ずかしい。

なんだか顔が熱くなつたような気がして、思わず膝に顔を埋める。

別のことを考えよう。……やっぱりマイスターって良い声だなあ。

「おーい梓！」

軽い現実逃避から引き摺る返すように、あやが運転席側から顔をのぞかせながら声をかけてくる。

「次は梓がなんか聞きなよ！ほんとスツゴいよマイスターの！」

「あ、今行く」

インカムを再び首にかけボンネットから降りながら、何の曲を流そうかと考えるのだった。

大洗女子学園・TF整備倉庫外

倉庫のすぐ外では、ホットロディマスがオルトモードの状態のみほ

達によって洗浄作業を受けていた。

車体にホースで水をかけながら、沙織ははあと深くため息をつく。

「なんだ、随分疲れてるみたいだけど」

「あー……うん。大丈夫」

ロデイマスが心配すると、彼女は引き笑いをしながら答える。

明らかに大丈夫ではない。ロデイマスもこれ以上は追及しないほうがいいのかと気を利かせ別の話題を振る。

「そういえば、結局あんこう踊りの件ってどうなったんだ？ 俺達すぐに修理に出されたから知らないんだ」

「……ロデイマスッ！」

先ほどまで気の抜けたコーラのようだった沙織が突然叫ぶ。

ビクツとスポンジで車体を磨いていた優花里さんは驚きで身を震わせ、車内を磨いていたみほは苦笑いをする。

華と麻子は副操縦席にいるため全く聞こえていなかった。

そして沙織さんはロデイマスに近づき、ルーフ部分をトントンと叩き出す。

次第にそれは強くなっていき、ドンドンと叩き出したかと思えば急にしゃがみこんでシクシクと泣き始めた。

あまりに突飛もない一連の流れに思わずロデイマスも当惑するしかない。

「忘れるの……忘れるのお……」

「あんまり触れないでください。年頃には色々辛かったんです」

そう言う優花里の目も、何処くすんでいるような気がした。

どうにかしてこの場の空気を変えようと適当な話題を振る。

「そ、そういえば。全国区の大会の抽選会っていつ？ ちよつと憶えてないんだ」

「あ、ちよつと待ってください……」

車内のみほがポケットからスマホを取り出すと、スケジュール欄を表記してフリックする。

何ページか電子ページを捲ると日程が事細かに記されていた。

「来週の金曜日ですね」

「へえ、平日にやるのか」

「学校外の行事は学校の予定なんてお構いなしですから」

みほの説明に、ロディマスは麻子は喜びそうだと思いつながら得心したといった様子で頷く（オルトモードなので実際にしているわけではないが）。

次に、TF道に関しての今後について聞いてみることにした。

「そういえばみほはTF道の今のメンバーってどう思う？」

「……そうですね。平均的な戦力に関しては心配してないんですけど、航空戦力の欠如が心配です」

「やつぱさうだよなあ……」

ロディマスもこのことについては前回の聖グロとの試合で嫌というほど苦汗を舐めさせられた。

地上の戦力は潤沢以上の物があるとみほは思っているが、やはりこの根本的な問題については頭を悩ませるしかなかった。

「エアロボットの一人……そこまで贅沢は言いませんけど、せめて初期のデストロンでもいてくれたらいいのに……」

「まあさうさう美味しい話も転がっちゃあいまいか」

思わず残念がるが、これに関しては無いものねだりをしても仕方がない。

そんな話をしていると、倉庫の中から誰か出てきた。

「おうおう、健気に頑張つとるようじゃの。 関心関心」

「あ、悪魔博士」

それは、悪魔博士だった。

沙織と優花里はペコリと頭を下げて挨拶すると、鉄よりも固いブリキで出来た仮面の下の目が笑っているのが見えた。

仮面のせいで表情が分かり辛いですが、声で感情を表現する人なので、あまり生徒からの不満は出ていないらしい。

「おーさうだロディマス。 あとで大洗のトランスフォーマーみんな集めとけよ。 面白いもんみせちやる」

「え、なんなんだい？」

要領を得ないといった様子で尋ねるロディマスに、悪魔博士は笑い

ながら親切に答えた。

「こないだのあんこう踊りの映像見せてやつから！」

笑顔の悪魔博士の顔面に、沙織から思い切り水をかけられるのはホンの数秒もかからなかった。

## 第十二話 弱り目に祟り目

突然だが、偶然や運といったものを信じるだろうか？

私は正直な話、信じてはいない。

なぜなら、あらゆる出来事は選択や行動の過程から結果が導き出されているからで、とどのつまりは言い訳にしか過ぎないと思っっている。

たとえば、シユレディングアの猫という議題を想像してもらいたい。

世界でも有数の知名度を誇るこの命題だが、この問題の回答を多様化させてしまっているのは結果を、かなりの強引な手ではあるのだが、意図して見ていないからなのである。

箱を開けなければ毒ガスで、ただでさえ短い命を落とした不幸な猫がいるかないかなどは些末なことではかなく、結局のところ認識論的な存在、結果の定義が正しいのか否かの問題ではない。

———とまあここまで俗な唯物論的な思考を巡らせていたが、現実には私を清々しい結果に対面させることを強いるのだ。

『大洗女子 —— 番』

ぽつんと一人、舞台上でスポットライトの光を浴びながら、呼ばれた番号を思わず目がスクリーン上を探そうと右往左往する。

まだ選出されていない空欄扱いの数字と、すでに枠が決まった学校の名前の上を視線が滑る。

そして、とうとう自分たちの番号の枠を探し出すことに成功した。ふと、直ぐ横の私たちの一回戦の相手の枠へと目が行く。

すでにそこには名前が載っており、当然のごとく気になったのでドキドキと落ち着きのない鼓動を感じながらゆっくりと確認する。

『サンダース大付属高校』

手に握った番号の割り振られたプラスティック製の黄色いボールが、なぜだか某有名なドットゲームキャラクターの如くこちらを笑っ



ているように見えた。

……やっぱり運なんて信じない。

「サンダース……サンダースですかあ……」

「うん……サンダース……」

「そうですかあ……アハハハハ！……はあ」

「大丈夫ですか？　なんだか気分がすぐれないようですが……」

やたらと覇気のない優花里さんとみほさんに思わず声をかけるが、二人は軽く笑うとで再びため息をつく。

全国区大会の抽選会終了後、時間の空いた私達は周辺をブラリブラリと散策していた。

せっかく学園艦から離れた遠くの地まで来たというのもあるが、なにより今回来たのがTF道協会お膝元、全日本TF道連盟本部近くであつたということである。

周囲には宣伝のためかいくつものトランスフォーマー関連の店舗が軒を連ね、平日だというのにそれなりのにぎわいがある。

少なくとも大洗でこれ程の活気があるのは夏祭りやかき入れ時の海るときぐらいのもので、やはり都会の熱気は凄いと改めて感じさせられた。

沙織さんは楽しそうにこちらこちらで目を輝かせているが、対照的に麻子さんの方は雑踏の煩わしさに酔ってしまった。

付け加えて言えば、今回はロデイマスに都心くんだりまで来るための協力をして貰っている。

けれど、都心や市街地では許可無くトランスフォーマーをロボットモードにしてはいけないという決まりがあるため、現在はトランスフォーマー専用駐車場——という体の休憩所らしいのだが、『Bar Blur's』というところで用事が済むまで待機して貰っているのだ。

そんな訳で皆で街を闊歩していたのだが、一番意外なのが優花里さんが盛り下がっていることである。

まだ付き合いは長くはない彼女だが、ただ一つハッキリと私から言えることは、彼女は相当なトランスフォーマーフリークであるということだ。

けれど、一番この場を喜びそうな彼女が（みほさんもだが）何故か意気消沈している。

……余程抽選相手がマズイ相手だったということなのだろうか。

勝手ながら憶測で仮説を立てながら、取りあえず珍しい遠出という機会でもあるので、周囲に目を向けるようにそれとなく促す。

「優花里さん、抽選の結果は置いておいて、今は旅行気分でいきませんか？ 日帰りではありませんが」

「……そうですね。すみません、気を遣わせてしまって」

「いいえ、それ程でも」

せつかくですし楽しみましょうか！と、水を得た魚の如く活気に満ちる。

すると、直ぐにキラキラと周囲の宣伝用ポスターやパネルをトランプットを欲しがる少年のように見始めた。

「ほら、みほさんも行きましょう！」

「……そうだね。買い物でもしようかなあ」

みほさんも少し引き摺ってはいるようだが、なんとか気分を変えようとし始める。

気がつけば、沙織さんと優花里さんは少し離れた店舗のショウウィンドウのところに言ってしまったていた。

「ちよつと待ってくださいあい！」

「人混み……辛アい……」

麻子さんの両脇をみほさんと共にガッチリ掴んで、引き摺るようにして二人のところへと向かうのだった。

少し薄暗いようできて、シックな雰囲気醸し出す間接照明が店内の空気を幾分か大人びたものにさせており、不思議と背筋をピンと伸ばすように促される。

周囲では何人かのトランスフォーマーが静かながらも楽しく談笑している会話や、いやなことでもあったのか何杯もエンジェックスを頼んで一気におおっては机に突っ伏してを繰り返す奴もいる。

なんだか静かすぎるといふか、ちよつとした高級感を溢れさせる店内の雰囲気をもどかしく、少し落ち着かない。

そんなオレを見かねたのか、バーテンダーが話しかけてきた。

「ねえねえねえねえロディマスロディマス！ あなたねえあなたねえあなたねえ来たならなんか頼みなさいよ頼みなさいよそう頼もう頼もう頼もう!!」

「うるさいぞブラー！ なんて店の雰囲気はいいのにこんなに店主は騒がしいんだ！」

「あらあらあら失礼失礼失礼しちゃうわもう失礼しちゃうー！」

早口でまくし立てるように喋るバーテンダーは頼んでもいないエンジェックスと数本のエネルギーゴンスティックをコトンと差し出した。

差し出されたスティックを一応一言礼を言ってから一本だけ取りだしてポリポリと齧る。

……うん、さつぱりとした後味ながら濃厚な味わいで、良いエネルギーゴンスティック。あとで食べ〇グで高評価付けとこう。

このバーテンダー、青い細身のトランスフォーマーのコイツ——ブラーは古い友人だ。

オレはここ数十年の間だけではあるが、ちよつと長い休暇を取っていたので友人達の動向が少し気になっていた。

特にブラーからはオレのヤ〇メールのアドレスに何件も連絡をよくこしていたので、かなり興味があった。バーを開いたとか、安物のエンジェックスに慣れていたからか飲みに来たウルトラマグナスの奴が酔いつぶれたとか面白そうな話とかもメールには書かれていた。そこに渡りに船といった様子でみほ達が都会に行きというので、ついでながら友人のところに行って来たというわけだ。

エンジェックスを一口だけ口に含んでゆっくり飲み込む。

なんだかこっちは薄っぺらい味がする。

安物でも使っているのかと、思わずブラーに文句を言う。

「おいブラー、これなんか薄いぞ？」

「あなたねえあなたねえあなたねえ、帰りもオルトモードで人乗せて帰るって言ったのにストレートで出すわけないでしょないでしょないでしょ」

正論に思わず何も言い返せず、エネルギーステイックをボリボリと音を立てて嚙る。

呆れた様子を見せながらも、久しぶりの再会は嬉しいのかブラーが嬉しそうな様子で話しかけてくる。

「そういえばロディマスロディマス。あんたに借してた10シヤニックス早く返して返して返して」

「金の話か！ 久しぶりの再会の話が?!」

「冗談冗談冗談……でも後で絶対返して返して返して」

じとつとした目で見てくるが、視線を高いところに設置された大型テレビに移して知らぬ存ぜぬを決め込む。

番組は丁度ニュース番組をやっており、事件でもあったのか犯人と思わしき顔写真（トランスフォーマーだ）と下に名前が表記されていた。

司会のきりつとした真面目そうな女性が事件の内容等をハッキリとした声で繰り返して説明していた。

『—— コロツサス容疑者は過激派デストロン組織の指導者として国際指名手配されていましたが、レッカーズの熱心な捜査活動によって新たなテロ活動は未然に防がれ、その場にいた部下と共に逮捕されました。レッカーズは、六人が負傷しましたが、幸い死者はでていないとのことです。コロツサス容疑者の逮捕に対して、警察は——』

「随分久しぶりよね、こういうのが出たの出たの出たの」

「ああ。前ってーと……オレが寝てる間に起きてなければ、九百年前か？」

「そうそうそうそう。キ印のブラジオン事件」

ブレインが少し時間をかけながらゆっくりとあの時の出来事を抽出してくる。

あの時は人体実験やらヤバい話が腐るほど出てきた。プリテンドー技術と人間という存在に取憑かれた、イかれた研究者。

まだ生きていたとは当時誰も思っておらず、その凄惨な内容とビツグネームの出現に世界中のトランスフォーマー達が震撼した事件だ。「今じゃ管理外のトランスフォーマーなんてもう殆どいないからな。」

大体は戦時に死んでたとかよっぽどアングラだった奴じゃん」

「コロツサスは地下に潜ってたみたいみたい、でも結局エネルギー不足で頭出た手出た足出た」

「そのままの方が楽だろうになあ」

うつつすいエネルギーを飲みながらふと呟く。

なんだか暗くなつたと思つてそのまま一気にあおる。

底に沈殿してた濃いエネルギーがうまい。

「邪魔するぞ」

すると、バーのドアベルをカロンカロンと鳴らしながらまた新しい客が入ってきた。

ふと視線を向けると、それは意外な奴だった。

そいつに続いて、もう一人も入店する。

全身真っ黒のボディに所々青く縁取ったペイント。胸部にきているオルトモード時のフロントガラスは血の様に真っ赤でどこか毒々しきすら感じさ、ツインアイタイプの目も同様に鈍くだが赤く光っていた。

続いて来たのは、なかなか変わった色をした奴。

全身を薄緑や黄色で塗装し、顔周りは黒という迷彩重視のカラーリング。

目はバイザー型で、こちらも赤く光っていた。

ブラーが嬉しそうにそいつらの名前を呼ぶ。

「ブラックコンボイにドルレイラー！ 久しぶり久しぶり久しぶり！

元気してたしてたしてた？」

「相変らず五月蠅い店主だ、もつと静かにできんのか」

「まあそういうなブラックコンボイ、気は良い奴じゃあないか」

うっとうしそうにするブラックコンボイを横からドルレイラーの奴がなだめる。

相変らず仲がよさそうだ。

すると、相手もこちらに気がついたのか横に据わりながら注文する。

「エンジエックスのオイル割りをくれ」

「おいブラックコンボイ、あまり飲み過ぎるなよ」

「ドルレイラーはいつものいつもの！ はいはいはいはい  
コーヒー牛乳味のエネルギーゴンエネルギーゴン！」

「よしブラックコンボイ！ 今日飲まくるぞ！」

「それでいいのかお前?!」

思わずツツコミを入れると、はっとしたドルレイラー。次の瞬間にはしゅんとして一杯だけと呟く。子どもかお前は。

その様子が面白くて内心笑っていると、ブラックコンボイがこつちを向かずに話しかけてくる。

「最近見ていなかったが、速度違反のしすぎで逮捕されたかと思っ  
ていたぞ」

「笑えないからやめろ。 まああれだ、ちよつと休暇をな」

「休暇？ 年中タイヤを擦り減らさないとイライラ出して、日夜S  
NSを荒らしたりしてたお前が？」

「まあ、色々あったんだ。 オレよりもお前は最近どうなんだ？  
やっぱりTF道？」

「……それしかオレ達にはできん」

出されたエンジエックスを飲みながらブラックコンボイが言う。

その姿は、どこか哀愁を漂わせておりなんだか見てるこつちが辛気  
くさくなる。

「そういえばオレも復帰してTF道始めるんだが、お前達の学校って  
何処だっけ？ 滅茶苦茶強いとこだったのは憶えてる」

「黒森峰だ」

ちよつとずつ味わうようにエネルギーゴンを飲みながら、ドルレイラー  
が学校名を言う。

すると、芋蔓式に記憶が蘇ってきた。

確かスツゴい強い流派の後継者が代々通っているとかでかなりの強豪だったはず。

「ああ思い出した思い出した。　ところでそっちはオレのところは憶えてる？」

「……大洗？」

「そうそう、大洗」

「マジで？」

若干思考した後に、ブラックコンボイが言うのを肯定すると、ドルレイラーが何故か驚く。

何か地雷だったのかと訳もわからず困惑していると、ブラックコンボイがこちらを向いて、

「西住みほ。　そんな名前の選手はいるか？」

「え？　いるけど？　何、お前知り合い？」

「……………ふざけるなッ!!」

バンツと思いい切り机を叩くブラックコンボイ。

驚いた周囲の客がぎよつとした様子でこちらを見てくるが、ブラーが慌てて客に謝罪する。

突然の大声に思わずエンジンックスを零しかけた。だがドルレイラーの方はうつかり零してしまったようで、一瞬悲しそうに零したエネルギーを見たが、直ぐにブラックコンボイをなだめ出す。

「落着け！　すまないブラー、ロディマス。　少し気が立ってるんだ

……」

「もしかして、みほとなんか関係あり？」

「……ああ」

ドルレイラーが俯いて言うが、その様子はどこかおかしかった。

言葉では言い表せないが、なんだか辛いことがあったのだろうか。すると、ドルレイラーは何か気がついたのかハッと顔を上げてなにか呟く。

「だからエリカの奴……ばったり会って喧嘩しないといいが……」

「まほの奴も、機嫌が悪そうだったのはこのせいかな」

ブラックコンボイの方も納得がいったといった様子で頷くが、その表情は納得からは程遠いものだった。

すると、ブラックコンボイは一気にエンジエックスを飲み干し、懐から幾らかのシヤニックスを出すと席を立った。

慌ててドルレイラーもごくごくとエネルギーを飲み終え、ブラックコンボイが払った額が少ないことに気がついて、少し多めにシヤニックスを支払い、店から出て行くブラックコンボイの後を追っていた。

「……一体全体なにになにななんだったの？」

「……さあ？」

残されたブラーと俺はただ呆然とするしかなかった。

「いやあしばらくは出費を控えないといけませんね！」

「それにしても随分と買い込んだね……」

周辺の店舗を一通り見て回った後、トランスフォーマイメージのファミリールレストランで休憩を取っていた。

店内は賑わっており、どうやら私達同様に抽選会に来ていた生徒達も何組か食事に来ていようだ。

内装は優花里さん曰く、宇宙船アークというのをモチーフにしているらしく、全体的にオレンジ色をしており一目にポップで明るい印象を持った。

向かい席でニコニコと笑顔をたたえた優花里さんの横には、いくつかの袋と箱が積まれており、時折袋の中をのぞいては誕生日プレゼントを見る子どものように笑っていた。

「まさかサプライズイベントでクロック選手の握手会をやっているなんて思ってもみませんでした……限定商品も運良く買えましたし、もう悔いはありませんよ……」

「アレには私も驚きました。 ペットのゲイトレイダーも可愛かったですね」

「いやいや、アレはただの鰐でしょー！」



沙織さんが横からツツコミを入れ、思わず私も苦笑する。

巡った先のデパートでプロのメカサッカー？選手がイベントをしており、せっかくだからという理由で皆で見に行っただが、その選手が連れていたペットというのがどう見てもただの機械鰐であった。クロツク選手がフアンの一人一人と握手をしている横で、バリバリとエネルギーキューブを嚙っていたが、凄い迫力だった。

皆がお喋りをしていると、ポウンとテーブル横のブザーが鳴ったかと思えば、その近くに備え付けられていたミニチュアの線路から紫色のSLが商品を荷台や連結した後続車両の上に乗せて運んできた。

とりあえず私は人気商品だというデストロンイグシニアのブルーベリーパイ、みほさんはサイバトロニイグシニアをモチーフにしたというイチゴタルトを頼んだのだが、チエーン店舗の物とは思えないほど芳醇なベリーの酸味を感じさせる程の甘い香りが鼻孔を刺激し、思わずお腹が鳴りそうになる。

「うーん、このゴールデンラグーンスープ（コンソメスープ）美味しいです！ すり下ろしたオニオンの風味がたまりません」

「アダムスのサラダパイも美味しい！」

「……………美味い」

麻子さんがエネルギーキューブ風ブドウゼリーを食べて一言。

皆の評価と料理の香りは空腹をより強く感じさせ、思わずフォークを手に取り先端をパイに差し込む。

クリームやベリーが盛り付けられた部分にはすうとフォークが入っていき、簡単に底のパイ生地部分へと到達した。

「頂きます」

遅れて食事の礼をしてから、最初はクリーム部分だけを掬い取り口元へ運ぶ。

少しだけ、掬い取ったクリームを見てみると、表面一杯にかけられていたブルーベリーソースの下に純白なクリームと、うす黄色のアーモンドクリームが詰まってることがわかる。

その間で紫と白が溶け合い薄紫色に混ざり合っている光景に異様に食欲をそそられ、そのまま口に含む。

ベリーの香りが鼻へ抜けていきながらも、ベリーとクリームが舌の上で、すつと溶ける。

相当に煮詰めてあるのか、強い甘みと共にブルーベリーの酸味を感じたが、それに合わせた甘み控えめのホイップクリームと溶け合い次第に優しいまろやかな味へと変わっていく。

最初の強い味を楽しみたいと思いつつも、クリームと溶け合った絶妙な味わいもまた舌で味わいたいと、直ぐにフォークを動かしてしまふ。

正直、最初はただのコラボレーション店舗かと思っていたが、これは望外な美味しさだ。

「凄く美味しい……どうやってチェーン店でこれ程の味を？」

「このお店って、運営にトランスフォーマー系列の企業が関わって、凄く高度なレヴェルで味にこだわっているらしいですよ？」

「へえ……」

所謂科学的な研究で計算された味というものであろうか？

なんだか不思議な感覚を覚えるが、とにもかくにも味は最高に尽きる。

頬をほころばせながら再び、今度はクリームとパイ生地ごと口に運ぶ。

「そういえば、対戦相手のサンダーズ大付属のこと話してませんでしたね」

優花里さんが思い出したように言う。

みほさんも、タルトに夢中だったのか口をモゴモゴとさせたあとに紅茶を口に含んでふうと一息。

「つい忘れてた……うん、正直かなり厳しいかなあって」

「正直私も一回戦であそこと当たるのだけは嫌ですよ……」

「そんなに強いんですか？」

二人の様子を見て、思わず尋ねると優花里さんがこくりと首肯する。

それに続けて、みほさんが解説を加えてくれた。

「まずTF道のルールの話になるんだけど、高校大会で出場できるト

ランスフォーマー数は全試合一律で最大十体なの」

「うちの倍じゃん！ あれ、でも例外と少ないのかな？」

「それには理由があるんですけど、まずランスフォーマーの維持費が意外と馬鹿にならないからなんです。ウチはまだ少ないですし、生徒会側から資金に色を付けて貰ってますからまだ大丈夫ですけど」

「次に、ここが次の対戦相手で最も重要なんです、ランスフォーマーのある一定の団体が異様に強いからなんです」

「ある団体？」

私の質問に優花里さんは頷き、ここがサンダース大の最も強いところですよと行ってその理由を言う。

「合体戦士です」

「……合体戦士？」

気になったのか、麻子さんがゼリーをおかわりしながら優花里さんに尋ねた。

「ランスフォーマーには合体してより強い戦士になれる一団がいるんです。エアボットやコンピューティコン……色々いますが、これには決まった人員がいらないとすることが出来ません。メンバーに換えが効かないんです」

「意思統一が重要だから、同じような機構でも無理矢理合体したら何が起こるかわからない。そして、高校という立場でその合体戦士のメンバーを全員集めるというのはかなり難しいことなの」

「そこで力になるのが、学校側の資力です。サンダースは凄くリッチな学校なんです。校内のチーム数も一軍二軍三軍と、ランスフォーマーの保有台数も全国一位で人員も潤沢。そんなお金持ちの学校ですから、あの手この手でチームを集められるんですよ。

で、そういう強豪校が一方的に合体戦士を揃えて圧殺っていう試合にならない事態を抑制するために最大数が少なめなんです。でもそのせいで少数勢力で合体戦士に立ち向かうという構図にもなるので、かなり工夫するか強力なランスフォーマーが必要になるんですよ」

「そうなんですか……ところで、サンダース校の保有する合体戦士とは一体？」

私の質問に、みほさんが答える。

「——ビルドロン師団。合体戦士デバスターになる建設重機の六体です」

「……建設重機？　なんか弱そう」

沙織さんの疑問に、優花里さんは首を横に振る。

「合体戦士相手には恐らくウチのメンバーは太刀打ちできませんよ……」

「グリムロックでもか？」

麻子さんの問いに、再び優花里さんは首を横に振って、

「ダイノボット全員でなんとか五分と五分、グリムロックだけじゃあ厳しすぎます」

「……勝てるの？」

「初戦で無名校相手にビルドロン全員を出してこないことを祈るばかりです……」

「実際それしか勝ち目が薄いと思う……」

うーんと頭を抱えながら悩みこむみほさん。

一通り聞いただけだが、想像以上に強いところと当たってしまったていたらしい。

なんだか暗くなってしまった空気を明るくしようとしたのか、素なのか、沙織さんが明るい声で別の話題を始める。

「そういうえば、大会の決勝戦とかってテレビで中継されたりするのかなっ！」

「確かに、夏の甲子園程ではないですがニュースでも話題になったりしますよ」

「ほんと?!　テレビで注目されちゃったりしたらどうしよう!」

「操縦手に注目することは珍しいですよ……?」

優花里さんの回答に、そういうえば時折テレビでも放送していたような気がしなくもない気がしてきた。

なんでもやはり甲子園の方がメジャーなために影に隠れているのだとか。

兎にも角にも、初心者私達が初出場で決勝まで勝ち上がれるとは

正直思ってはいないが、夢のある話だ。

「副隊長？」

突然通路側から声をかけられ、思わず顔を向ける。

そこには、黒い制服に身を包んだ二人の女子学生……彼女たちもTF道関連の人だろうか。

胸元に黒十字の校章が付けてあり、なんだか二人の雰囲気も相まっ  
てかなり威圧的に見える。

銀髪のロングヘアーの女性はなぜだかこちらを——睨んで  
いる？　かなり鬼気迫った様子。

反対にもう一人の茶髪のショートヘアーの女性はただこちらを見  
ているだけで、怖い位何も感じない。

「……お姉ちゃん」

「お姉ちゃん？」

驚いた沙織さんが二人組を凝視する。

私も、驚きで正直何も言えない。

確か、みほさんは家柄の事情で飛び出してきたと聞いたことがある  
が、まさかこんなところで件の人と遭遇してしまうとは。

恐らく姉の方……ただただ無表情を湛えた茶髪の女性が、おもむろ  
に口を開く。

「まだ、TF道をやっていただけなのか」

「……………」

何も感じさせないほどの声でみほさんに問いかけるが、彼女は俯い  
たまま何も言わない。

その様子にイラついたのか、銀髪の女性が怒りをあらわにして、

「そんなのでよくも続けようと思えるわね！　恥知らずもいここよ  
！」

「ちよっと待ってください！　それは言い過ぎですよ！」

優花里さんが感情を露わにし、立ち上がって咎めるが、意に介さず  
といった様子で相手は続ける。

「あら？　じゃあ貴女知ってるの？　そいつが何をしたのか」

「……あれに関しては何も言えません。でも、間違っ  
てはいなかったと思いたいです！」

「間違っ  
てない？ そいつのせいだ」

ヒートアップしそうな女性を、横からお姉さんらしき人が静止する。

「副隊長、それぐらいにしておけ。店と客に迷惑だ」

「隊長……わかりました」

渋々といった様子で引き下がるが、その目からは敵意は抜けていなかった。

すまなかつたとお姉さんは一言だけ残して足早に去っていき、銀髪の人も忌々しそうにこちらをねめつけながらその後が続いて行った。

突然の事に、沈黙する皆。

みほさんが暗い顔をして俯いてしまつて、唯一事情を知っているらしい優花里さんも何を言つていいのかわからないようで、何も言い出せない。

私も沙織さんも、事態を理解できないまま気まずい沈黙が続くと思つたが、

「すまん、もう2つおかわりいいか？」

麻子さんは相変わらずマイペースであつた。

あと、もう空のお皿が三皿並んでるのですが財布は大丈夫でしょうか……？

## Spotlight : BIG CONVOY

爆音と共に、地面から盛大に砂煙が立ち上った。

もうもうと赤茶色の土色を周囲に降り注がせる粉塵の中から、一対のトランスフォーマーが砂煙の尾を引きながら飛び出す。

「ARRGGGGHHHH!!」

禍々しい面構えに鋭い牙を模したモールドが施され、全体的に生物感のある流線型のボディをした青と白のツートンカラーのトランスフォーマーが、右手に携えた剣を相手——ビッグコンボイへと突き出す。

対するビッグコンボイは、操縦手の技量もあり体勢を崩さないように器用にバランスを保ちながら後方へと飛びすさりつつ、両腕の前腕部に格納されたマンモストーンファアを飛び出させ剣を受け止める。

そのままお互い切り結び合いながら勢いよく着地し、状況は膠着するかと思われたが、

「——ゼヤアツ！」

青いトランスフォーマーが勢いよく剣を引いた。

すると、頑丈なマンモストーンファアは甲高い金属音をあげ、周囲に金属片をまき散らす。

ビッグコンボイがチラリと確認すると、左手のトンファアには真つ直ぐな切れ込みが入れられ、完全に使い物にならなくなってしまっていた。

相手の両刃の剣には、ノコギリ状の鋭利な刃が連なっており、先程の斬り合いの際にその自慢の刃で一気にトンファアを削られてしまったのだ。

相手は好機とみたのか、そのまま剣を構えて突撃してくる。

「貫った！」

「——ハッッ！」

徒手空拳となった左側から凄まじい速度で刃が迫ってくるが、ここが勝機だと臆せず攻める。

相手は最後の一撃と油断し、これで決着にしようと功を焦った。

先程よりもやや大ぶりになった剣筋を見切り、残る右手のトンファーを正面からぶつける。

一瞬相手が動揺したが、もう片方も使い物にできなくしようと、そのまま剣を引く。

甲高い音と共に、右手のトンファーも一気に削りとられ、金属粉を出しながら今度は完全に切り落とされた。

ビッグキャノンは今回持ち込んでいないが、そもそもここまで接敵されては取り回しもきかないし、ハーケンミサイルを用いても、この距離で近距離武器を持った相手に使ってもすぐさまワイヤーを切断されるか接近戦のデスマッチ。

加えて唯一の近接武器のトンファーも使い物にならない。

万事休すに思えるこの状況。

だが、こういった事態を回避する唯一の方法がある。

それは、

「甘いッ！」

「……?! グホッ!!」

己の肉体だけである。

振り抜いて完全に剣を振り下ろした状態では、自慢の剣もただの大きな重石に過ぎない。

そのガラ空きの顔面に、左手で思い切り掌底打ちを叩き込んだのだ。

通常ならあまり効果はないこの手法だが、この左手はただの拳ではない。

なぜなら、彼の左手は強力なビッグキャノンの反動さえ押さえ込める程のパワフルな義手であるからだ。

凄まじい衝撃でブレインを揺さぶられ、相手のオートジャイロはその機能を麻痺させ一種の脳震盪に状態になった。

先程までの剣を振るう者の姿勢だった体は、フラリフラリと肩を大きく揺らしたかと思うと、次の瞬間にはズシンと音を立てて前のめりに倒れ込んだ。

そして、小さな音と共に背中からフラッグをはためかせる。



「―― 訓練終了！」

小さな白い旗を確認し、終了の合図をすると、訓練場全体に甲高いサイレンが鳴り響いた。

「教官、今日も素晴らしい活躍でありました！ 特に最後のシャープエッジさんとの格闘戦、あの動きは是非今後の参考にさせていただきます！」

「そうか、それならよかった。あと蝶野一尉、私はもう『教官』ではなく『ビッグコンボイ』だ」

「あ、はいっ！ 以後気をつけますビッグコンボイ！」

訓練後のブリーフィングルーム。椅子に座る私の正面で人間サイズの小さな椅子に座っている濃緑色のスーツを身に纏った女性――

蝶野亜美一尉がキチリと敬礼をした。

もう何度目になるかわからない注意だが、何度言っても彼女は一向にこの癖を直すことが出来ないようだ。

もう生徒という年齢でもないだろうに、いつまでも新入気分では困る。

「海洋保護が本職のシャープエッジがここにいるのもあと少しだけだ、彼から吸収できることはまだまだある。 今後も教導隊の一員として頑張ってくれ」

「了解しました！ それでは今日の訓練結果をまとめなければならぬので、失礼します！」

「ああ、無理はしないように」

はいっと快活な返事をする、足早に蝶野はブリーフィングルームを後にする。

誰もいなくなったブリーフィングルームで一人心地るのもなんなので、私も直ぐにブリーフィングルームを後にした。

今は、平和だ。

かつての剣呑な日々を過ごした頃には考えられないほどに、毎日が平穩に過ぎていく。

時の流れが速く感じられる、争いのない生活には大分慣れた。

流れ者だった頃の自由気ままな生活に懐かしさを感じなくもないが、訓練生や部下と一緒に仕事をして、叱つたりお互いに残業の苦難を乗り越えたりするのは一人では味わえない感覚だ。

満ち足りている……のだろう。

毎日の中で、つい古い生徒達……いや、もう友人達というべきなのだろうか。

一際心に残る生徒達のことを思い出すことが増えた。

ブレイクやスタンピー、コーラーダやロングトラックにハイソラッド……それにマツハキックも、それぞれが自分達で道を選んで、俺の下から卒業していったあの日が懐かしい。

皆は今、何をしているのだろうか。

俺が教えたことが、今の彼らの役に立っているだろうか。

—— 私らしくもないか。

なんせ最後の最後で俺の言うことを聞かなかった生徒達だ。

きつと俺が予想も付かないような騒がしい日々を過ごしていることだろう。

仕事部屋と私室を兼ねた部屋には、基本的に仕事用の資料や機材が並べてあるだけだ。

酒や食べ物などの娯楽の品は置いていないので、時折部下や生徒に私室がないのではないかと噂されているのを耳にする程だ。

だが、この部屋に一つだけ。俺の個人的な物が置かれている。

執務用のデスクの棚の一つ、鍵が掛けられていて殆ど開けられることのない引き出しの中にはデータパッドがしまい込んである。

今日は、なんとなくそれを取り出していた。

電源を入れると企業名のロゴが浮かび上がり、しばらくすると、いくつかの整理された画像・動画ファイルが表示される。

いつからか、ナビ子の奴が思い出は残すべきだということ写真や動画を撮影しては、それをこのデータパッドに集め出したのが始まりだったが、今では俺の数少ない私物の一つだ。

丁寧に日付やカテゴリに分けたフォルダの中を開いていくと、懐かしい顔が幾つも表示されどこかセンチメンタルな気分になる。

そしていくつかのフォルダの内のあるフォルダを開くと、収納されていたデータのアイコンが表示された。

ファイル名は『TF道 生徒』という簡素なものだが、詰まっているデータは俺にとっては大切な物だ。

追想にふけりながら、何個かファイルを流し見していると、親しみ深い顔を見つける。

画面には、今もまだ幼い顔立ちで、まだ今以上に垢抜けていなかった頃の蝶野の画像が映し出されていた。

当時は今以上に、まあ言うのも何だが、はねっ返りというかおてんば娘だった。

分隊長という立場にも関わらず、独特な擬音ばかりを用いた指示をする彼女に、同乗者のメンバーが酷く苦勞していた。

俺が何度言ってもアレだけは直らなかつた。

恐らく彼女の説明方法はマツハキツクのイビキを止めるのと同程度の労力を要することだろう。

最善は尽くしたが、アレも蝶野の持ち味だと諦め気味に妥協したのは忘れられない。

今となつてはある程度はまともにはなつたものの、もう少しだけ聞き手のことを考えることができればよりよい教育者になれるだろう。

数年前まで学生だった彼女が、今ではTF道を支える者として出世街道を邁進している。

その内、今の教導隊としての立場からも卒業し、さらなる高みへと向かっていくのだろう。

少し寂しくはあるけれど、彼女のポジティブで解りやすい性格は周囲からの好感も得やすい。

きっと彼女ならTF道をより良い方向へと導いてくれるだろう。

……俺の生徒である間にあの擬音ばかりの独特な会話を矯正できなかったことが悔やまれるが。

蝶野のデータを格納し、再び別の世代の画像を流し見し始める。

だが、その途中で気になることを思い出し、ファイル内検索をかける。

『西住』のキーワードを入力すると、それなりに多くの検索結果が提示された。

フォルダには何代ものTF道の隆盛を支えた西住流師範代の若かりし頃の姿や、往年の頃に撮った写真が納められている。

その中でも、特に新しいデータに目を通す。

長い黒髪をした、鋭い目つきの女性と、どこかその女性に似た茶髪の二人の女子。

現西住流当主……西住しほと、その二人の娘達。

まほとみほ……何故か彼女達の事を思い出すと、不思議とため息しか出てこなかった。

俺が彼女達とであったのは、まだ小学校にも上がる前の頃からだ。

黎明期から西住流当主との交流があった俺は、その後継者と幼い頃から顔を合わせる機会が多かった。

もちろんしほの幼い頃も知ってはいた……子どもの頃から酷く真面目な娘だった。

娘の方は、長女は随分と母親にてはいたものの、あまり内心を語ることはないのはこの頃からだった。だが身内、特に妹には少しだけ甘いところがあった。

逆に妹の方は、まったくといっていい程母親に似ていなかった。

気が弱く、臆病で泣き虫で甘えん坊。初対面の印象はそんなところだった。

しほは、まあ端的に言っただけ子育てという面ではあまりよろしくはなく、我が子に対しては当主として厳しく当たっていたために、みほは温和な常夫によくなくなっていたのを覚えている。

画面に表示された画像には、幼い頃の姉妹や若い頃のしほや常夫、家族全員の何気ないひとときの団欒が映っていた。

みほは私を怖がって泣いていて、まほやしほがそれを後ろから笑顔で見守っており（口では色々言っていた気がするが）、みほの横で常夫が笑いながらピースモードの俺の鼻を撫でている。

ちよつと不器用な奴が多くはあったが、その様子は何処にでも見られるような、ごく普通の家族のワンシーン。

ボタンの掛け違い・歯車が狂った・不幸なすれ違い……どう表現してよいのか、私には判断がつかないが、この一家の現状に関してはどうしてこんなことになってしまったのかと思わずにはいられなかった。

……いや、そもそも何れはこうなることは決まっていたのかもしれない。

薄々感づいていたが、みほは西住流に向いてはいない娘だった。

—— 西住流は、前へ進む流派である。

撃てば必中、守りは固く、進む姿は乱れ無し

TF道の黎明期から存在する西住流は、この解りやすくも堂々としたモットーを掲げてきた。

敵を全体で圧倒し、叩き潰す。

この手法で、勝つことを覚えてきた彼の流派は、まさに圧巻だった。堂々とした姿で勝利を掲げる優勝旗を携える光景は、次第に周囲からの尊敬や畏怖を集めることとなり、西住流の名はTF道の世に響き渡る存在になった。

だが、次第にその周囲からの期待は流派の内部にまで染みこんでいく。

勝利至上主義—— 西住流なら勝つことは当然。 西住流なら

逃げることはしない。 西住流なら小手先の技を力で押し通す……力で技を圧倒するという、王道であるが、悪く言えば安易なこの方法は、流派の柔軟性をすり減らし、やがては流派当主にまでかくあるべしとその在り方を押し付けるまでになってしまった。

時代は、西住流を取り残し始めていた。

—— 視点を一家族に戻そう。

母親のしほはその真面目な性根が西住流に酷くマッチしていたし、長女のまほも母親同様に西住流に同調することができる娘だった。

だが次女のみほは……不幸な、いや、西住流に新しい風を吹き込む

ことが出来る可能性を持った子だった。

気の弱い子ではあったが、あの柔軟な発想力や周囲から好かれる性質は、言うのもなんだがいままでの西住流当主にはなかった美点だった。

しほは弱みを見せない奴だったし、まほは立場というのものもあるが、西住流の後継者としての立場を重視するところがあった。

そんな中で、あの子の存在は変わっていた。恐らく、というか十中八九父親に似たのだろう。樂觀的な所や屈託のない所は似なかったようだが。

自由で、気が弱いけど明るいところがあって、気を遣う子ことが上手だった彼女は、きつと凝り固まった西住流を変えるのに十二分の素質があった。

まほは、そんな事をさせようとは考えてはいなかったようだが……。

だが、時は彼女達が進む道を自ら選び取る事を許してはくれなかった。

あの不幸な出来事は、まだ若く繊細で不安定な年頃の姉妹には辛すぎる出来事だった。

しほの奴へ事情を聞きに行ったときは、相変わらずすました顔をして割り切った様子をしてはいたが、恐らく内心では動揺していたに違いない。

まほの方も、相変わらず表情に出してはいなかったが、苦しんでいたことだろう。

常夫の奴は婿養子であったし、家での立場という理由からあまり力になれないことを悔やんでいた。

兎も角、文字通り袖に縋る勢いで常夫が家の関係者に押し倒した後での頼みということもあって、みほの願い通り彼女はTF道から離れた高校へと編入することとなった。

私がしほ達に会いに行ったときには、もうすでに荷物をまとめて出て行ってしまった後だったので、当時の彼女に会うことができなかった。

だが、相当酷い状態だったのは想像に難くない。

追い詰められている彼女に何も声をかけてやることも出来なかったのを、悔やんだのを覚えている。

だがそんな私の心配をよそに、先日の大洗の資料を見たときには思わずフェイスプレートがズレるかと思う勢いで嘔き出した。

一昔前に廃部になったTF道を復興させるという事で訓練を付けて欲しいという依頼が大洗女子学園から舞い込み、訓練指導の経験が浅い蝶野の付き添いがてら仕事の様子を監査しようと思い、たまたま大洗のTF道参加者の資料を除いてみると、まさかみほの名前があるとは思ひもしなかったからだ。

正直、私には違和感しか感じられなかったが……。

兎も角彼女なりに前向きに進んでいるのだろうと思い、現地に足を運んで様子を見てみれば、やはり何かしら事情があつて参加させられていたのだろう。

蝶野が、前々から発言には気をつけろと言っておいたのにも関わらず、無神経に家の話題を持ち出したときは、露骨に嫌な顔をしていた。実際に、訓練後に二人で話したときには、かなりあの件が尾を引いていることがわかった。

そんなに簡単に振り切れる物でもないだろう。

だが、そんな様子でも良い学友に恵まれているようで安心した。人に好かれる才は本人が苦難の下にあつても良い巡り合わせを与えてくれたようだ。

願うことなら、彼女がもう一度胸を張って、笑顔で家の敷居をまたぐことが出来る日が来れば一番良いが……。

いや、それよりもTF道に復帰した事をしほに連絡したのだろうか……？

していないとすれば相当――。

『RIIIIIIP』

私室のドアアラームが鳴り、手元のパネルを操作する。

すると操作に連動して机の画面のグラフィックモニターが作動し、訪問者の姿を映し出す。

キツチリと濃緑色の制服を着こなし、キリリとした目元が特徴的な女性—— 蝶野亜美一尉だった。

『どうかしたか蝶野一尉？ もう今日の訓練は終わったはずだが』

『はっ！ 教官とお食事でもと思ひまして伺った次第です！』

「食事？ ああ……今日はもう用事もない、了解した」

『ありがとうございます！ それでは食堂でお待ちしております！』

「わかった。 あと、いつも言っているが教官」

プツンという音と共に、画面に大きくCall Endedの文字が表示された。

相変らず人の話しを聞かない奴だと、ついため息を漏らしながら、データパッドを引き出しに仕舞い席を立った。